

平成の転生者(仮)

初任者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平成に死んだ男は新たな人生を得る。それが彼にとって好ましいものか、そうではないか。それはまだ神ですら知らない。

オリジナル主人公が、色々な作品の中で大暴れする予定。

(初2次創作です。よろしくお願いたします)

目次

第1章―デビルサバイバー2―	1	第2章第5話	154
第1章第1話	1	第3章―Black Lagoon―	
第1章第2話	14	第3章第1話	175
第1章第3話	29	第3章第2話	191
第1章第4話	48	第3章第3話	205
第1章第5話	65	第3章第4話	216
第1章第6話	79	第3章第5話	228
第2章―デビルサバイバー2 vs ??―		第4章―リリカルなのは―	
第2章第1話	90	第4章第1話	241
第2章第2話	105	第4章第2話	255
第2章第3話	120	第4章第3話	266
第2章第4話	139	第4章第4話	282
		第5章―戦姫絶唱シンフォギア―	

第6章第4話	417
第6章第3話	405
第6章第2話	393
第6章第1話	382
第6章ーリリカルなのはー	
第5章第6話	369
第5章第5話	352
第5章第4話	339
第5章第3話	325
第5章第2話	312
第5章第1話	296

第1章ーデビルサバイバー2ー

第1章第1話

第1章

ーデビルサバイバー2ー

第1話

ーその男、平成のー

ーーー平成31年4月25日7時58分。

これは俺が……いや、”前世の俺”が死んだ死亡時刻である。

原因は通り魔に刃物で刺されたことによる出血死。あつけない死に方だった。

ーーーだが、そこで死んで終わりのはずの人生は狂った。

いたずらの神を名乗る声に導かれ、俺は新たな生命として、記憶を持ったまま転生した。世に言うところの転生者と言うやつだろう。

最近の小説のごとく特典を与えられた俺は、しかしその特典をまともに使うことなく第2の人生を過ごしていた。

——そう、過ごしていたんだ。

○東京○

○地下鉄の駅○

「は、はは、一体なんだこれ」

小学6年生の少年こと俺【八神 総司】はボロボロになった地下鉄の駅を見渡しながら、思わず呟く。

電車は線路を飛び出し、壁は崩れ、電線はショートして火花を飛ばし、いくつもの死体があちらこちらに散乱している。

「……………は、早く出て助けを呼ばないと!!?」

俺は慌てて出口に向かう。

「うっ」

しかし、俺はその足を止める。それは何故か？

「ーググルル」

” 化け物 ” がいた。

「【闘鬼：コボルト】?!?」

それはゲーム【デビルサバイバー】のシリーズに出てくる【悪魔】と呼ばれるモンスターがいた。それも3体でもある。

「はっ!!?」

俺は口を塞ぎ、物陰に隠れる。

「(戦えなくはないが、こんなところで暴れればどう崩れるか分かったもんじゃねえ)」

俺は隠れながらソロソロと出口へと向かう。

「——来ないで!!?」

「あ?」

女の声が響き渡る。

そして青い光が地下鉄の中を照らす。

「——ちいつ!!?」

俺は隠れるのをやめて走り出す。

「くそつたれえええええ!!?」

「ゴギャ!!?」

俺はコボルト1体の頭に飛び膝蹴りを食らわせ、そのまま着地し、走り出す。

「さっさと立て!!?」

「え、あ」

地面に倒れていた女子高校生が混乱しながらも、やっと立ち上がる。

「あれはあんたの仲魔か?」

「え?」

背後で暴れている【邪鬼：オーガ】を指差す。

「まあいい、さつきとトズラさせてもらおう。そっちの兄ちゃん達も手を貸してくれ」
「あ、はい」

男子高校生2人が瓦礫の段差を登るのを手伝い、俺と女子高校生が段差を登りきる。

「ほら、走るぞ。いっそげー」

「余裕だな!?!」

○駅の外○

「ふう、ひとまず逃げ切れた……………」

「えつと、君は……………」

ウサ耳フード?の服を着た男子高校生が俺に問いかける。

「八神 総司。見ての通り小学生です。さつきは緊急だったので言葉遣いが荒れてしま

いすみません」

「あ、いや、助かったよ。俺は【久世 響】」

俺【志島 大地】」

「あ、【新田 維緒】です」

俺達は挨拶を交わす。

「自分は救急隊に報告してきますのでこれで失礼します」

「あ、ああ」

俺は学生達と別れ、その場を立ち去る。

「(クソ、こんな事になるなら家族を連れてきたんだが)」

俺は救急隊を探しながら頭の中で状況を整理する。

「(間違いない。この世界は【デビルサバイバー2】の世界だ)」

主人公は先ほど共に脱出した久世 響である。

「問題はこのゲームのストーリー上日本の一部地域以外が【無】に吞まれて消滅する事。そして7日間でその一部地域も吞まれてこの世界が消える事」

世界の滅亡を阻止するにはただ一つ。ゲームのようにクリアすること。

「(そうすれば家族も帰ってくる。やるしかない)」

ストーリーに介入しなければ、家族どころか俺すら消滅する。やるしかない。

「よし、やるぞー」

「おい君。少しいいか？」

振り返ると「JP, s (ジプス)」とか書かれた黄色の制服を着た男が俺の右肩に手を乗せていた。

「oh……………」

俺はドナドナされていった。多分俺の目は死んだ魚のようだったであろう。

……………まあ、結果的には悪くなかったのだが。

——J P, s (ジプス)。

正式名称、[japan meteorological agency, prescribed geomagnetism research department]。日本名称で【気象庁・指定地磁気調査部】は、霊的に日本を守護する秘密国防組織である。

昔から悪魔の存在を知っており、それを使役してきた。言うなれば現代の陰陽道組織みたいなものだ。

そして、J P, sはデビルサバイバー2の世界において、世界を救うために戦う組織であった。

しかし、戦うためとはいえ、物資の独占を行なったり、被災者の救済を積極的に行わなかったために、国民から大きい反発を受けた組織でもある。

特に局長である「峰津院 大和」は実力主義思想であり、自分の望む世界のためなら何人でも殺せる人間である。

正直関わりたくないが、関わらなければいけない厄介な組織であった。

○とある公園○

「ふう、ここです少し休憩しよう」

J P, sの聴取から解放された俺は、公園の花壇に座る。

なお、聴取には正直に狼人間の頭にジャンピングキックを決めたと言ったら、大丈夫かこいつという視線を送られた。

「さて、少し状況の整理をするか」

俺は現状の情報をまとめる。

デビルサバイバー2は「無の侵食」という世界を滅ぼす攻撃により、世界が滅ぶ7日間を「悪魔召喚プログラム」と「死に顔動画アプリ：ニカイア」を使い。最終的には世界を救うゲームであった。

そして、7日間の1日目である「憂鬱の日曜日」は、先程述べた無の侵食により世界の大半が無に飲まれ消えてしまおうが、日本はとある結界により建物などに大ダメージを受けるが防御に成功した。

しかし、世界の管理人とされる「ポラリス」により、「セプテントリオン」と呼ばれる刺客が試練として差し向けられた。

そして、1日目の刺客であるセプテントリオン「ドウベ」は……正直言つて主人公達でないと倒せないだろう。

「……」までで、確実に言える事は1つ……か」

日本は結界により生き残ったとはいえ、無に飲まれて存在ごと消えてしまった土地も

ある。結界がない土地は消えてしまうのだ。

「あの土地には結界はなさそうだった。消滅、してるだろうな」

俺は自分の言葉を噛みしめる。

「……世界を、家族を救うにはクリアするしか、ない!!？」

俺は改めて覚悟を決める。

「幸いにも特典は使える。軽い助けにはなるはずだ」

俺は再び立ち上がる。

「主人公達と合流しないと」

俺は歩き始める。全ては世界を救い、家族を取り戻すために。

第1章第2話

第1章

―デビルサバイバー2―

第2話

―ドウベ―

俺の特典は日常生活ではほぼ役に立ちそうもないチカラである。

何故か？ 簡単だ。例えば普通の一般的日本人が刀を渡されて何に使えというのか？ 犯罪でも起こせとでもいうのか？ まあ、まず日常生活ではほぼ部屋の片隅で埃を被ることになるだろう。

故に、俺はこの特典を使った事があるのは確認のための1回のみであった。特訓とかも特になしていなかった。何せ必要なかったのだから。

○新橋駅周辺○

「まさか、その事を、恨むことになるとは、な」

俺は片膝を地面につきながら、何とか言葉を吐き出す。

「お、おい!!?」

久世が俺の肩に手を乗せる。

「構うな。生きる事だけ、考えろ」

俺は何とか立ち上がる。

周囲は爆発により死者が多数地面に転がっている。おまけにその中心部でアイスクリームのコーンの上に丸い何かが浮いているような化け物——『ドウベ』が、頭？から弾丸のようなものを吐き出してさらに被害を拡大させている。

「く、そ」

頭がふらふらする。どうやら頭を打ったようだ。体の感覚も鈍い。

「だけど、やらなきや、いかんだろ」

俺はケータイを構えた。

「召喚!!?」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○久世 響side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

新橋駅周辺の広場のような場所で休んでいた俺達の目の前に、それは降ってきた。

アイスクリームのコーンの上に何かが浮いているようなそれは、コーンの部分をくると動かしていた。

「何だあれ？」

「あら、どうしたの？」

広場のような場所にいた人間達が、ざわめく。

そして、浮いている頭のような部分が、ぶくんぶくと膨らんでゆく。

「あ、あれって」

「やばくないか？」

新田さんと大地が顔に恐怖を浮かべる。

「危険です!!? みんな逃げてください!!?」

人混みの中で、女性が抱えていた犬が逃げ出す。その瞬間であった。

「逃げるのはあんたらもだ!!?」

「えっ？ あ、ああ」

俺達は腕を引っ張られ、その場から逃げる。

——そして。

「ぐう!!?」

「きやあ!!?」

「うあつ!!?」

それは大爆発を起こし、衝撃波に俺達は地面に倒れる。

「ぐう!!?」

俺の隣を何かが転がる音がする。

「はっ、新田さん!!?」

俺は横で倒れていた新田さんに声をかける。

「だ、大丈夫」

新田さんが立ち上がる。

「ぐっ」

その少し先で、小さな体が膝をついていた。

俺はその姿に見覚えがあった。地下鉄で会った少年の八神 総司であった。

「お、おい!!?」

俺は八神君の肩に手を乗せ、声をかける。

「構うな。生きる事だけ、考えろ」

八神君はすぐに立ち上がる。その背中には親指サイズのタイルらしき破片が刺さっている上に、顔には頭から垂れたであろう血液が流れていた。

「やらなきや、いかんだろ」

八神君はケータイを構える。

「……まさか。」

「召喚!!?」

目の前に魔法陣が現れ、それは現れる。

「【邪神：パズス】!!?」

それはライオンの頭を持つ人型の化け物であった。

「ぐっ、い、意識が」

八神君は体をふらふらさせている。どうやらダメージが大きかったみたいだ。

「せ、め、て、いち、撃」

ライオンの頭を持つ化け物が片手を爆発するコーンに向ける。

「うっ」

しかし、八神君はそのまま倒れてしまい。ライオンの頭を持つ化け物も消える。

「お、おい、八神君!!？」

八神君はぐったりし、起きる様子はない。明らかに危険な状態だ。

「くっ、大地は☒」

「う、うあつ」

大地がどこかに走り去っていく。

そして、コーンの化け物が弾丸のようなものの射出を開始する。

「何だこれ……………」

「あ、悪魔」

その言葉に、俺ははっと思い出す。

「新田さん!!? 召喚アプリ!!?」

「え?」

後から言えば、その判断は正しかった。

アプリによって召喚された悪鬼のような悪魔は俺達を守ってくれた。しかし、守るのが精一杯でとてもではないが反撃できそうにない。

——そして、その瞬間であった。

ピロつとなる携帯。そして「死に顔動画がアップされたよ」の声。そしてそしてそして………親友の大地の死に顔動画。

「こ、これ、大地」

同時に、コーンの化け物の衝撃波により、俺達を守ってくれた悪鬼のような悪魔が消える。

「ま、不味い!!?」

——その瞬間、車の走る音が耳に入り、振り返る。

そこにはトラックとトラックに乗り込んだ大地がいて。

「2人共、今助ける!!?」

走り出すトラック。

「し、志島君!!?」

「大地!!?」

コーンの化け物に突っ込むトラック。爆発するトラック。

「だ、大地いいいい!!?」

——そして、それは起きた。

召喚陣が現れ、青い光と共に白い虎が現れる。

『ウオオオオオ!!?』

白い虎が唸り声を上げる。

「そいつを倒せ!!？」

白い虎が走り出す。

——結果から言えば白い虎は、圧倒的戦闘能力でコーンの化け物を撃破した。

「や、やったのか？」

ケータイを見ると、そこにはさっきの白い虎が描かれており、【神獣・ジャツコ】とも書かれていた。

「消えた……………」

はっと俺はトラックの残骸に向かう。

「大地……………」

「おーい、響ー」

「え？」

周囲を見渡すと、妖精に襟を引っ張られ空を飛ぶ大地がいた。

「大地!!?」

俺は降りてくる大地に駆け寄り無事を確認する。

「あ、八神君!!?」

俺達は八神君に駆け寄る。頭から血を流しており、急いで病院に行く必要があるそうであった。

「響、早く病院に連れて行かないと!!?」

「でも、どうやって!!?」

「2人共落ち着いて」

交通網は麻痺し、こんな大事件が起きたのに警察1人来そうな気配はない。こんな状態では病院もまともに機能してないかもしれない。

——その瞬間、俺達はライトに照らされる。

「「うっ
!!?」」

「……………我々は政府の特務機構指定地磁気調査部JP;s。君たちを拘束する」

女性の声が妙に響く。

「……………ジプス?」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○sideEND○

☆☆☆☆☆☆☆☆

第1章第3話

第1章

ーデビルサバイバー2ー

第3話

ー寝坊ー

家の中で幼女が遊んでいる。

どうやらおままごとのようだ。

笑顔で楽しそうにしている。

正直、俺には何が楽しいのかよくわからない。

『にーにもやろ?』

幼女がこてんと笑顔で首を横に傾ける。

「仕方ないな」

俺はやれやれと幼女の前に進む。いや、進もうとした。

「えっ?」

しかし、その足は固まったかのように動かない。足元には特に何も無いのに。

「な、何だこれ!?」

そして、視界の風景が変わっていく。家は消え、闇に飲まれていく。おまけに息も苦しくなり、声が出ない。

『にーにーにーにー!』

幼女もその闇に消えていく。

【 ！？ 】 【 ！？ 】

俺は幼女の名前を叫ぶ。 が声にならない。

「(必ず、必ず助けるから!!?)」

俺は必死に手を闇の中に伸ばす。

○??○

「たす、ける、から……………」

俺はゆっくりと目を開ける。

「ハハ、ハハ…」

周囲を見渡すとどうやら治療を受けていたらしく。周囲は医療機器が置かれていた。俺はどうやらこの部屋でベットに横になり治療を受けていたようだ。

「一体………?」

瞬間、部屋が揺れる。

「うっ!?」

俺は床に落ちる。

「ぐうっ」

俺は痛みに悶える。

「《常世の祈り》」

俺は魔法スキルを使い、体を治療する。

「……俺、八神 総司の特典の一つは“デビルサバイバー2のプレイヤーデータを上書きすること”である。」

「つまり、俺は元々悪魔を使役しており、ゲーム内でのスキルと呼ばれる魔法や人間離れた技を使えるのだ。」

「さて、と」

俺は立ち上がり、腕に刺さった点滴を無理やり抜く。

「まず……は……なんだ？」

俺は廊下に出る。

「急げ!!?」

「上の部隊に………!!?」

黄色い制服を着たJP， S隊員達が動き回っていた。

「これは、敵、か!!?」

意識が一気に覚醒する。

「ちっ!!?」

俺は施設の中を走り出した。

○外○

「はあ、はあ」

外に出た俺は、その光景に絶句した。

「あれ、は」

青いマンボウのような体を持つ、しかし巨大な化け物——セプテントリオンの1体である【メラク】であった。

「つてこことはまさか!?？」

どうやら俺は壮大に寝坊したようだ。

「ちいい!!? — 先ずタワーだ!!?」

俺はケータイを構える。

「召喚!!?」 【墮天使：デカラビア】!!?」

俺の召喚に答え、目の前に星型の悪魔、デカラビアが召喚される。

「飛ベデカラビア!!？」

俺はデカラビアに乗り込み、空へと飛ぶ。体の小さい小学生だからこそできる芸当だろう。

「ゲームだとあんなに大きいとは感じなかったがな……!!？」

やはり、ゲームとリアルは違うようだ。

「まあ、何であれ……タワーには手出しさせんぞ」

背後にそびえ立つ【通天閣】は、日本を守る霊的結界の1つである。あれが破壊されれば日本の安全圏はさらに狭まり、日本の国土が、人が、全てが無に飲み込まれる。

「ここは死守する!!？」

しばらく飛んでいると、大量の骸骨頭の鳥の群れが見えてくる。

「ん……………あれは、【霊鳥：イツマデ】か？」

無論、悪魔であるが……………どうやらメラクと戦っているようだ。

「JP， sの召喚した悪魔達か……………だが」

瞬間、光と共にイツマデの群れと地面が吹き飛ばされる。

「くっ……………ちっ、全滅か(流石にレベルの低いイツマデでは時間稼ぎにもならなかったか)」

多分ではあるが、吹き飛ばされた地面にはJP， sの部隊が展開していたのだろう。そうでもなければわざわざ吹き飛ばす必要はない。

「メラクの攻撃は氷のビームと爆発する子機だったはず。ならば先ずは子機から処理させてもらおう!!?」

俺は再びケータイを構える。

「行け、パズス!!?」

召喚に答え、パズスが召喚陣から現れる。

「先行して子機を破壊しろ!!?」

パズスが頷き、爆発する子機の破壊に向かう。

「さてはて………寝坊した分、しっかりと働かないとな」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○JP, s 大阪本部○

「う、【梅田防衛ライン】全滅」

オペレーターの悲痛な報告がJP, sの大阪本部司令官の耳に入る。

「くっ、霊的防御の回復はどうだ？」

「現在10%まで回復」

「この短時間でよくやっている」

「ローメラク、魔力反応増大!!？」

「回避急げ!!？」

「ま、間に合いません!!？」

メラクから、巨大なビームが発射される。

それは色々なものを巻き込みながら、通天閣へと一直線に向かっていく。

——しかし、通天閣にそのビームが当たるとはなかった。

「——っ!!? 通天閣前で悪魔召喚反応確認!!?」

「何だと!!?」

「解析完了!!? これは……………!!?」
「天使：メタトロン」です!!?」

「馬鹿な!!? そんな超上級の悪魔を誰が……………!!? 局長でも不可能だぞ!!?」

「メタトロンがその身をもってメラクの攻撃を受け止めています!!?」

そう、巨大な体を持つ天使メタトロンが、その身をもってメラクのビームを受け止めていたのだ。これにより通天閣への攻撃は無効化されていた。

「勝てる……………勝てるぞ!!? 人類は!!?」

「「おおおお!!?」」

天使メタトロンの活躍により、JP'sの士気は否応なく上がっていた。

「メタトロンの遅れをとるな!!？」

○大阪上空○

無論と言うべきか、天使：メタトロンを召喚したのは八神 総司その人であった。
メタトロンの巨大な体と全属性に対する耐性任せの防御であった。

「とはいえ、少しまずいな」

八神 総司は焦った表情で呟く。

「被害が大きすぎる。ここでこんなに損耗したらこの後が持たない」

八神 総司は子機を破壊し続けるパズスト、引き続きタワーの前に座すメタトロンを

見る。

「奥の手は流石に隠しておきたいが」

実のところを言えば、八神 総司の特典であるデビルサバイバー2のデータは何回かクリアデータのあるデータであり、おまけに最終局面でセーブしたデータを使っていた。

——つまり、八神 総司の奥の手にはもっと高レベルの悪魔がいるのだ。

パズスもデカラビアも上級悪魔を作り出すために集めた素材悪魔の残りでしかなかったのだ。

「しかし、さてはて……………どう攻めるか？」

その時、空に援軍が現れる。

【天使：エンジェル】の軍団であった。

「JP， sの増援か……………しかし」

そう、しかしメラクに対して圧倒的なまでに戦力不足であった。

「……………よく考えたら、下手に作戦がわからん俺より、作戦を指揮しているJ P， sを支援する方が建設的か」

八神 総司はデカラビアに視線を向ける。

「デカラビア、エンジェル達を支援しろーメタトロン!!? 《メギドラオン》を放て!!?。」

デカラビアがメラク本体を攻撃しながら周囲の子機を破壊し始め、通天閣の前にいたメタトロンがその手の中に神の炎を宿す。

「ー焼き尽くせ!!?。」

神の炎が放たれ、神の炎がメラクの体にあたり大爆発を起こす。

「続ける!!? メタトロン!!?」

その瞬間、俺は爆風に飲まれた。

○近くのビルの屋上○

「あれは、八神君?」

そこにいたのは新田 維緒であった。彼女は通天閣防衛戦への参戦のため、この場所に護衛のJP，s 隊員と共に配備されていた。

しかし、ある種これは仕方なかった。JP，s が使う悪魔よりも久世 響や新田 維緒などの民間人の使う悪魔の方が数段強力であった。そのため人類滅亡のカウントダウンが始まった現在………高校生だからと先頭に投じない訳にはいかなかったのである。

「八神君、治療を受けていたはずじゃあ!?？」

そう、八神 総司は間違ひなく重傷であった。絶対安静で数ヶ月というレベルである。回復スキルがなければ今も個室の床で這いずっていたであろう。

なお、八神 総司の負傷は頭蓋骨にヒビが入っていた上に上半身下半身の骨に所々ヒビが入っていたレベルである。

「あんな体で……………」

その瞬間、メラクを何かが襲う。

「あれは、響君のビヤツコ!!?？」

新田 維緒はビルの端から地上を見る。

「響くーん!!?？」

その後、メラクは久世 響のビヤッコによつてトドメを刺されたのであった。

○数時間後○

○JP, s 大阪本部○

「え？また八神君意識不明なんですか？」

新田 維緒は目の前のJP, s 幹部〔迫 真琴〕に問いかける。

「ああ、メラクの子機の接近に気づかなかつたようだな。ギリギリで迎撃して爆風に巻き込まれたらしい。まあ、最初の負傷よりは軽傷だから早く回復できるだろう。子供だというのによくやってくれる」

「そ、そうですか」

こうして、八神 総司は二度目の意識不明に突入したのだった。

第1章第4話

第1章

ーデビルサバイバー2ー

第4話

ー悪魔使い八神 総司ー

部屋の中で大人がゲームでピコピコ遊んでいる。

スーツ姿であるため仕事前か終わった後にそのまま遊んでいるのだろう。

『よし、これでメタトロンの強化完了だな。次はもつと弱いのを強くするか。コボルトで無双とか面白そうだな』

大人が、そう言った後にコーヒーを飲む。

『あ、そろそろ飯にするか』

大人は立ち上がり、冷蔵庫の中を覗く。

『あれ？ ああ、そうか。確か最後に全部使って炒飯もどきにしたんだっけな』

冷蔵庫の中にはサワーの缶が数本と大きな2Lのミネラルウォーターしか入ってなかった。

『仕方ない。近くのコンビニで手早く済ませるか』

大人は財布とゲーム片手に玄関へと向かう。

ーーーーダメだ。

ーーーー止めろ。

ーーーー飯ぐらい我慢しろ!!?

ーーーー今家から出るな!!?

しかし、そんな俺の声を無視して大人は玄関の外へ出る。

ーードン。

ーーブス。

『え?』

いきなりビルの廊下を走ってきた人間と大人がぶつかり、ぶつかった人間は走り去っていく。

『あ』

そして、大人の腹にはナイフが突き刺さっていた。それも軍用のようなサバイバルナイフであった。

『え、あ、え?』

大人の口からカポツと血が吹き出す。

『……さん!!? ……さん!!?』

見覚えのある青年だ。確か隣に住んでいた学生さんだ。

『あの通り魔野郎……!!?』

ああ、そうか。通りで見覚えがあるはずだ。

……ここは、俺が死んだ場面だ。

○??○

「うあつ!!?」

飛び起きた俺は周囲を見渡す。

「……………JP, sの施設か」

そこはJP, sの施設と思われる場所であつた。

「確か……………そうか、メラクの子機の爆発に巻き込まれて」

とはいえ、意識を失っただけで、ドウベの時よりは負傷も少ないようだ。

「動けなくはないが……………一応《常世の祈り》」

体の鈍い痛みと、疲労が抜けていく。

「さて、少し歩いてみるか」

外に出ると、この前目覚めた時より静かであった。

「とりあえず、飯を食べたい……………」

腹がグルグルと唸る。

「——あ、おい君」

「あ?」

呼び止められ、足を止める。

「八神 総司君だね? 良かった無事に目覚めたようだね」

それは白衣姿のJP， s職員であった。

「ええ、何とか……………しかし、腹が減ってしまつて」

「なら、検査の後に食堂へ行くかうか?」

俺はその提案に従うことにした。

○1時間後○

○JP, s 東京支部○

「はあ、これが【ターミナル】ねえ」

俺はその場所を見渡す。

ここはターミナルと呼ばれる設備であり、早い話が転移装置であつた。

俺は今現在、医療設備の整つていた大阪本部から元の居住地であり、現在一斉健康診断の行われている東京支部に、ターミナルを使い戻つてきていた。

「さて、戦いの用意をしないとな」

「ほう、勇ましいな」

声のした方を振り返ると、JP， s 幹部である証である黒いコートを羽織った青年がいた。

「あなたは？」

「JP， s 長官の峰津院 大和だ」

俺は目を細める。まあ、知っていたが。

「話は聞いています。人類を滅亡から救うため、私も戦います。私にはこの戦いを勝ち抜かねばならない理由がある」

「なら話は早い。八神 総司、君にも人類の為に戦ってもらおう」

「了解、長官殿」

俺は敬礼する。

「ふん、期待している」

峰津院が立ち去る。

「……………これで、後戻りも無理だな」

もう後退する道はない。戦うしかないのだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○久世 響side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

あの地下鉄から4日目……………俺達は再びセプトリオンと戦おうとしていた。

———新たな仲間と共に。

○JP's 東京支部○

○ターミナル○

「やあ、八神君久しぶり」

俺は小学生の少年、八神 総司に声をかける。

「ええ、確かきちんと話せたのはドウベ以来ですか？」

八神君がそう答える。

「それにしても小学生まで前線に送るなんて……大和のやつ何考えてるんだ？」

思わず愚痴をこぼす。

「………召喚可能な悪魔の強さでいえば、残念ながら私が現在の人類戦力の中で一番高く。皆さんと違い私は悪魔達の使うスキルも使える」

八神君が自分の片手を見る。

「それに私にはどうしても生き抜く、いや勝ち抜く必要があるのです」

その瞬間、ターミナルが光り始める。転移が始まったのだ。

「久世さん、例えば私が戦いの中で倒れたとしても貴方は先に進んでください。貴方にはその資格があるのだから」

「え？」

その瞬間、光が包み込み込み転移が開始された。

○大阪市○

○南港魚つり園○

「ほ、本当に俺達だけで戦うのか？」

大地が怯んだ様子で誰にとなく問いかける。

「いやむしろその方がいい。無駄な犠牲は出したくない」

俺は大地に答える。実際今までの戦闘でJP、sだけでもかなりの被害が出ているし、民間人に至っては予測もつかないほどだ。

「私もその方が賢明かと思えます。最終決戦まである程度は戦力を温存しなければ、結局最後はジリ貧の戦いになります」

八神君がそう言ってケータイを取り出す。

「敵が上陸し次第足止めをしながら同じタイミングでセプトリオンが1体【メグルス】3体を撃破する………でしたっけ？」

「え？ああ、そうだよ？」

「なら足止めは私が入ります。久世さん、志島さん、新田さん、【九条】さんは攻撃に集中してください」

「お、おう」

大地が返事を返すが……大地の仲魔はレベルが低く、とてもじゃないがセプテントリオンとは戦えない。

「大地は避難しておいてよ」

「いつ!?? ば、バカ言え!!? 俺だって選ばれたサマナーだよ!!?」

「あんた、召喚アプリの使い方間違ってるって違うの?」

大地が九条さんとじゃれあっている。

「こい、メタトロン!!?」

巨大な召喚陣が現れ、巨大でメタリックな天使が現れる。

「あれが、天使メタトロン」

「デカラビア」

さらに八神君の目の前に星型の悪魔が現れる。

「私は上空から支援します……皆さんご武運を」

八神君は星型の悪魔に乗り、空に飛び立った。

「……………俺もあんな悪魔欲しい」

なんとなく、大地のそんな言葉が聞こえた気がした。

結果から言えば、八神君はメタトロンを使って、メグルスを抑え込みんだ。これによりメグルスの動きは完全に停止し、俺達は勝利した。

——【栗木 ロナウド】、【秋江 譲】【柳谷 乙女】の死に顔動画通りの死という犠牲を残して。

「——久世さん」

俺は八神君に呼び止められる。

「我々は勝たなくてはならない。今生きている人のため、死んだ人のために。この世界の滅びを止めなくてはならない」

「八神君、君は……………どうしてそんなに」

「私には取り戻したい家族がいる。すでに無に飲み込まれてしまったが……………それでも、勝ち残れば戻ってくるはずなんだ」

八神君が、呻くように、嘆くように、渴望するように俺の問いに答える。

「私の……………いや、俺の目的はただ一つ!!? ”元の世界への原点回帰”!!? つまりは!!?”世界の回帰”!!? それこそが!!? 俺の唯一の望みだ!!? 戦う原点にして目的だ!!?”

「世界の回帰……………」

そんなことが……………!!??

「可能だ!!？」

八神君が叫ぶ。

「世界が再構成されるその時、その時、その時だけが世界を改変できる!!？」

「――」

体に電撃が走る。

「元の、世界」

「そうだ。俺は、俺の日常を取り戻す。例えこの世界で俺が倒れたとしても」世界が回帰すれば、俺は再び日常に戻る!!？」

それは一筋の希望であった。

「久世さん、俺は負けられないんだよ。文字通り死んでもな」

俺はその場を立ち去る八神君を見送ることしか出来なかった。

「……久世さん、あんたはどの道を選ぶ？」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○久世 響sideEND○

☆☆☆☆☆☆☆☆

エンド

—————

第1章第5話

第1章

―デビルサバイバー2―

第5話

―決意―

突然だが、俺はこの運命の7日間に突入してから今日である5日目までマトモに破壊された街の様子を見たことは無かった。

見たとしても、それは上空からであったり、車に乗ったままだったりである。

そんな俺は現在、東京の街にいた。

○東京○

○とある通り○

「いゝまで、やられてるのか……………」

俺は周囲を見渡しながら呟く。

いつもなら日本人だけでなく観光客でも賑わう街が、暗い影を落とし、沈黙に包まれていた。

街の建物もあちらこちらが壊されており、とてもじゃないが東京とは思えない。

人々の顔には活力はなく、中には死体のように横になっている人もいる……………いや、今の治安の悪い世の中であるならば、死体である可能性は充分に高い。

「これが、崩壊した世界ということ、か」

その時、目の前で爆発が起きる。

「……………?」 「……………?」

中国語らしき言葉を叫ぶスーツ姿の男達が、同じスーツ姿の男達と銃の撃ち合いをし

ていた。

「マジ世紀末だな」

しかし、と俺は眩く。

「放置するのも目覚めが悪い。ここはひとつ治安改善といこうか？」

俺はケータイを抜き、構える。そしてすぐさま悪魔の召喚を開始する。

「風で切り裂け、パズス」

『グルルル』

パズスが笑みらしき表情を浮かべる。

「その銃を撃ち合ってる中国人ども!!? 今すぐやめないとこの場で両方共に皆殺しにする!!? これは警告である!!? パズス前へ!!?」

パズスが俺の前に立つ。

「……!!？」

中国人が、中国語で叫びながら銃を乱射してくる。

「愚かな。悪魔には現代兵器は効かない」

銃弾を文字通りその身で弾くパズスの両腕が前に向けられる。それはターゲットをロックしたことに他ならない。

「《メギド》」

神の炎が放たれ、瞬間にその場にいる中国人達を包み込む。そして炎は、黒い炎にして神聖なる神の炎が、人間の体を跡形もなく燃やし尽くす。そこには文字通り灰すらも残らないだろう。それほどまでにこの神の炎は強力である。

「……え？風はつて？ブラフだよブラフ。」

「……………何気に、初めて人間と戦ったな」

その時、生き残った何人かの中国人がケータイを構えて、悪魔の召喚を行う。

「悪魔使いか。だがしかし」

彼らが召喚したのは【魔獣：ネコマタ】や【闘鬼：ゴズキ】など……………正直、パズスだけで十二分に処理できる相手だった。

「焼き払え、パズス」

メギドの炎が、悪魔と人間を焼く。

俺のパズスは普通のパズスと比べて、ゲーム時代に強化した強力な悪魔である。例えば召喚時のレベルと同レベルであろうとも瞬殺できる。

だということだ。相手は元の召喚時のレベルでも瞬殺できる相手である。

「……負けるほうがどうかしている。

「ん？」

中国人を焼き払った後、爆発の起きていた建物の中からスーツ姿の男達が両手を上げて出てくる。

「て、敵対意識ナイ!!? 攻撃スルナ!!?」

外人特有の発音で、投降らしき宣言が聞こえる。

「……………了解した。一応話を聞きたい。代表は誰だ？」

わざと高圧的な態度で問いかける。

「……」

2丁の拳銃を持ったボロボロの姿の男が、俺の前に現れる。その男は両肩を部下らしきスーツの男2名に支えられている。

「私、通訳スル。」 助カツタ、感謝スル」

「何があつた? ……とは言つたものの、その姿と武器を考えると中国マフィアというところだろ? 残つた物資の奪い合いか?」

通訳が、代表の男と話し合う。

「……」 ソノ通りダ。我々ハ【香港三合会】ダ。俺の名前ハ【チャン】ダ」

「現在JP, sで民間協力者をしている八神だ。一応治安維持のためにやらねばならなくてな」

「………理解デキル。我々も現在ノこの状況ハ好マシクナイ」

どうやらマフィアも困る状況らしい。

「俺は元の世界に戻るために戦っている」

「ソウカ、我々ニモ出来ル事がアレばイイガ……正直何モ出来ナイ」

「ま、そうだろうな。ただの人は逃げ惑うしかなく、ただの強者は真っ先に死に、ただの悪魔使いでは抵抗しかできない……真に運命を変えられるのは、真に選ばれし運命の悪魔使い達だけだ」

俺は歩を進める。

「生き残ったその先でまた会えたら会おうぜ？ その時は飯でも奢ってくれよ、チャンさん」

俺はその場を立ち去った。

「(それにしても、マフィアですら混乱する状態か……いやはや、確かに人類史上最も大事件ではあるがな)」

しばらく歩いていると、死体らしきものがいくつか転がっているのが見える。

「死体の収容が間に合っていないのか……」

J P, sは勿論のこと自衛隊、警察、消防……ほぼ全ての組織が十二分に働いているが、手が回りきらないこの現状こそが現実である。

「やはり、元の世界に戻すしかない」

峰津院 大和の掲げる実力主義世界は、明言されてこそのいないなものもの明らかに”元の世界ではなく、この災害を乗り越切った世界だ。そのため、家族の復活もない”。

「(例え、この命が潰えようとも、最悪でもその道くらいは残そう)」

俺は現在ただの小学生であり、特典持ちとはいえ元は戦闘経験ゼロの素人であった。おまけに寝坊のせいで更に他のメンバーよりも戦闘経験が低い。

そんな俺が最後まで生き残れるかといえ、確率が高いとは言えないだろう。

「久世さん。あんたどの道を選ぶんだい？」

もしも、もしも実力主義世界を目指すなら。

「俺はどうすればいいんだろうな」

大切なものを守るか、新たな未来を夢見るか……………。

「……………ふ、あはははは!!？」

思わず笑う。

「ひいははははははは!!? ふあはははははは!!? ひい、ひい、ひやははははは!!?
くつくつくつくつく!!? ふうははははは!!?」

笑いが溢れ出すように漏れ出す。それは自分を嘲笑う。

「……なんだ。俺自身がそもそも俺自身がなんの決意も出来てないじゃないか」

そう、久世 響が……いや峰津院 大和が、栗木 ロナウドが、志島 大地が選ぶどの未来も彼らは選び覚悟してその道を突き進んだ。

……対して俺はどうだ？

主人公という存在に縋り、自分はなんの決意もそのための行動もしていない。流れに従って戦っているだけだ。

元の世界？ 家族？ 父？ 母？ 妹？ 親友？ 友人？ 地元？ 日本？ ……否、否否否否否否否否否!!？ 結局のところは!!？ 己が自身で決意しなければならぬ!!？

そうでなく、何かに縋り決意をすればそれは容易く崩れ去る。まるで砂の城に波がぶつかるだけで崩れるように。

「成る程、道理であるか」

俺は笑うのをやめて、再び歩き出す。

「とはいえ、覚悟といってもなあ」

俺は思わずため息を吐き出す。

「ん？お前は……………」

「ん？」

声のした方を見ると、峰津院がいた。

「J P, sの長官殿がなぜこんなところに？」

「少し風にあたりに来ただけだ。すぐに戻る」

そう言つて、峰津院は黒い真つ黒な空を見上げる。

「……………今朝、久世から問い詰められてな。ポラリスの事を伝えたのはお前だろ？」

「な、何のことやら？」

俺は思わずとぼける。

「ふっ、まあいい」

峰津院が歩き始める。

「先ずはセプテントリオンだ」

「……………ええ、そうですね」

峰津院はそのまま立ち去る。

「……………セプテントリオンか」

残りのセプテントリオンを思い出す。

「……どちらにせよ。笑っても泣いてもあと少しだ」

第1章第6話

第1章

ーデビルサバイバー2ー

第6話

ー死に顔動画ー

時折忘れそうになるが、俺こと八神 総司は小学生である。
ランドセルを背に学校に向かっているのが正しい姿のはずである。

○JP, s 東京支部○

○医務室○

戦闘で負傷したJP, s 隊員達が次々と担ぎ込まれてくる。

「……よし、定員だ!!? 始めてくれ!!?」

治療班のJP，S隊員が叫ぶ。

《常世の祈り》

周囲に光が降り注ぎ、隊員達を癒していく。

「ああ」「痛みが和らいでいくわ」「神の奇跡だ」

隊員達が驚嘆の声を上げる。

「治療が終わったやつは自分の足で出て行け!!? 次の患者をどんどん連れてきてくれ!!?」

ぞろぞろと完治した隊員達が部屋を出て行き、代わりとばかりに負傷した隊員達が担

ぎ込まれてくる。

「くそ、こんなことなら回復スキルあるの言わなきゃよかったぜ。《常世の祈り》」

と言いつつも回復スキルを行使する。

「この戦いでの負傷者は増えていく一方だ。医薬品も品薄だから助かるよ」

医療班の隊員に肩をポンと叩かれながらも、治療作業を続ける。

「……………戦況は？」

「現状戦力でも作戦次第でなんとかかなりそうだそうだ。よって、君は今日一日ここで缶詰だ」

「oh……………」

思わず上を向く。

「(なんでこんなことに)」

時を遡ること数時間前。

俺はこれから来るであろうセプトントリオンに備えて待機していたのだが……………。

「悪魔との戦いで大量の負傷者が出たぞー!!?」

あまりの負傷者達の数に、俺は思わず範囲回復スキルである常世の祈りを使用した……………してしまった。

「八神、お前は留守番して怪我人の治療だ」

「あーっ」

珍しくいい笑顔の峰津院にここに叩き込まれ、気付けば治療作業のデスマーチである。

「(クソツタレめ。覚えてやがれよ……………)」

この時の俺は知らなかった。まさかJP， s各支部から怪我人が送り込まれてくるなんて……………!!？

「ちよ、ギブ魔力（MP）が」

「ほい、これ魔力回復薬な」

見た目は毒物、味はゲキマズであった。

○翌日○

「うあ……………気分悪い」

回復薬の飲みすぎで、気分が悪い俺は医務室のベットで横になり、天井を見上げる。

「ここに八神君はいますか？」

「ん?」

声のした方を見ると、そこにいたのは——我らが主人公様御一行であった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○久世 響side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

俺と大地、新田さんは八神君のいる医務室を訪れていた。

「——え?無限増殖するセプトントリオンですか?」

「ああ、何か倒す手立てはないかな?って色々聞いてるんだよ」

俺は八神君に説明する。

実際、セプトントリオン【ミザール】は分裂増殖する敵だ。それもこのままだと日本中を埋め尽くす勢いだ。

「そうですね……危険な賭けというよりは文字通り命を削るマネになりますが。手がないわけでもありません」

「え？マジで!?？」

大地が驚愕の声を上げる。

「【龍脈】というものがありません」

「龍脈？」

「一種のパワースポットのようなものですが、そのチカラは大変強力であり、それを使えばあるいは……」

「ならそれを使おうぜ!!？」

大地が嬉しそうに飛び上がる。

「しかし、龍脈により日本は生き残っています。もしも龍脈のチカラを使えば——」
「間違いなくタイムリミットを早めることになるだろう」

「大和!?？」

後ろにいたのは大和であった。

「しかしそれしかないのもまた事実ではある」

「肉を切らせて骨を断つ……まさかアニメのようなセリフを言うことになるとは」

八神君はため息を吐き出す。

「それにしても、お前は小学生に似つかわしくないほど色々知りすぎているな」

「まあ、おかげで話が早く済むわけですから見逃してくださいよ」

「……………ふん」

大和が八神君の前に立つ。

「……残念だが、【ルীগ】がこの騒ぎで実態ができないほど弱ってる。適性検査を行った結果……………」
適合者はお前だ八神

「っ!?？」

八神君が驚愕の表情を浮かべ、口をパクパク開いたりあげたりしている。

「適合者？」

「龍脈のチカラを解放するには悪魔のチカラが必要だが、この騒ぎのせいで実体化すら難しい状況だ。よってその悪魔を人間の体に憑依させてチカラを行使させる。その依代として最も適性が高かったのが八神だ」

「え……………」

八神君を見ると、布団を握り締めて、下に俯いている。

「そして依代となった人間はほぼ確実に悪魔のチカラに耐えきれずに死ぬ」

「大和!!? 八神君は小学生なんだぞ!!?」

「だからなんだ? 久世 響」

「この……………!!?」

手が出そうになると、俺の手を誰かが掴む。

「……………八神君」

「お、俺なら、俺なら他の悪魔使いと違って、身体能力も高く、おまけに悪魔のスキルも使える!!? 生き残れる可能性は、高い」

それは決意と覚悟の言葉であつた。

「……俺がやります」

「すぐに準備しろ」

八神君が、大和についていく。

「……………久世さん、道は俺が作る。あとは頼みましたよ」

『友達の死に顔動画がアップされたよ☆』

死の運命が動き出した。

第2章―デビルサバイバー2 v s??― 第2章第1話

第2章

―デビルサバイバー2 v s??―

第1話

―死者―

―――確かに覚悟を決めるつもりだった。

―――ただこんなことになるなんて思ってた。

―――まさか、する覚悟が”生贄としての覚悟”だなんて。

○東京○

○都庁前○

俺は本来であるならば、新田 維緒の立っているはずの場所に立っていた。

「(ルーグか。本来(ゲーム)なら新田さんが主人公の問いかけ次第で死を回避するんだが……………」

ぶっちゃけ、主人公とあまり話す機会もなかったし、戻ってこれるか怪しいところだ。ついでに言えば、既に死亡フラグこと俺の死に顔動画が上がっていた。

「始めろ」

峰津院の指示で、ケータイを操作してルーグの憑依を始める。

「うっ……………!!?」

体に痛みが走る。しかし止めることなどできないどころかむしろない。

「周りに悪魔が湧くぞ!!? 迎撃しろ!!?」

回復させたJP， s 隊員達が厳しい表情を浮かべながら戦っている。

「……………」

俺の身体の中に何かが入ってくるのがわかる。気持ち悪い感覚だが必死に耐える。

「うっ、うおおおお!!?」

長い苦痛の時間を耐えつつ、頭の中を走馬灯が走る。

「……え?一人で東京に?

「……大丈夫なの?

「……にーに、どっか行くの?」

「……………父さん母さん……………」ハヤテ」

俺の意識はその瞬間、何かに乗っ取られた。

『……………』

乗っ取った存在ルীগは無言で仲間達を見る。

何かを話しているようだが、集中できず、痛みに耐えるしかないために上手く聞き取れない。

『ふん!!?』

俺は都庁上空に飛び、その手の中に光の槍を生み出す。

「(これで、終わりだ!!? いっけえええええ!!?)」
『はあ!!?』

光の槍が地面に突き刺さり、龍脈を呼び覚ます。

「へっ、やってやったぜ。あとは頼むぜ……久世さん」

取り付いてた何かが消え去り、俺の身体はコンクリートの地面に倒れる。

「――!!?」

「――!?!?」

久世さん達は何かを叫んでいるが、今度は鼓膜がやられたのか、叫んでいることしかわからない。

「あとは、頼みます。世界を、人類を……」

気が遠くなる。覚えがあるこの感覚は死ぬ直前のものだ。

「(2度目の死か……通り魔に刺されるよりは、人のためというか、人類のために死ぬ分、まだ多少マシな死に方ではあったかね)」

——しかし、もしも叶うなら。

「元の世界に、帰り、た、かった、なあ……………」

体が軋む。ああ、もう疲れてしまった。後は生きている彼らに任せてもいいだろう。

「——総司!!?」

最後に聞いたのは主人公様の、久世さんの、悲鳴に似た叫びであった。

——人類を、日本を、俺の家族を……………頼む。

○??○

「で、死んだはずなんだが……………」

死んだはずの俺は、なぜか近未来的な街のど真ん中に突っ立っていた。体には痛みもない。

……いや、訳わからんわ。

「ど(ッ)だ(ッ)？」

おまけに周りの言葉が明らかに日本語ではない。

「外国か？ いや、無の侵食で日本以外生き残りはいないはず……」

「……え。」

「ん？」

耳の奥から声がする。気持ち悪い感覚である。

「……神に抗いし戦士よ。戦え。」

意識がぼやける。

もはや理性のかけらもなさそうな、狂人じみた赤い紅の目をした黄色い制服を着た男が、鉄パイプを片手に、もう片手にケータイを持って暴れる。

「エンジエエエエル!!?」

その隣で、同じく狂人じみた赤い紅の目をし、同じ制服を着た女が、上空を飛ぶ天使に指示とも言えない声を上げる。

天使はその声に反応し、炎を街中に放つ。

「な、何なんだよ!!? こいつら!!?」

「に、逃げろ!!?」

街中では黄色い制服を着た人間達が暴れまわっていた。そしてその人間達は揃って赤い紅の目をして、理性はともではないが、ありそうになかった。

「クソ、こいつら【死者】だ!!?」

「またかよ!!?」

警官だろうか?制服を着た男達が現れる。

「こちらパトロール隊!!? 死者の発生を確認!!? 至急応援を頼む!!?」

『了解。現在【機動六課】が急行中。到着まで現状戦力で対応せよ』

「くつ、了解」

通信を切った男と隣の男が、首輪の宝石を手にする。

「【バリアジャケット】展開!!?」

その瞬間。男達の服装が変わり、手には魔法使いのような、しかしメカニツクな杖が握られている。

「死者の鎮圧にあたる!!?」

「行くぞ!!?」

その男達に気付いた黄色い制服の人間達が、男達に視線を向ける。そして、戦意を向ける。

「イツマデええええ!!?」

『キイイイ!!?』

頭蓋骨の頭を持つ鳥が、杖を持つ男達に襲いかかる。

「《ザン》!!?」

「エンジエエエエル!!? 《アギ》!!?」

天使と鳥から炎と風の斬撃が放たれる。

「回避!!?」

風を避けた男が、杖から光の玉を発射する。

『ぐっつ!!?』

光で吹き飛ばされた天使が、怯む。

「一般職員舐めんじゃねえ!!?」

炎を避けた男も同じく光の玉を杖から発射し、頭蓋骨の頭を持つ鳥を撃ち落とす。

「ヴァあああ!!?」

今度は制服を着た男が鉄パイプで襲いかかる。

『《バインド》』

「ぐっつ!!?」

光に拘束された黄色い制服の男が倒れる。

「よし、モンスターは戦闘能力が高いようだが、本体の人間は非力だ。やれるぞ!!?」

「【陸上警備隊】舐めんなよ!!?」

「エンジエエエエル!!?」

黄色い制服の女の前に天使が降り立つ。

「ちつ、理性はなくても知性はあるってか? 死者つてのはめんどくせえな」

「——お待たせやで!!?」

隊員達の前に少女が降り立つ。

「貴方は確か機動六課の!!?」

「他の隊員も少ししたらくるからな!!? しっかりしいや!!?」

「はい!!?」

少女と男達は杖を構える……しかし、その前を悠然と歩く子供がいた。その後ろか

らさららに黄色い制服を着た男女が現れる。

「……………え？」

少女には見覚えがある子供だった。それはかつて親と共に失ったはずの存在であった。

「……………に、にーに？」

「……………八神 総司、これより戦闘を開始する」

黒い制服を着た少女の”兄”が、赤い紅の目を爛々と輝かせてそこに立っていた。

「……………」【死者：八神 総司】、戦場に現れる。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りsideEND○

☆☆☆☆☆☆☆☆

第2章第2話

第2章

ーデビルサバイバー2vs??ー

第2話

ー死者との出会いー

☆☆☆☆☆☆☆☆

○八神 はやてside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

私の兄、八神 総司はお父さんとお母さんと共に、交通事故で谷底まで落ちて死んだ
……はずやった。

○ミッドチルダ○

「なんで、にーにが、ここにおるん？」

頭の中が混乱する。

世界中に響いた【ネオ・セプテントリオン】と名乗る存在によつて、世界にとある言葉が放たれた。

——この世界に神の試練を与える。

——この世界のように神の試練を与えられ、前任のセプテントリオン………神の使徒達に挑んだ戦士達。

——その戦いで死んだ死者達が蘇る。

——戦え。戦え。ひたすらに、その瞳を赤く輝かせながら戦え。

——戦えの末の敗北だけが死者達を解き放つ。

——さあ、生者達よ。

——神の試練に備えよ。

その言葉通り、目を赤く紅に染めた死者達が現れた。

そして今、私の前に死んだ兄が立っている。

今ではもう写真でしかその姿を思い浮かべられない兄が、そこにいた。

「……………」

兄は無言で立っている。

死者達の特徴として挙げられるのはいくつかあるが、やはりその瞳である。その瞳は兄が死者であることを示していた。

「……………戦わないのか?」

兄が私に声をかける。

「っ!!? にーに私や!!? はやてや!!?」

「……………」

ハッと考え込むのを中止した私は、兄に声をかけるが、聞こえてないのか無言だ。

「……………戦う気がないならば、ただ何もできずに死ね」

「にーに!!?」

私の声に応えず、兄は右手を前に突き出す。その先にいるのは私だ。

「《メギー》」

「はやてー……!!?」

ハンマーを持った幼女、「ヴィータ」が兄に、ハンマーの一撃を加える。

「ぐう!!?」

兄は吹き飛び、露店に突っ込む。

「ん?なんか今の見たことある気が……………」

「ヴィータ!!？」

私はヴィータを呼ぶ。

「どうなつてんだ？はやて」

「死者の襲撃や。やけど……………」

私は兄の突っ込んだ露店を見る。兄の後に続いていた黄色い制服を着た男女が、兄を慌てて救出している。

「まだやるか？」

「待つんや、ヴィータ」

「何でだよ!!？ はやて!!？ 早く倒して帰って貰おうぜ!!？」

死者は倒されれば天に帰る。例え非殺傷設定でも行動不能にすれば、天に帰る。だけ……………」

「私の、兄、なんや」

「え？………？？」

ヴィータが思い出したかのように兄を見る。

ヴィータは何度か兄の姿を写真で見てる。私も知っている兄のことを何度か話しているから、兄のことも分かる。

兄は立ち上がり、埃を叩いていた。

「……………召喚」

兄がケータイを構える。あれは死者達がよく使う召喚手順だ。

「……デカラビア」

兄の背後に星型のモンスターが召喚される。

「焼き尽くせデカラビア」

星型のモンスターが、魔法陣を展開し、黒い炎を放つ。

「くっ!!?」

私達は回避する。

「はやて、どっちにしても倒さないと……………」

「分かってる!!? けど……………」

一度失った兄を、今度は自分の手でと考えると手が震える。

「にーになんやで? 私の……………」

「はやては、はやての兄貴に人を殺させてもいいって言うのか!!?」

「にーに!!?」

私の体がピクリと震える。

死者は目が赤い場合はただ破壊行動を行う。人を殺すことに躊躇などなく。意識が戻るのは、天に帰る時に一瞬である。

「それはあかん……うん、やる。やったるわ」

私は杖を構える。

「にーに、今解放してあげるさかい。我慢したってなあ」

私は兄を倒し、天に帰す覚悟を決めた。

にーにーにー。ごめんな。

にーにー地球に帰ったらお墓参りするから、先に地球で待っててえな。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○八神 はやて side END ○

☆☆☆☆☆☆☆☆

頭がぼーっとする。思考がうまくまとまらない。

「俺は、何を」

目の前で少女が飛んでいる。何か言っているようだが聞き取れない。いや、聞こえていても言語として理解できない。

「―――とにかくだ。俺は戦わなくてはならない」

それだけは、理解していた。

「何故だろう。周りのJP，s隊員は俺の指示に従うのが分かる」

俺が右手をあげると、JP，s隊員達が召喚を開始する。

「(全員エンジェルかイツマデか。支援程度の戦力と考えるべきか)」

俺の目の前に佇む（浮いているが）デカラビアが、攻撃指示を待っている。

「（さて、現状の敵は目の前の4人か）」

ハンマー幼女と羽を生やした少女と成人男性2人……色々と疑問がないわけでないが、倒せない戦力ではないだろう。

「（こんな街中であまり強い悪魔を使う訳にもいかんだろう。ここはデカラビアやパズスレベルで片付ける）」

方針は確定した。あとは行動あるのみ。

「攻撃開始」

デカラビアが敵に突っ込む。それを援護するようにイツマデ4体が突っ込む。

「（エンジェルは護衛に残す、か。流石戦い慣れしている）」

敵がビームや光の玉で悪魔達を迎撃している。

「（なんだあのチカラ。一見すると魔法のようなチカラのようだが………？）」

デカラビアが攻めあぐねている。初期値のデカラビアならまだしも、悪魔合体用個体とはいえ強化したデカラビアである。

明らかに強い。そしてイツマデでは相手にならず撃ち落とされる個体もいる。足止め程度にしかなくていいない。

「成る程、なかなかやる」

俺はもう1体の悪魔、パズスの召喚に入る。

「（パズスと突撃して一気に制圧——）」

パズスと共に突撃して一気に片付ける。そう決めた瞬間、背後が爆発した——爆発したああ!!?」

「がっ!!?」

爆風で吹き飛ばされた俺は、建物の壁にぶつかる。

「うっぐ」

空から白い純白の服をまとった少女が降りてくる。

「うう………」 「ぐっ」

俺の指示に従っていたJP，s隊員達が呻いている。エンジェルはダメージが大きすぎて消えたようだ。

「くっ、《常世の祈り》」

回復魔法スキルにより、J P， S 隊員達が立ち上がる。

「ふう、やりやがったな？ クソツタレ」

回復した俺も立ち上がる。

「――」

白い服の少女は、俺に機械みたいな杖を突きつける。

「…………ちつ、街の損害とか考えている場合じゃなさそうだな」

俺は高レベル悪魔の召喚を決める。

「(さて、もうしばらくは俺一人か?)」

J P， s 隊員達は、悪魔を倒された。ほかに悪魔を有していなければ俺1人だけで5人を抑えなければならない。

「ヴアアア!!？」

そんな予想を裏切る形で、J P， s 隊員が白い服の少女の背後から鉄パイプで襲いかかる。うん、ワイルドってか犯罪臭がするぜえ。

しかし、その少女はひらりと鉄パイプを避け、空へと飛翔する。

「ぐううう!!？」

悔しそうにJ P， s 隊員が唸り声を上げる。

「(……………一旦引くべきか)」

俺の視線は、白い服の少女の少し先に飛ぶ、敵の増援の姿を捉えていた。

撤退を決めた瞬間、背後に黒い穴が現れる。丁度大人が1人通れるサイズだ。

「ちっ」

俺はためらわず穴の中に飛び込んだ。

エンド

第2章第3話

第2章

―デビルサバイバー2 vs ??―

第3話

―J P, s 死者部隊―

○??○

暗い空間の中を歩く。

「洞窟、か」

少し広い場所に出た俺は、そのまま座り込む。

後に続いてJ P， s 隊員達が、俺と同じように広い空間に來た途端に座り込む。

「(なんとなくだが、こいつらが俺の指示に従う………というより、配下? みたいなのは分かる)」

見たところ、10人の一般J P， s 隊員がいる。

「(しかし、この10人では厳しいな)」

あの5人だけでも一般J P， s 隊員には厳しい相手だ。というか、太刀打ちできないだろう。

「どうやって戦うべきか………いや、このさい……っ!?」

思考にボヤがかかる———そうだ。俺は戦わなくてはならない。話し合いなどもつてのほかだ。

「……………少し、休むか」

俺はゆっくりと目を閉じた。

「……………父さん母さんはやて」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○機動六課本部○

○ミーティングルーム○

機動六課のミーティングルームには、機動六課の面々が揃っていた。その中で課長であるはやてが青い顔で、椅子に座って頭を抱えていた。

「しっかし、まさかはやての兄貴が、死者として戦うことになるなんてなあ」

ヴィータが呟く。

「崩壊する日本で戦った戦士達、か」

実のことを言えば、彼女達は死者の世界が、自分たちの知る地球のそれとは違うことは分かっていた。

総司が襲撃するその前にも、何度か死者による襲撃があり、それを打ち倒した際に、正気に戻った死者達から情報を聞き出していったのだ。

「命をかけて戦った戦士に対して、なんという侮辱!!? 到底許せることではない!!?」

女騎士が机に拳を叩きつける。

「落ち着いてください」

「……………すまない」

女騎士は冷静になろうと、一呼吸入れる。

「問題は逃走した死者達の追撃だが……」

女騎士は現在の問題を口にする。

「正直、全然見つかる心配がない。ネオ・セプトントリオンがどこかにかくまっている可能性もある」

ふうと女騎士がため息を吐き出す。

「でも、あのモンスター……悪魔だっけ？はやてのお兄さんの悪魔は強かったみたいだね」

「ああ、他の悪魔よりも何倍も強かったぜ。あの黒い炎も当たってたらやばかったな」

白い服の少女の言葉に、ヴィータが反応する。

「にーには、努力家やったらしいからなあ」

俯いたまま、はやては呟く。

「はやて……………」

「分かつとる。にーには死者や。倒して天に帰ってもらわなきゃあかん。それが……………にーにのためや」

はやての頬を水が伝う。

「でも、それでも、私の肉親なんや。もう会えなかつたはずの、肉親なんや」

はやての心は二つに割れていた。兄を生かしたい思い。反対に早く倒して天に返すべきという思い。

はやての心は揺れていた。

しかし、いつまでも悩んでいられないのが、許してくれないのが、”課長”という立

場である。

「一先ず今日はもう来ないはずや。みんな休んでおき。私は少し考え事するから一人にしたってや」

「分かりました主」

ミーティングルームから隊員達が出て行く。

「……………にーに」

はやてはポケットから一枚の写真を取り出す。それは肉親の写真。母と父、そして兄が写り、赤子のはやても写っている。

「にーにも戦ったんやな」

死者はセプテントリオンとの戦いに挑み、だが死んでしまった人間達である。

つまりそれは、はやての兄である総司が、セプテントリオンに挑み、そして死んだ証

でもある。

「にーに、小学生なのに無理したんやなあ。まるで私達みたいやで？」

はやては写真を撫でる。

「……………少しは答えてえな、にーに」

写真は何も答えない。そして、死者の兄も何も答えない。

「にーに」

ミーティングルームに少しの間、押し殺したすすり泣きの声が響いていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りsideEND○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○洞窟○

「う、ん」

目を覚ますと、やはりというべきか……眠った洞窟の中であった。

「やっぱ、そう簡単には帰れないか」

俺は立ち上がる。JP，S隊員達はすでに起きているようだ。

「……ピコン。」

「ん？」

ケータイが鳴った為確認すると、魔法陣のようなものが画面に現れる。

ああ、思考が、混濁する。

「……戦え、戦え戦え。」

「そうだ。我々は戦わなくてはならない」

俺はいつのまにかあつた黒い穴に飛び込んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○ミッドチルダ○

「ヴァアアア!!?」

青いコートを着た大学生風の男が、椅子を建物の窓ガラスに叩きつけて割る。

「ネコマタアアアア!!?」

制服姿の女子高校生が、悪魔に命じてあちらこちらを破壊して歩く。彼らの目は、赤く紅に輝いていた。

「ふむ、こころはどこなのだろうか？」

そんな中、男は1人眩く。

「まあ、戦わなければいけないことだけは確かか」

その男はかつて、JP's 名古屋支部を暴徒を率いて襲撃し、なおかつ占拠した元警官であった。

——【死者：栗木 ロナウド】参戦。

「……………」

そんな中に、総司率いるJ P， S部隊が現れる。

「ん？君は確か」

「貴方は確か栗木さん……………でしたか？」

「ロナウドで構わない。それより、ここは協力して戦うぞ」

「異存ありません。総員戦闘開始!!？」

栗木　ロナウド率いる暴徒部隊と八神　総司率いるJ P， S部隊が手を組んだ。

「クソ、連続で死者の襲撃かよ!!？」

「しかも連続で俺らかよ。運が悪いにも程があるぜ」

パトロールで出ていた管理局員の男達が杖を構える。

「悪いが、今回は本気で行く。召喚!!？　メタトロン!!？」

巨大な魔法陣が現れ、天使メタトロンが召喚される。

「なっ、嘘だろ!!?」

「あんなん対応しきれないぞ!!?」

男達が慌て始める。

「デカラビア、パズス、【魔王：ロキ】」

次々と悪魔達が召喚されてゆく。それはある種総司の本気であったからである。

「破壊しろ!!?メタトロン、ロキ、パズス!!?」

3体の悪魔達が、街に解き放たれた。

——しかし。

「させねえ!!?」

突如として現れたヴィータのハンマーにより、早速メギドラオンを放とうとしていたメタトロンが、技を中断させられる。

「パズス」

パズスがヴィータに向かい飛ぶ。

「ちっ、だが避難完了までは私達に引きつけさせてもらおうぜ!!?」

管理局員達とJP， s暴徒連合部隊がぶつかった。

「イツマデ!!?」「エンジェル!!?」「ネコマタ!!?」「ゴズキ」

次々と悪魔が召喚されていく。

「させるか!!?」 砲撃術式展開!!?」
「ファイヤ!!?」

砲撃と悪魔が入れ乱れる。

「撃て撃て!!? あいつらの足をここに縫い付けてやれ!!?」

砲撃により、低レベル悪魔達が攻めあぐねる。

「俺がやる。こい、【邪神：バファメット】」

ロナウドの手により、羊頭の悪魔が召喚される。

「《炎の乱舞》」

悪魔から生み出された炎が、男達に襲いかかる。

「ちっ、回避!!?」

男達が回避した瞬間、待つてましたと言わんばかりに、低レベル悪魔達が襲いかかる。

「くっ、やられてたまるかよ!!?」

男が避けようとするが、ゴズキの一撃をくらい、地面を転がる。

「かつ、はっ……………!!?」

男は口をパクパクと開いたり閉じたりする。顔色は悪かった。

「……………」

その周りに鉄パイプを持ったJP， S職員達が現れる。

「や、やめ……………!!?」

「————《スターライトブレーカー》アアアア!!?」

ピンク色の光が、JP， S職員達に降り注ぐ。

「「「がアアアアア!?」」」

J P, s 隊員達が光に飲まれて消えてゆく。

「ちつ、白いヤツか」

「敵か?」

「ええ、そのようです」

総司達が構える。

「……………?俺達は死んだんじゃないのか?」

光に飲まれたはずの J P, s 隊員が起き上がる。
の粒となって、空に昇ってゆく。

しかし、その身体はだんだんと光

「ちつ、6人もやられた」

「高出力のビームか。厄介だが、強力な分エネルギーの充填に時間がかかるはずだ」
ふわりと白い服の少女が、地上に降り立つ。

「え、【エースオブエース】」

「た、助かりました」

「油断しないで」

同時にパズスと戦っていたヴィータが、白い服の少女の隣に降り立つ。

「はやてちゃん達は？」

「今急行してる。そんなに時間はかからないだろ……問題はあの空のデカブツだ」

白い服の少女は、空を浮遊している巨大な体のメタトロンを見る。

「全力全開の《スターライトブレーカー》で、倒せるかな？」

「とうだろうな？」

第2章第4話

第2章

ーデビルサバイバー2 vs ??ー

第4話

ー白い魔王ー

突然だが、パズスはかなり強い悪魔だ。デビルサバイバー2の世界では、セプテントリオン相手でも一度も消滅させられたことはない。

合体系員ながら、この世界では十二分に戦える戦闘用悪魔。それがパズス。

そう、そのはずであった。

「ば、バカな」

パズスが、ピンクの光の中に消えていく。

「俺のパズスが、あんな容易く……………」

「デカラビアとロキが、ピンクの光のビームを放った白い服の少女に攻撃を仕掛け始める。」

「ロナウドさん、あの赤い服の少女頼めますか?」

「……………難しいな。あれは前線タイプ、こっちは遠距離タイプだ。距離が取ればいいが、盾役がないのでは」

俺は再びケータイを操作する。

「(これ以上は手の内を晒したくない。ここはロナウドさん達を連れて退く) こい、コボルト」

俺の目の前に、3体のコボルトが現れる。いつだったか、精霊を作ろうと購入したセット販売の悪魔達である。

「ロナウドさん、撤退を。このコボルトとメタトロンを暴れさせて時間を稼ぎます」
「いや、まだやれる。問題ない」

ロナウドさんを残して、残りの人間達が撤退に入る。

「ん?」

空を見上げると、見覚えのある羽生やした少女がいた。その手は震えている。

「あれは確か……………」

——やはり、神の試練に耐えられなかった人間では、役に立たぬか。

声が戦場に響き渡る。

「い、これは?」「八神君、警戒を!!?」

俺とロナウドさんは、その声を警戒する。

「……我は新たなるセプテントリオン。」

「……我は「ハート」。」

「……我は神の試練を与えるもの。」

見上げると、空間が裂けて、黒い巨大な箱が現れる。その大きさは、巨大なメタトロ
ンとタメを張るほどだ。

「ネオ・セプテントリオン、だと?」

俺は聞き覚えのないその名前に、警戒を強める。

「……我に従え、戦士達。」

「……《ネクロマンシー・ハック》。」

「がっ、あがががががががががが?」

頭の中が、強制的に、何かに書き換えられる。
あまりの激痛に、俺は叫び声をあげる。

——従え、我が駒よ。

意識が、遠、……………。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

黒い箱。セプテントリオンが現れた戦場は、死者達の叫び声で埋まった。

「がああああああ!?」「いやああああ!?」「や、やめてくれえええええ!?」

死者達の目がさらに赤く、血よりも赤く染まっていく。

「[[[[[.....]]]]」

叫んでいた死者達が、先ほどの様子が嘘のように落ち着いた様子で、構える。その目は赤く紅蓮に染まり、血の涙を流していた。

「あれが親玉か？」

ビルの屋上に着陸したヴィータが、ハンマーを肩に乗せて問う。

「みたいなの」

同じくビルの屋上に着地した白い服の少女が、杖を構えたまま答える。

「遅くなった!!？」

少女達の前に、女騎士が降り立つ。

「遅いぞ【シグナム】」

「すまない、他の死者に手こずった。おっとりした見た目ののに、妙に強くてな。だが、天には帰した」

シグナムは空を見上げる。

「あれが……………」

「ああ、ネオ・セプテリオンって奴みたいだ。的は大きい方がいいが、あれは大きすぎるな」

「主は？」

「……………はやてなら、あそこだよ」

空にははやてが、飛んでいた。その手は血が出そうなほど、強く握られていた。

「あれが、にーにを操って……………」

はやては両目を開き、ネオ・セプテントリオンに突撃していく。

「お前がああああああああ!!?」

それは激高であった。肉親を操られ、肉親と戦わされた妹の叫びであった。

「ハアアアアアアア!!?」

魔法による爆撃の嵐が、ネオ・セプトントリオンを襲う。

「――抵抗するか。ならば、ゆけ。神に抗いし戦士達。

「「うおおおお!!?」「」

武器を持った死者達が、生者に襲いかかる。

「私とヴィータで死者を抑える。お前は主の援護を頼む!!?」

「了解なの」「了解」

その瞬間、ビルの壁が爆発を起こす。

「……………」

悪魔、バハメットに乗ったロナウドが、屋上に降り立つ。その後を悪魔に乗った暴徒2名が続く。

「早速、というわけか」

シグナム達が武器を構える。

「ゆけ!!? 高町!!?」

「うん!!?」

エースオブエース、【高町 なのは】は空を駆け抜ける。そう、友のために。

「……………」

そんな姿を死者達が見送る。

「追わないのか？」

シグナムが視線を空に向けると、そこには巨大な天使――メタトロンが、高町なのはを待ち構えていた。

さらにその周囲には数体の悪魔が浮かんでいる。

「しまった!!? 待ち伏せか!!?」

エースオブエース高町なのは。

転生者にして死者八神 総司。

強大なチカラが、今ぶつかり合う。

「《メギドラオン》」

神の炎が総司の手から放たれるが、なのはは容易くその炎を避ける。

「…………ゆけ」

悪魔達がなのはに殺到する。

「……………」

悪魔達と戦う姿を、総司はデカラビアの上で、見下すかのように観察する。

「《シユート》!!?」

人間を圧倒してきた悪魔達が、ただ一人のなのはを落とせない。

「敗北は…………ゆるされ、ない」

総司はボソリとつぶやき始める。

「だが、何の………俺は何のために………?」

それは、僅かな隙であった。ネオ・セプトントリオンが掛けた術は、ゲームで言えば魔力属性であり、《真・全門耐性》というスキルを取得している総司には、そもそも効きにくい属性であった。

ゆえの僅かな隙。本来なら発生するはずのない、ネオ・セプトントリオンと総司の技の拮抗によって起きたその隙。

——エースオブエースは逃さなかった。

「っ!!? 《スターライトブレーカー》!!?」

ピンクの光の奔流が、猛スピードで総司に突っ込む。

「——っ!!?」

それに気付いた総司が、対応しようと動き出すが、しかし間に合わない。

「……ぐああああああ!!?」

総司はピンク色の光に包まれていく。

「俺は、俺は………ただ、家族の、………」

ピンクの光を受けた総司が、足場であったデカラビアが消えたために、地面へと、頭から落ちていく。

「と、う、さん、母、さん」

総司は必死に手を伸ばす。まるで、何かを求めるように。

「俺は、守るんだ!!? 世界を!!? 日本を!!? 家族を!!? 妹を!!?」 は、や、てええええ!!?」

—— 【第二特典：

】 ロック解除。

「俺は!!? まだ!!? 終わってねえええええ!!?」

「……第二特典解放。

「たとえ、この身が砕けようとも!!?」

「……楽しみたまえ、新たな人生を。」

「俺はああああああああ!!?」

総司の握った右手が光りだす。

「イキテカエルンダアアアアア!!?」

「……こんなんどうよ?」

総司が光に包まれる。

「何!!?」

なのはは、悪魔の攻撃に対応しながら、その光を警戒する。

「……ネオ・セプトントリオン、ハート。よくも俺たちを駒扱いしやがったな」

第2章第5話

第2章

第5話

―新たなチカラ―

――「インテリジェントデバイス：ハーメルン」。

――それが第二の特典であり。

――時期が来たら届けると言われてた物である。

「ネオ・セプテントリオン!!?」

俺はふわりと浮き上がる。

ん? 浮き上がる?

「What? 何故?」

『マスター』

「ん?」

俺の持っている大きなラツパから、機械っぽい声がする。

『魔法を使用し、現在飛行中です。申し遅れました。わたくし、インテリジェントデバイスのハーメルンと申します』

「なるほど、流石というわけか」

たしかに、自分で飛ぶ方向や高さを変えられるようだ。

「なら行くか。我が戦友」

『YES マスター』

俺は圧倒的な速度で、新たなセプテントリオンの元へ向かう。

「ん?」

少し先に、白い服の少女と羽を生やした少女がいた。

「(守備兵か?にしては若いな。俺が言えることじゃないけど)」

俺はトップスピードで、少女達を通り過ぎる。

「何や!!?」

「え?あれは!!?」

少女達は俺の通過に驚いたようだ。

「下がってな!!? セプテントリオンは俺の専門だ!!?」

『カートリッジロード』

ラツパから弾丸の空薬莢が排出される。

「我が道を撃ち抜く!!?」

ラツパが巨大に変化していく。

『モード【マーチ】』

「撃ち抜け!!?」 《ノイズシフォン》

音の砲撃が、ネオ・セプテントリオンを貫く。

「……ぐああああああ!!?」 貴様貴様貴様貴様ああ!!? ただの駒の分際
でええええ!!?」

「まだ一発じゃ終わらないぜ!!?」 チャンスだよ!!?」 全員集合!!?」

メタトロンを含めた悪魔達が、一斉にネオ・セプテントリオンに魔法を放つ。さらに
俺の砲撃も何回か放つ。

——ぐああああああ!!?

ネオ・セプテントリオンが悲鳴をあげる。

「ん?」

背後からゆつくりと、少女達が近付いてくる。

「いやゝ申し訳ない。操られてご迷惑をおかけしました」

俺は少女達に頭を下げる。

「あ、え、あ」

羽を生やした少女が、なにやら慌てた様子である。

「えっと、あの………にーに」

「………え？」

俺の呼吸が止まる。

「ま、まさか、は、はやて？」

俺はプルプルと、羽の少女を指差す。

「そ、そうやで？ 私は八神 はやて………にーにの妹や!!？」

「えええええ!!？」

え？うちのはやては幼女。え？成長した？えええええ？

「えっと、どういうこと？」

「つまり、この世界はにーにが生きてた時代から十何年も経った世界なんや」

うちの妹が、何故か関西弁で説明してくる。

「ネオ・セプテントリオンの野郎!!? 俺の妹まで巻き込みやがって!!? 野郎ぶつ殺

!!?」

『カートリッジロード、カートリッジロード、カートリッジロード』

「あ、にーに待っ」

俺ははやての声すら聞かずに、ラッパを構える。ラッパからは空薬莖が三発も射出される。

「この音は、道を切り開く」

『モード「フルオーケストラ」』

背中からラッパが生えてくる。そして、その全てがネオ・セプテントリオンに向けられる。

「響き渡れ、破滅の歌を君に」

俺の持つラップパから、強力な一撃が放たれる。

——化け物め。

その一撃が、セプテントリオンの核を貫く。

「死後ぐらいは安らかに眠れ」

俺はゆっくりと地上に降りる。それと同時にネオ・セプテントリオンも消滅しながら落ちてゆく。

「にーに!!?」

はやて（少女バージョン）が胸の中に飛び込んでくる。

「はやて、元気だったか？」

「うん」

「美人になったな」

「や、やめてえや、にーに」

俺達は地上に降り立つ。

「はやてちゃん!!?」

白い服の少女が、はやてに駆け寄る。

「えっと、はやてのお友達かな?」

俺は笑顔で問いかける。

「え?あ、はい……………あれ?死者です、よね?」

「ん?ああ、ネオ・セプテントリオンの術がうまくかかってなかったみたいで、うまく解除できたんだよ」

俺は再びはやてに視線を向ける。

「はやて、時間があまりないようだから、手短かに伝えるが……俺は死んだ。だけど絶望の末に死んだわけじゃない。未来への道を切り開いて、信頼できる人に全てを託した」

俺の足から消滅していく。どうやら天に帰る時が来たようだ。

「はやて、お前は、お前達は必ず生きろ。生き残るんだ。俺の、俺達の、生き残れなかった人間達の分まで」

「ああ、その通りだ」

瓦礫の奥から、ロナウドが現れる。

「死んだ俺達の分まで生きてくれ。それが俺達の、死んだ人間達からの最後の言葉だ」

体の消滅が進む。

「へっ、ガキンチョも言うじやないの」「流石局長が曲者と呼んだ子供だな」「あら？天使君でしょ？」「いや、天使どころか俺ら死んでるんですけども」

暴徒やJP， s 隊員達も合流する。

「はやて、俺がいなくて寂しいかもしれないが、俺はいつでもお前のそばで、お前を見守ってるぞ」

胸から下が消えている。

「にーに!!? 待って!!? 私!!? 私!!?」

「はやて、俺はもう死んでるんだよ？本来ならもう会えてないんだーこれ、さようならだよ」

俺はポケットからとある袋を取り出す。

「少し遅れたが……いや、だいぶ遅れたが、誕生日おめでとう」

はやての手に袋を乗せる。中身はロケットで、家族の写真が入ってる。

「に、にーに」

「いい女になったなあ、はやて」

俺はゆっくりと、はやての頭を撫でる。

「あ、だからって変な男に引つかかるなよ？それと男ができたら必ず墓石に報告をだなー」

ついに肩も消えて、残りは首から上だけとなった。

「に、にーに、一杯、一杯伝えたいことがあったんや」

「すまない、そこまでは時間がなさそうだから、墓石の前で聞くとするよ」

「にーに、私ー」

最後の言葉は、聞こえなかった。

○東京○

○とある商店街○

びくりと体が震える。

「……………帰ってきたのか?」

俺は周りを見渡す。東京の、嫌になるほどの人混みが広がっていた。

「世界が、帰回した?」

それは俺の勝利の証であった。

元の世界への帰回。俺は最後の賭けに勝ったようだ。

「しかし、はやてがあんな美少女になるとはなあ。まあ、母さん美人だし、父さんもイケメンさんだからなあ」

はあとため息を吐き出しつつ、俺は歩き始める。

「あ」

俺はポケットを弄る………ない。やはりない。はやてへのプレゼントがない!!?

「やべえ!!?」 代わりの物を買わないと………!!?」

金はJP, sに協力した時に「紙くずに成り果てたけれども」と渡された分があるし、なんとかはやてのプレゼントを………!!?」

ーがしつ。

「失礼します。八神 総司君ですね?」

「はい？」

振り返ると、黄色いJP，sの制服を着たJP，s隊員がいた。

「我々はJP，sです。峰津院局長がお呼びです。我々と共にご同行を」

「え、ええ………いや、妹の誕生日プレゼントを先に」

「我々でのご用意させていただきますので、無論費用はこちら持ちです」

俺は連れ去られた。誘拐犯も真っ青な、鮮やかな手口であった。

○JP，s東京支部○

「ん？来たか」

峰津院 大和が俺を出迎える。

「何かご用ですか？」

「いや、何。お前はかなりの実力を持っているからな。我がJP'sに入ってもらおう
と思っっている」

「小学生なんですが」

「非常時の予備役で構わん。安いが給料も出ず。月20万でどうだ？緊急時の呼び出し
以外は好きにして構わんし、ボーナスも出そう。実力が伴えばある程度の地位は保障し
よう」

「やらせていただきます」

金に目が眩んだ小学生が、そこにいた。

「よろしい」

こうして、小学生にして、国家公務員（非常勤）となった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

ネオ・セプテントリオンが死者を率いて起こした〔ネオ・セプテリオン事件〕から数ヶ月が過ぎた。

各地に残った爪痕も、ネオ・セプテントリオンの残骸から発見された希少鉱石（体の形成に使われていた）を売った金で、補助金が出たため、急ピッチで復旧が進んでいた。

人々は、事件から復活しようとしていた。

「主」

——そしてここにも一人。

「うん、行くうか。シグナム」

はやては笑顔を浮かべて、シグナムと共に歩み始める。

その手の中には、死んだ兄からのバースデープレゼントであるロケットがあった。

「にーに、私生きていくで。にーにの分も、おとんとおかんの分も。絶対に幸せになつたる)」

それは決意。明日を生きるための決意であつた。

「(それが、私の、にーにとおとんとおかんにできる、最初で最後の恩返しやで)」

昨日を振り返らないわけではない。しかし明日を見失わないために前を見る。それが、はやてにできることであつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語り side END ○

☆☆☆☆☆☆☆☆

俺は新幹線の中にいた。無論ただの新幹線ではなく、J P, s 専用の地下鉄である。

「さて、はやてにプレゼントを買えたが……喜んでくれるかな？」

俺は膝の上に乗せたそれを撫でる。これは峰津院が、部下からプレゼントの話を聞いて用意してくれた、最高級品らしい。

「だけど、中身なんだろうな？まあ、峰津院ほどの政界で生きてきた人間なら、こういうので間違えないと思うが……」

俺はホクホク顔で帰宅した。

——この時の俺は知らなかった。

——まさか、中身が”最高級品は最高級品でも”まさか、”たこ焼き機”だったとは。

「峰津院 大和おおおおお!!？」

俺の怒りは天に轟いた（多分）。

なお、帰った日の夜は、たこ焼きパーティーでした。美味しかったです。

第3章 | Black Lagoon |

第3章第1話

第3章

| Black Lagoon |

第1話

| 出張は突然に |

突然だが、上司から「明日から海外研修行ってこい。なに？何も聞いてないだとはあ、まあしかたない。明日からだからな（マジキチスマイル）」と言われたらどうしたらいいと思う？

——笑えばいいと思うよ（白目）

○「ロアナプラ」○
○港○

聞くところによると、この街は『世界中の悪という悪が集まった場所』らしい。複数のマフィアやカルテルによつて共同支配されており、警察すらも買収されているため、政府の介入もない。

つまり、世界の吹き溜まりといったところだろう。

「こんなところに1ヶ月もいなきやいかんとはな」

船の中で中学2年生になった俺は、1人呟く。

『「坊主着いたぜ」』

『マスター、到着したとのことです』

俺の腕輪である待機状態のハーメルンが、見事にそして簡潔に英語を翻訳してくれる。なお、ここに来るまでの翻訳は、全てハーメルンが行なっている。

死者として操られている時に、特典が解放されて手に入れたのだが、高性能でとても役に立つやつだ……未だに、システムとかよくわからんが

「サンキュー」

俺は荷物を持って船から降りる。

「[ソウ]さんですな？」

降りると同時にアジア系の男が日本語で語りかけてくる。なお、彼が確認した名前は俺の研修中に使用する偽名である。総司の司をとってソウ（総）である。

「ええ。貴方が？」

「はい、案内役です。[ジェフリー]とでもお呼びください」

「よろしく願います、ジェフリーさん」

「ええ、こちらこそ」

俺はジェフリーに案内され、車に乗り込む。

「で、ここではどのような生活をなされる気で？」

「1ヶ月五体満足で生き残ってくれですと。それと少し任務がある程度ですが、まあこの程度は子供のお買い物程度ですよ」

俺がため息を吐き出すと同時に、車が出る。

「(はあ、どうしてこんなことに)」

世界の帰回から2年と少し。特にこれといったことはなく、平和に過ごしてたんだが、まさかの海外研修であった。

「(そういえば、昔助けた……そうだ、チャンさんは元気かな？まあ記憶なんてないだろうけれども)」

世界の帰回前の記憶は、俺含めた原作メンバーしか持ってなかった。つまり、昔助け

た三合会のチャンさんも記憶がないだろう。

「あまり騒ぎは起こさないほうがいいですよ？最近では事件があつて、みんなピリピリしてますから」

「事件？」

「ええ、ですからできるだけ外に出ないほうがいいかと」

すると、いきなり車が止まる。

「ちよつと待つてくださいいね」

ジェフリーが窓から頭を出し、スーツ姿の白人の男2人と話している。

「ハーメルン」ぼそり

『どうやら、事件というのは、大きいマフィアの構成員が殺された殺人事件のようですね』

「ふーん、まあ関係なさそうだな」

白人の男が、窓から俺を睨みつける。

『後ろの男が今日入国した男か？目的は？』

『さあ？詳しくは聞いてないんですがね。日本から来たらしいですよ』

『マスター、どうやら疑われているようです』

「(ちっ、面倒な)」

『「ちっ、ヤポンスキーのガキか。目的を聞け」』

「あー、ソウさんはなぜこの場所に来たかと聞いてますね」

俺は数秒考える。

「(ちっ、下手なこと言えないな) 知り合いを訪ねてきましたとお伝えください」

ジェフリーが翻訳して伝える。

『「こんな場所にか？」』

「こんな危険なところにか?と云ってます」

「ええ、実は本人には秘密で来てるんです」

再びジェフリーが通訳する。

『「成る程、サプライズか!!? 悪くないな!!?」』

白人がにっこりと笑う。

『「サプライズか。悪くないな!!? と、好意印象のようです」』

『「グッドラック!!?」』

白人が笑顔で送り出してくれる。

「……………俺がいうのも何だが、あれでいいのか?」

「あれはこの街の支配するマフィアの組織〔ホテル・モスクワ〕の構成員ですが、末端の末端ですから」

車はガタゴトと走り続ける。

「(マフィアか。まあ、害があれば焼き尽くすだけだ)」

あ、悪魔の餌でもいいかもしれない。食うか知らんけれども。

「(それにしても、嫌な街だ。悪人には心地いいくらいなんだろうがな)」

路上で普通に麻薬の売買が行われ、警官が制服のまま犯罪行為を行なう。

「世も末っつてか？」

「何かおっしゃいましたか？」

「いえ、ただ単に景色を見てただけですよ」

しばらく車が走っていると、ふっとジェフリーが何かを取り出す。

「事前に依頼をいただいていた、【自動拳銃：ワルサーPPS】です。勿論軽量になるよう多少改造を加えています」

「どうも」

拳銃を受け取る。軽いと言っていたが、ずつしりと手に重さが乗る。

「（これが命を奪うためのものか。まあ、流石にこんなところでスキルは使えないから、基本的にはこれ頼りか）」

『マスター、私がおります』

「（お前も魔法だからな。下手に使えないから、今回は緊急事態でもない限り待機および翻訳だ）」

『YES、マスター』

俺が《念話》でハーメルンと話しているうちに、さらに車は進む。

「げっ」

「どうかしましたか？」

変な声を上げたジェフリーに、俺は声をかける。

「さっきのホテル・モスクワの大幹部ですね」

ジェフリーの視線の先を見ると、赤いスーツを着た女が立っていた。周囲には明らかにカタギではない人間達が立っていた。

「……………すみません、呼び止められましたので止めます」

「いえ、この街の支配者の一角相手なら、仕方ありません」

車が止まる。

『【案内屋：ジェフリー】か。ちょうど聞きたいことがある。構わないか?』

『【ば、【バラライカ】さん、今日はお客さんがいますし、先程も話せる事は部下の方に全て……………』』

『【ん?客?..】』

女が車の中を覗き込む。

『子供じゃない』

『はい、なんでも知り合いに会いに来たとかで……』

『知り合いを訪ねてこのロアナプラに？……ははははは!!？ 同志軍曹、これは傑作だぞ!!？ ひ弱なお子様が、お友達会いたさにこの悪徳の街に来ただと？ ははははは!!?』

女が大爆笑する。

『坊や、今この街は危険よ。早く母親のところにお帰りなさいな』

そして、何やら優しく語りかけてくる。

「バラライカさんが、早く帰りなさいと言ってます」

「1ヶ月は帰れないんですよね……まあ、気を付けますよ」

俺はそう答える。

『そう………』

女はため息を吐き出す。そして、ポケットから名刺を取り出す。

『何かあれば電話しなさいな』

「何かあれば連絡しろと」

「ああ、ありがとうございます」

俺は名刺を受け取る。

『で、ジェフリー、最近変なよそ者を見なかった？』

『いえ、最近案内したのは、今日入国したこの子だけですが………』

『そう、何かあったら連絡を頂戴』

『は、はい』

女達が離れていく。

「……………ホテルに急ぎましようか」

「ええ、そうしましょう」

急いでホテルに向かった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

「……………あれはマズイな軍曹」

道端で立ち止まったバラライカは、隣に立つ「ボリス」に呟く。

「はっ、大尉」

「あれは戦う者の目だ………それも、絶望的な戦いをしてきた人間の目だ」
「あの少年が、でありますか？」

「ああ、あれはアフガンでも見たことがある。あれは戦士の目だ」

バラライカは総司を警戒することにした。最悪でも滞在中は。
そして、それを眺める人間が1人。

「あれは………」

「どうかされましたか？ 大哥」

スーツ姿にサングラスをした男が、走り去る車を見つめる。

「ふっ、はは。これは、豪勢な“ディナー”を用意しないとイケないな」

男——張（チャン）はくすくすと笑いながら、歩みを進めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語り side END ○

☆☆☆☆☆☆☆☆

「おいつす、やっとホテルについてジェフリーと離れた総司だ。

「つにしても、意外と良いホテルを用意してくれたんだな」

俺はふかふかのベッドに転がる。

「つと、その前に研修内容をいくつか済ませるか」

今簡単にこなせるものだと……………。

「夜間のロアナプラを自由に散策する」か。明らかにやばそうだが、それを目的としてるんだろうなあ」

やっぱり帰ったら、峰津院を縛り上げてサンドバッグにしよう。うん、そうしよう。

第3章第2話

第3章

| B l a c k L a g o o n |

第2話

| ロアナプラ・マジック |

さて、突然ですが質問です♪

散歩してたら、近くのバーで銃撃戦が始まったら……どうすれば良いでしょうか？

——笑えば良いと思うよ（マジキチスマイル）

○ロアナプラ○

○とあるバー前の道○

「……ダダダダダダダ!!？」

銃の連射音が響き、それと同時に店の中の窓ガラスと血と肉が飛び散る。

「……あれってどうするべき?」

『マスター、この街では一般的なことなのでは?』

「あ、白人が引きずられてきた」

なお、引きずり出しているのは、子供である。あの感じだと双子だろう。

「白人だと、あのバラライカさんところのかもしれないな」

『いかなさいますか? マスター?』

「……面倒だが、バラライカさんに黙って見送ってたのがバレるよりはマシそうだな」

俺は歩き始める。

『「あら？こんなところにいたら危ないわよ？」』

何やらデカイ銃を持った少女が、俺にそう言いながら、こちらに銃を向ける。

「いや、英語分かんないんだけどもさ。流星にこれ以上はやらせられんのだよ」

俺は拳を構えて、戦闘の意向を教えてやる。

『「あら、ステゴロやる気？」』

『「姉様、こいつ僕がやるよ」』

『「分かったわ、お兄様」』

斧を持った少年が突っ込んでくる。

「が、遅い」

『「かっ!?!?」』

俺のストレートが顔に決まった少年は、店の方まで飛んでいく。

「おお、綺麗に決まった」

『「お、お兄様!?!?」』

少女がこちらに銃を向け、乱射を始める。

「……ダダダダダダダ!!?」

「反射にしなくてよかった。流星に殺すのは忍びない」

銃弾は俺を貫かずに、俺の体にぶつかってから、地面に転がっていく。

『「……あら?」』

「自然効果スキル《物理無効》。俺に銃や格闘戦は効かない」

ある種無敵能力である。なのに何度も意識を失う羽目になった、デビルサバイバーの世界が異常なのだ。

まあ、《物理無効》をセツトしてなくて、全属性に耐性を与える《真・全門耐性》をセツトしてたから、《物理無効》が効力を発揮しなかっただけでもあるのだが。

『くっ、うっ』

「手加減はした。帰る分には問題ないはずだ」

しっしっしと追い払う仕草をする。

『「覚えておくわよ、お兄さん♪」』

『くっ』

少女と少年は逃げていく。

「きゃっ、と」

俺はけが人の白人の前に屈み込む。

『「すまない……………助かった」』

「いや、英語分らないって」

俺はケータイを取り出す。なお、悪魔召喚アプリの入ってない、今回研修のためだけに渡されたケータイである。

「電話して助け呼べ。俺は中の様子を見てくる」

ロシア人に簡単な手当て（スキルは使わなかった）をして、店内を見る。

「うへえ、こりゃあ酷い」

そこは死体の山であった。というか、もう死体と瓦礫の判断もつかないレベルだ。

「生き残りは……………気絶してるこのウェイトレスだけか」

『そのようです、マスター』

俺はため息を吐き出した。

「悪いがスキルは使えない。少し待っててくれよ」

軽い手当てをしていると、外がざわついてくる。

「来たか？」

外に出ると、先ほどあつたバラライカさんがいた。

『「あら、貴方はさっきの………」』

『「彼が私を助けてくれました」』

怪我をした白人が、バラライカに何かを言っている。

『助かったわ坊や。坊やがいなかったら部下が死んでいたわ』

「……………? (通訳してくれハーメルン)」

『お礼を言っています』

肩をポンポンとバラライカに叩かれる。

『「あら、服がボロボロね。送ってあげるから、その時に買うといいわ……………つて、やっぱり通訳がないとダメね。言葉が通じてないわ』

『「ジェフリーを呼びますか?」』

『「ここまで来たら「ロック」を呼んだ方が早い。同志軍曹頼めるか?」』

『「はっ!!?」』

大男が、車でどこかに行く。

『「少し待っててね坊や。すぐに戻るわ』

バラライカが店内に消え、俺の両サイドを白人の男達が固める。

『待っててくれとのことです』

「今のはなんとなく分かったよ。あーあ、こりやあ、ご同行コースかな？」

俺はポケットからゲーム機を取り出して、ゲームをや……………。

「ゲーム機に穴が……………」

あ、ケータイ（悪魔召喚プログラム入り）は、特殊なホルスターに入れていて、かすり傷一つ無かった。

不貞腐れていると、大男が日本人サラリーマンを連れて戻ってくる。

『「大尉は？」』

『「中に」』

『「そうか……………ロック、すまないが通訳を頼みたい」』

『「なんでこんなところに日本人の子供が」』

スーツ姿の日本人が俺の前に来る。

「俺の名前はロック。君、名前は？」

「……………ソウ」

俺は少し警戒しながら答える。

「ソウ？じゃあ、ソウ君はどうしてこんなところにな？」

「人に会いに来ました。そしたらこの銃撃戦ですよ。一先ず銃撃犯追っ払って、助けに入りましたけど……………」

『「ロック、襲撃犯の特徴を聞いてくれ」』

「えっと、その銃撃犯の特徴とか分かるかな？」

俺は少し思い浮かべる。

「犯人は双子みたいなさつくりの男女で、年齢は俺か少し下くらい。男は斧、女はデカイ銃を振り回して乱射してました」

「人種とかは？」

「無茶言わないでください。中国人と韓国人の顔を見分けられないのに、さらに外国なんてわからないですよ。まあ、白人だとは思いましたけど」

『白人で若い2人組。双子みたいにつくりで、男が斧を、女が大きな銃を使うようです。人種までは分からないそうで……』』

『「そうか、分かった」』

話が終わると同時に、バーからバラライカが出てくる。

『「ロック、来てくれて助かったわ」』

『「いえ。それよりもこれは……」』

『「何も言わないでいてくれると助かるわロック」』

ふつと、バラライカの視線が俺に向く。

『「同志軍曹」』

『「はっ、犯人は白人の男女2人組。年齢はこの少年と同じか少し下くらい。男は斧、

女は重火器で武装しているようです』

『人種は?』

『そこまでは分からないと……』

『生き残りに確認するしかないわね。ウエイトレスが生き残ってよかったわ』

バラライカが、俺の頭の上に右手を乗せる。

『ウエイトレスの手当てもしてくれたのね? お手柄よ坊や』

『大尉、この少年……ソウはどうしますか?』

『下手に帰すと襲われる可能性もあるか……一先ずホテル・モスクワで保護する』

『……それは困るな。ミス・バラライカ』

バラライカと大男が視線を向ける。

『張、何故ここに?』

『なに、俺への客を迎えにな』

「(ん? あれって、もしかなくてもチャンさんじゃね?)」

俺はその人物に気付く。チャンは黒塗りの車から降りて、俺の前に立つ。

『「ロック、すまないが彼に日本語で”日本での借りを返しに来た。約束通りディナーを用意した”と伝えてくれ」』

『「張、悪いが坊やは我々で引き取らせてもらう」』

バラライカが俺の前に出る。

『「あー、ミス・バラライカ……勘違いしているようだが、彼と私の関係は、君と「ダツチ」のそれと同じだ。明日の朝には死体になることはあり得ないさ。無論、彼がこの街にいる間は香港三合会が彼の護衛をしよう」』

『「色々聞きたいこともある。この少年には我々と同行してもらおう」』

チャンさんがため息を吐き出す。

『「ミス・バラライカ。部下を襲撃された君の気持ちもわかるが、彼は私の客人なんだ。」』

後日連れていくから今日は引いてくれないか？」

『……………こちらの部下を1人同行させてもらうぞ』

『どうぞお好きに。ロック、早く彼に伝えてくれ』

何を話しているのかなと思っていると、ロックが通訳してチャンさんの言葉を伝える。

「(記憶があるのか?!? 凄いな。俺達以外に記憶が残ってるなんて……………)」

俺はロックに同行の意思を伝える。

『オーライ、それじゃ行こう』

「あ、ケータイ返してください」

—————

エンド

—————

「いやー、あの時は助かったよ八神。あ、今はソウって名乗ってるんだったか?」

横に立つスーツ姿の中国人が通訳する。日本にいた時よりも堪能な日本語だ。

「ああ、流石にこんな場所で本名を名乗るのはな」

『「ハハ!!?」 違うない!!?』』

俺は餃子を食べながら答え、その答えにチャンが笑う。

『「しかし、ソウもどうしてロアナプラに?言っちゃあれだが、ここは悪徳の街だぜ?子供には縁のないところだろう?」』

「しかし、ソウもどうしてロアナプラに?言っちゃあれだが、ここは悪徳の街だぜ?子供には縁のないところだろう?」

通訳の声を聞きながら、俺は口をナプキンで拭く。

「ロアナプラで1ヶ月間生き残るように、上司命令でね。まあ、初っ端からあんな場所に遭遇するとは思わなかったがな」

『「……………は、あははははは!!? その上司は面白いな!!? 確かにロアナプラで1ヶ月間五体満足に生き残れば、それは一人前だぜ!!? 悪人としてだがな!!?」』

チャンが大爆笑している。

『「さて、そんな研修中のソウには悪いが、実は最近この街もきな臭くてな。悪いがあんな場所にいたお前にも、監視と護衛をつけなきゃマズイ」』

「さて、そんな研修中のソウには悪いが、実は最近この街もきな臭くてな。悪いがあんな場所にいたお前にも、監視と護衛をつけなきゃマズイ」

俺はこくりと頷く。

「俺はホテルの一室に住んでるが、移動したほうがいいか?」

『「そうだな……………ミス・バラライカとの兼ね合いもあるから……………うん、【ラグーン商会】だな」』

「ラグーン商會に預けると」

「ラグーン商會？」

「先程のロックが所属している商會です」

ああ、あの日本人サラリーマンか。

『「あそこはホテル・モスクワとの関係も深い。金も払えば受けてくれるさ」』

——という訳で、俺はラグーン商會に向かう事となった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○ロックside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○ラグーン商會○

○事務所○

「……って訳だ、ダッチ。しばらくこの少年ソウを預かってほしい。ああ、報酬は三合会とホテル・モスクワの双方から出るぞ」

ミスター・張が、両手を広げながらダッチに語りかける。

「張さん、俺達は運送屋であつて、ベビーシッターじゃないんだぜ？　そんなガキの面倒はゴメンだぜ？」

「そう言うなよダッチ。基本的な事は本人がやるし、外出の時はうちのもんが同行するから、ほぼ手間はかからないぞ」

ダッチは嫌がるが、ミスター・張にも何かあるのか、引き下がろうとしない。

「それに、ラグーン商会に頼むのもホテル・モスクワとの兼ね合いだ。

……ダッチ、嫌な話だが、ホテル・モスクワ。いや、ミス・バラライカは今回の一件でブチ切れてる。ホテル・モスクワは臨戦態勢に入り、ミス・バラライカは「ヴィソトニキ」を動かそうとしてる」

「バラライカの直属の部下がやられた話は本当だったのか？　だったら尚更今のバラライカに関わりたくねえ」

そう、街ではバラライカさんの直属の部下、軍人時代からの部下が殺されたと話題になっっている。

「そう言うなよダッチ。それにこの少年はその現場に居合わせて、部下の1人を救った勇者だぜ？　なんならロックに聞いてみるよ。通訳で連れてこられてたから」

「聞いたよ。まあ、ヴィソトニキから死者が出たとは知らなかったが……」

「バラライカはソウに借りがあつた。それでなくても今のミス・バラライカの機嫌を損ねれば……」

「……ああ、クソ、分かつたよチャンさん」

ダッチが右手で頭をかきむしる。

「まあ、ソウは基本的に戦闘能力が高い。大人数相手でなければ対処できるだろう。てか、下手すると戦つた場所が更地になりかねん」

「物騒なガキだ」

ダツチがため息を吐き出す。

「ただ、日本語しかできないから、ロックとワンセットにしたほうがいいだろうな」
「え？俺ですか？」

思わず聞き直す。

「ぶっはっはっは!!? こりやあいい!!? ロックお似合いの相棒ができたぜ!!?」

【レヴィ】が大爆笑する。

「まあ、下手な組み合わせよりはいいか。ロック、そのガキの面倒は任せた」

「え、ええ〜!!?」

「ロック」

肩にポンとミスター・張の手が乗せられる。

「くれぐれも頼むぜ。別途報酬は払うからさ」

「え、ええ」

こうして、俺は子供ソウの面倒を見る事となった。

『「よろしくお願いします。ロックさん」』

『「あ、ああ、よろしくソウ君」』

☆☆☆☆☆☆☆☆

○ロックsideEND○

☆☆☆☆☆☆☆☆

なんか、ホテルからラグーン商会とかいう商会の事務所に住むことになった。

なんか色々と面倒になってきたが、郷に入っては郷に従えというし、ここは外部の人間の俺が気を使うべきなのだろう。

で、俺が現在何をしているかといえば……………。

○自室○

「さて、と」

俺はベットにゴロリと転がりながら、英単語帳をめくる。

「しっかし、どうしたもんかな？」

助けるだけでここまで自由に動けなくなるとは思わなかった……………。

「一先ずバーを襲撃してマフィアに喧嘩売ったあの双子を捕まえないと、この街で過ごしにくいか……………」

それにしてもあの双子……………泣く子も黙るようなマフィア相手に、随分と大立ち回り

ができるものだ。

「欲しいな……………」

最悪どちらか1人でも部下として欲しい。

「J P， s 隊員は召還術使えるけど、本体クソ雑魚だしな。生身でそれなりに戦えるのは欲しいところだ」

俺達の敵は悪魔だけではない。というよりも人間の方が多いのだ。ならば、人を殺すスペシャリストがいた方がいい。

実際現在のJ P， s には、かつて人を殺すことを生業としていた人間も少なからず在籍している。

「まあ、危険を冒すほどで無いからチャンスがあつたらの話だな」

そう、この街で生活しにくくなってまで冒す価値のない冒険であつた。

「へえ、思ったより色々あるんだ」

ロックと香港三合会とホテル・モスクワの構成員がそれぞれ1名ずつというメンバーと共に、俺は道を進む。

「ソウ君は外国自体初めてかな？」

「ええ、日本から出たことありませんから」

「海外未経験なのにいきなり一人旅とは……おまけによりによってロアナプラ」

ロックが頭を抱えている。

「（それにしても、この街には不釣り合いな男だな。腕が立つようには見えないし、特にスーツなんてこの街じゃ目立つ）」

なお、俺の服は弾丸で蜂の巣にされたので、アロハシャツ（現地購入……趣味は微妙）を着ている。

『似合ってるぜガキンチョ』』

レヴィとかいう女が、俺の頭をわっしわっしと撫でる……髪が乱れるわ!!?

「えっと、レヴィが似合ってるってさ」

「ロックさんどう思いますか？」

「……………」

その無言が痛い!!?

「そういえば、張さんがソウ君の戦闘能力が高いって言ってたけど……………」

「あのクリソツの2人くらいなら手を抜いても十二分に処理できますよ？ あの時は負傷者もいましたし、たまたまの遭遇だったので追いつく程度で終わらせましたけど。」

「証拠というか、男の方には顔面右ストレート決めましたし」
「君何やってんの?？」

つか、あいつふらついてたけど無事に隠れ家とかに戻れたのだろうか？ 俺が心配す

ることでもないがな。

「こんな子が日本にいたのか……………」

「すまんロツクさん。本当の日本は魔窟だ」

考えてみると、悪魔使いや陰陽術師に元殺し屋やら結構ヤバイ奴らが集まったJP，sのある日本は、間違っても平和ボケ日本とは言えないだろう。

あ、ついでに日本が戦争になった場合はJP，sにも参戦義務が発生するらしい。第二次世界大戦時はずっと民間寄りだったから参戦しなかったらしいが、今では政府の一組織なので仕方ないそうだ。これも時代の流れというやつである……………by説明してくれた中年JP，s隊員。

「(悪魔は現代兵器があまり効果ないから、弱い悪魔でも戦車並みの価値があるし、上級悪魔に至っては戦略級の価値があるだろう)」

悪魔による蹂躪は可能である。それに近々ミャンマーと中華人民共和国との小競り合いに、JP，s隊員を義勇兵として数名派遣する予定があるという話も小耳に挟んで

いる。

「(中国の南下政策への対抗。 ミャンマーは落とさせないという日本の思惑。 あーあ、政治の世界ってやつか)」

実際、もう小競り合い自体はあるそうだ。

「(各国が雇った傭兵達が防衛線を構築しているらしいが……さて、どこまでやれるのかな?)」

ーーーというか、今気付いたが。

「(あれ?ここもミャンマーに近いタイだよな? ほぼ政府の管理下じゃないけども)」

んんんん? (白目) 峰津院の野郎!!?
非常用戦力として俺をロアナプラに送り込みやがったな!!?

「覚悟だけはしておくか」

○ホテル・モスクワ事務所○

『昨日ぶりね坊や。いえ、ソウだったかしら？』

ロックが目の前のバラライカの言葉を翻訳してくれる。

「ええ」

『昨日の詳しい話を聞いてもいいかしら？』

「では……………」

ソファアに腰掛けた俺は、細かく現場で起きたことを説明する。

「(それにしても冷静だな)」

説明しながらバラライカの様子を観察する。

「――いや、違うな」

俺は最初の判断を覆す。

「(これは、激流のごとき怒りを”殺している”)」

あの世界で同僚が戦死したとある自衛隊員も、同じような様子だった。

――結局、その自衛隊員も民間人をかばって悪魔に殺されたが。

「って訳です」

『「なるほど」』

バラライカが頷いている。

「さて、話は終わりましたし、帰っても大丈夫ですか？」

『「ああ、ありがとうねソウ」』

俺は立ち上がる。

「それじゃ、俺はこれで」

『「あ、そうそうソウ。言い忘れたけど、この街で平和に生きたいなら頭を低くして生きなさい。それがこの街で上手く生きていく秘訣よ」』

俺はその言葉をロツクに訳して伝えられると同時に、椅子に座るバラライカの前に立つ。

「――ああ、その言葉だけは容認できないわ。」

「俺が最もこの世で嫌うことは選択権もない家畜のような存在に成り下がることだ。選択とは人の可能性だ。頭を低くするということは選択を消す行動だ。」

「――ゆえに、俺は己が道を生きるのさ」

俺はニヤリと笑みを浮かべる。

「たとえその先に俺の死が待っていたとしても、それは俺の選んだ選択だ。俺の選んだものだ」

——故に。

「俺は頭を上げて生きる」

『……………そう、まあソウには部下を助けてもらった恩があるわ。何かあれば連絡を頂

戴』

「……………ありがとうございます」

俺は今度こそ事務所を出た。

○十数時間後○

○魚雷艇○

「(なぜ俺はこんなところに……………」

俺は魚雷艇の中で頭を抱える。おまけに目の前で、ロックとこの前バーを襲つてた襲撃犯の少女が話している。

「(え、ええ……………どうするよこれ)」

事情を聞いたところによると、この娘つ子を海外に逃すのがロック達の仕事らしい。

「はあ、一先ず武器の手入れでもするかね」

俺は己の拳銃の手入れを始める。一応拳銃はJP，sでも使うから、手入れの方法は一式仕込まれているから手入れに問題はない。

『「あら、そういうばあなお兄様殴り飛ばしたお兄さんじゃない。お久しぶりね？」』

ロックが翻訳してくれる。

「お久しぶり。元気してたみたいというよりもやんちゃしてたみたいだな」
『まあね』

クスクスと少女は笑う。

「(こう見てれば天使のような少女なんだがな)」

俺は拳銃を分解して手入れしてゆく。

「ソウ君は銃を使うのかい？」

「まあ、基本レベルは」

今度は拳銃を再度組み上げてゆく。

「(ああ、そうだ。一応小細工しておくか)」

俺はケータイを手を取った。

エンド

魚雷艇が停泊した港で、俺は魚雷艇から3人の人間を見下ろしていた。

「ぐっ」

1人は逃し屋………といっても、依頼者を拳銃で撃とうとしたから、廃業する気満々かもしれないが。

「……………」

そして、逃し屋を押さえつけているのは、部下として配属予定の無口な男であった。ぶつちやけ、JP's 隊員である。

『「これは、どういうこと？」』

「お前には選択肢が3つある」

俺は指を一本立てる。無論ロックに通訳してもらう。

「1つ、この場でこの男の手によって射殺される。または、バラライカの報復を恐れた俺の部下が改めてお前を殺す」

『クスクス………笑えないわね』

少女が銃に手をかける。

「2つ、逃走する。まあ、追っ手は付きまとうだろうが………死ぬなよとしか言いようがない」

バラライカの手から逃れられるとは思えないが………まあ、元々逃走しようとしてたからそれでもいい気はするが。

「3つ、”俺の手足となつて俺の組織に所属する”」

『“どんな組織かしら？”』

「犯罪組織ではない裏組織とでも言っておこうか？」

だって、公表されてるのは名前のみの機密組織だものよ。

『……………まあ、死ぬよりはマシかしらね』

少女は肩をすくめる。

『【グレーテル】よ。よろしくお兄さん』

「ソウだ」

逃し屋から拳銃を奪ったJP， s 隊員が、グレーテルを連れて行く。

『「おい、坊主。バラライカを説得できる材料はあるんだろうな？」』

黒人の大男が俺に問いかける。

「まあ、もしもの時は“力尽くで”うまくやるさ」

俺は肩をすくめる。

「それに、ここは悪徳の街。この街ならではのやり方もあるだろう？」

ニヤリと笑みを浮かべる。

「まあ、この前の貸しと帳消しにしてくれると、おつかない人に追いかけて回されないで助かるんだが……」

『「そのおつかないバラライカから電話だクレイジーボーイ」』

「クレイジーボーイって……」

俺は電話を受け取り、ロックへと渡す。

「はい」

「え？ 俺……？」

ええ、だつて英語喋れないもの。

「えっと、『話は聞いたわ。やってくれたわねソウ』」

「申し訳ないバラライカさん。我々も人員不足でね。 ああいう良心の呵責なく人を処

理できる人間というのは我が国では大変に貴重でね。 ジャパニーズマフィアも人を

殺そうとするだけで躊躇つちまう」

『『それでは、私の怒りはどうすればいいのかしら?』』

「部下1名の命と死んだ双子の片割れ、それと」バラライカさん、あんたの命でどうだい

?”

『『?』』

俺はケラケラと両手を広げて笑う。

「俺が事務所に行った時に何もしなかったとでも? 餓鬼だと油断したな。 いや、忘れたかな? アフガン帰還兵元ソ連軍大尉殿。武器を持って立ち向かってきたのは大人だけではなかっただろう?」

このくらいの調査は、電話一本で取り寄せられるものだ。俺は情報を使い、相手を

追い詰める。

『『貴様……………』』

「机の下を見てごらん？ 紙が貼ってあるだろう？ ああ！触らないようにしろよ？
爆発するからな」

——【起爆札】。

陰陽術の一種で、俺が習った数少ない陰陽術である。念を送り込めば爆発するし、調節すれば触れるほどの衝撃で爆発させる事が可能だ。

まあ、小さい花火程度ではあるのだが。

「故にこれはブラフ。ハツタリの類だ。嘘は言っていないが真実も言っていない。さあ、口八丁といこうか」

舌で唇をペろりと舐める。

『『やるじゃないのソウ……………でもねソウ。こんな紙じゃ爆発なんて』』

俺は指を鳴らす。

「ん？何か今爆発したような音が……………」

電話を持っているロックが眩く。

「デモンストレーションには満足いただけただけかな？……………ソファアを爆破した。といつてもごく最小レベルの爆竹程度の爆発ではあるけどな」

そう、俺はソファアにも起爆札を忍ばせていた。

『『なるほど、嘘ではないようね……………』』

「さて、条件は出揃った。俺はあなたに選択を迫ろうバラライカさん」

『『……………』』

「返答はいかに？」

しばらく無言が続く。

『………はあ。まあ、ダッチが逃すのに成功させたら見逃すつもりだったし、仕方ないわね。でも、あの小娘をロアナプラには入れないようにしなさい。来たのがわかったら小娘の命はないと思いなさいな』

「あいあい」

俺は右手をぶらぶらと振る。

『「それと今度私ともディナーかランチに行きましょう。同じ日本人なのにロックと真逆のソウ………少し興味があるわ。あなたの所属組織とかにもね』」

「自由こ」

J P, sを探られたくないが、日本の裏組織ということぐらいは伝えても構わんだろ。

『「ああ、それとこの爆発物どうしたらいいの？　こんな方式見たことないけれど』」

「ああ、筆で……………」

『『筆なんてロアナプラにはないわよ?』』

『『……………』』

「帰ったら至急取り外します」

『『よろしい』』

慌てて帰って爆発物処理をやる羽目になった。まあ、自業自得ではあるが。

「はあ、面倒」

それからの話をしよう。

あれから危機が去ったロアナプラは、警戒態勢を解除。

いつもの混沌とした街が

戻っていった。

バラライカは俺を恨む様子はなく、チャンさんと同様に良好な関係を築いた。
…………いや、一応公務員がマフィアと付き合うのもどうかとは思いますが、この街だもの。
しかたない。

そして、この街についてから”2週間”後…………俺はロアナプラを後にした。

○葬式場○

坊様のお経が会場に響いている。
遺影には父と母が微笑んでいた。

「に、にーに?」

事を理解できていなそうな妹のはやてが、俺の袖を掴む。

「……………すまないはやて。俺が家にいれば……………そばにいれば」

俺は拳をきつく握り込む。血が出るほどに。

「必ず、お前だけは守るから……………」

「にーに……………」

にーにー車を運転中の交通事故。それが父と母の死因だった。

おかしいとは思う。母は運転できないし、父は運転が下手だから運転しながらない。車を運転中の交通事故というのはありえない。

そう警察にも伝えたが、結果は交通事故として処理された。

「……………死者の蘇生、か。やはり考えてしまうな）」

俺に与えられた特典の元となったゲームであるデビルサバイバー2の世界には、蘇生魔法スキルも存在していた。

しかしである。それは神の領域とされ、神により封印されている。使いたくても使えない。

「すまない。父さん母さん」

俺は謝る。

「だが、これだけは約束する。はやてはどんなことがあるうとも俺が育てる。金に不足はないし、仕事の給料もある。どんな事をして俺が」

この日、八神家は俺とはやての2人家族となった。

父の転勤のために住んでいたアパートは引き払い。俺たちは昔住んでいた鳴上にある家に帰ることにした。

——まさか、あんなことになるとは知らずに。

エンド

第4章ーリリカルなのはー

第4章第1話

第4章

ーリリカルなのはー

第1話

ーとある出会いー

あれから半年が過ぎた。

まともな親戚のいない俺達は、現在2人で慎ましく暮らしている。だが、問題がないわけでもなかった。

○八神家○

海鳴に立つ一軒家こそ我々八神家の家である。
俺はそんな自宅のキッチンで料理をしていた。

「はやてー。今日はトマト煮作っておくから温めて食べるよ？」
「分かったで、にーに」

車椅子に座った妹のはやてが、何故かなんちやつて関西弁で答える。
親が死んでから、気付けばはやては似非関西弁を喋るようになっていた。

「（これも親が死んだ影響か？ 今度セラピーとかでも試してみるか？）」
俺は洗った手を拭きながら、ハンガーにかかっているジャンパーを着込む。

「にーに、これから仕事？」
「ああ、夕飯までには帰ってくる」

俺は荷物を持って、玄関へ向かう。

「お土産は何がいい？」

「そうやなー……………」【黒い世界の昔話全集の6】とかどうや？」

「分かった分かった。お姫様の仰せのままに」

俺は近付いてきたはやての頭を撫でる。

「……あつ、グレーテル。お前も家のこと頼むぞ」

「分かったわぁ♪」

元殺し屋の少女グレーテルがはやての車椅子を押しながら答える。

帰国後、グレーテルには日本に慣れてもらうため、ほかならぬ我が家で住み込みで働いてもらうことになった。まあ、拾ったやつが面倒見ろということらしい。

一応グレーテルはJP，s所属ではあるが、JP，sから命令が来ない限りは、妹の護衛と世話を守るのが仕事となっている。

つまり、俺の補佐が仕事みたいになつて。部下の中では一番気楽に動かせるのがグレーテルだ。

「はやて、何かあればグレーテルに言えよ」

「分かつとるよ。ねーグレちゃん」

「ええ、そうねはやてちゃん」

2人が楽しそうに微笑み合っている……うん、グレーテルの笑みを見るとたまにあのバーの銃撃戦を思い出すんだよなあ。

「(つか、日本語ぺらぺらやんけ)」

グレーテルは俺が帰国するまでにJP，sで日本語講習と日本の常識を学んだらしい……まあ、教師役のJP，s隊員曰く「常識は教えた。そう、教えたんです」とのこと。最悪知識が入ってるだけでもマシと思うことにしている。

つか、未だに英語できない俺よりはマシだろう。

「さて、行くかね」

玄関のドアを開けて外に出る。

「明後日は病院だからな？ しつかり用意しておけよ？」

「うん！ 行ってらっしゃい!!？」

「行ってきます」

俺はドアを閉めて歩き出す。そして同時に思い出す。

——親が死んでから、はやての足は動かなくなった。それどころか、体にも原因不明の症状が出てきている。

「俺の回復スキルでは一時的に改善できるが、まるで毒を持続的に注入されているかのようによ元の状態に戻ってしまう」

だが、根本的原因が分からない。医者に行ってもダメだった。

「(クソ。父さん、母さん)」

○JP, s 海鳴支部○

海鳴のJP, s 支部はあまり大規模ではない。少数の人員が配備されているごく小規模の支部だ。規模で言えば全支部中で最も小規模という有様である。

そんな支部に、俺総司は特務実働分隊長という肩書きで勤めていた。

「お、来たか」

島流し同然でここに配属された司令官の中年男性が、会議室で俺を出迎える。

「はっ、失礼します」

俺は部屋に入室する。

「さて、早速だが例の件だ」

「はい、あれから我が分隊と支部の2個分隊も調査に当たっていますが、”あの石”以外新たな発見はありません」

少し前、この海鳴は大規模で超常的事件が起きていた。あまりに不審な事件が続いたために、悪魔かもしれないということでJ.P. Sが調査に乗り出していた。

——【A B 0 0 1：魔法石】。

数日前に発見し、便宜上そう呼んでいるそれは、とある街中で見つかった。何の変哲も無い街中である。

それはありえないほどのエネルギーを宿していた。それこそ、そのエネルギーを使えば核爆弾に匹敵する爆発を起こせる品物だった。

「あんなものが街中に落ちているなど大問題だ。君の”笛”とやらで封印処理できなかったらいいもの」

そう、何故か俺はその石を封印できたのだ。いや、この場合は”ハーメルン”がとうべきだろう。

「まあいい……………それよりも肝心のA B 1 0 0 1は？」

「現在輸送班によつて、本部に輸送中です。護衛には「エンブレム持ち」が付いておりま
すので安全かと」

「エンブレム持ちか……………」

そう言つて、司令官は俺の黒いJ P , s 制服に視線を向ける。

J P , s で黒い制服を着ているのは幹部級の隊員か、エース級の実力者だけだ。そし
て、エンブレム持ちとは俺のように戦闘に秀でたエース級の隊員のみだ。

「なら安心だな。引き続き街の調査を頼む。この街には妙な噂も多い。気を引き締
めてけ」

「はっ!!?」

俺は敬礼して、部屋を出る。

「……隊長」

「ん?」

振り向くと、長いポニーテールを揺らした若い女性JP， s 隊員が立っていた。俺の部下である。

「【三木】か。どうした？」

「はっ、実は報告したいことが……」

俺は報告を受ける。

「【夜の一族】？」

「はっ、古い文献に記載がありました。詳細は不明ですが、悪魔に類似する存在がいたのでは無いかと」

「ふむ、そうするとその夜の一族とやらが今回の連続の事件の犯人の可能性が高いな」「如何なさいますか？」

俺は三木の問いに笑みを返す。

「我々の仕事は怪異から国民を守ることだ。 総員に夜の一族の調査も追加だ」
「はっ!!?」

こうして、俺達は夜の一族とやらの的を絞ることとなった。

「(つか、はやてもいるこの街で訳のわからん存在の跋扈など認められるものかよ!!?)」
「隊長?」

「なんでもない」

俺はそのまま仕事に取り掛かった。

○夜○

○八神家○

「「「ちそうさまでした」」」

俺ははやてとグレーテルの食器を下げる。

「グレちゃん、ゲームやろ♪」

「ええ、やりましょう」

2人がテレビゲームを始める。

「まったく……………」

その様子を見ながら、食器を洗い始める。

「……ピンポン♪」

「ん？こんな時間に誰だ？」

俺は洗い物の手を止めて、玄関に向かう。

「はいはいどちら様？」

「はじめまして！今日から隣に越してきました立花家の【立花 響】です!!? よろしく
お願いしまーす!!?」

俺の目は点になった。なんせそこにいたのは——アニメ【戦姫絶唱シンフォギア】
主人公の立花 響であったのだから。

だがなんだろう？ 何故シンフォギアの主人公がここにという疑問もあるのだが、目
の前の立花 響からは物凄い違和感を感じる。

「え、あ、ど、どうも、【八神 総司】です」

「よろしくお願いします!!? とところで八神さん……もしかして”転生者”ですか？
というかもしかしなくても転生者ですよね!!?」

「なっ!!?」

俺は絶句する。転生者を知っている!!? おまけにこんな場所で!!?

「実は私も転生者なんですよ♪ どちらかというと成り代わりに近いですが」
「……………なるほど、この奇妙な感覚が転生者同士の合図なのか」

事態を把握すると、違和感が消える。

「改めまして、転生者の立花 響です。といつてもこの世界はシンフォギアではないみたいですけどね〜」

立花がはあとため息を吐き出す。

「この世界はデビルサバイバー2の世界だぞ。といつても原作は終わったがな」

「デビルサバイバー2？ いや、「魔法少女リリカルなのは」の世界では？ 八神さんにはやてって妹さんいれば確実にリリカルなのはの世界ですけど……」

はやて？

「詳しく聞こう。上がっていつてくれ」

「お邪魔しまーす♪」

—————

エ
ン
ド

第4章第2話

第4章

ーリリカルなのはー

第2話

ー家族の真実ー

部屋に立花を上げて話を聞いた俺は、思わず頭を抱えていた。

「なんてこった。はやてがそんな事に巻き込まれるとは……………」

どうやら、俺は原作にはいないはやての兄として生まれたらしい。二次創作風に言うならオリキャラという奴だろうか？

「でも、まさか世界滅亡の危機に陥っていたとは……………予想外デス!!?」

立花も目の前で頭を抱えている。

「間違い………じゃないんだな？」

「事前に調べた事柄をまとめると間違いなく」

俺はため息を吐き出す。 正直寝込みたいぐらいの問題が山積みだが、もう一つ確認するべきことがある。

「お前も特典を貰ったのか？」

「えっと、原作に出てくるシンフォギア全種類。でも基本的に使ってるのは『ガングニール』だよ」

立花が答える。

「（俺より圧倒的に特典が少ないな）」

黙っているのかもしれないが、戦闘能力としては、俺よりも下……と、思いたいところだ。安全上な。

とはいえ、シンフォギアを使えるだけでも厄介ではある。

「立花はどう立ち回る気だ？」

「響でいいのよ。私はとりあえずは静観かな？下手に介入するとどう変化するか分からないし」

「バタフライ効果、というやつか」

俺はどうするか、考え始める。

「君の場合は、はやてちゃんの家族だもんね。静観は不可能か」

「残念ながらな」

立花の話が本当なら、「ヴォルケンリッター」とかいうやつらが召喚される事になる。八神家家長として無視するわけにはいかない。

「……………仕方あるまい。JP，sの直属部隊にうまくはぐらかして動員をかけておく。まあ、世界を破壊するほどの相手に一般JP，s隊員がどこまでできるかはわからないかな」

「あれ？もしかしてお偉いさんなの？」

「自由にできる分隊を持つ程度にはな」

俺は腕を組む。

「それと、その【ジュエルシード】だったか？それは1つだが、こちらで回収させてもらった。封印もできたしな」

「え？ジュエルシードを？」

「ああ、1つだけだがな。現在は本局で調査中だ」

ふへーっと立花が呆けた顔を見せる。

「……………さて、立花。これはあくまでも提案だが、俺と立花で同盟関係にならないか？」

「同盟、関係？」

立花が俺に問い直す。

「そうだ。」 転生者同盟「でもいこうべきか？ 転生者同士助け合わないか？」

「なるほど。確かに協力関係にあった方がいいね♪」

「それに1つ懸念がある」

そう、その懸念は当たると本当に面倒な事になる。

「この世界が幾つの作品と混ざり合っているか」が、問題だ」

「分かっているだけでもデビルサバイバー2とリリカルなのはだもんね」

「これで世界規模の災害の起こるアニメや、それこそゾンビ映画とか混ざってみろ」
「すごい、地獄絵図です」

そう、すでに2つもの作品が混ざっているのに、追加分はないと安心するのは軽率である。というか、もしかしたら気付かないだけでもう数作品ぐらいは混ざっているかもしれない。

くそ、オタク初心者というか偏食だったのが祟ったか!!? もう少し興味なくても幅広く見ておけばよかった!!?

デビルサバイバー以外だと見てるのなんて多くないぞ!!?

「こんな状態だ。選択肢はできるだけ多く手元に欲しい。どうだ?」

「まあ、そうだよね」

うんうんと立花が頷く。

「分かった!!? よろしくね!!? 」総司「!!?」

「ああ、よろしく」響」

こうして、俺と響の間に協力関係が生まれた。

「(それにしても、【闇の書】がはやての足の原因か……………)」

俺は特徴に類似する家の中の本を思い浮かべる。

「(父さんの残した遺産の1つであるあの本が……前々から変に頑丈だなとは思ってたが)」

一回全力で殴り飛ばした(一撃でトレーラーくらいなら吹き飛ばせて、おまけに爆散させられる。リアル無駄無駄無駄である)が、壊れなかつたしな。

「(しかし歯がゆい。原作の流れに任せるしかないとは……)」

仕事の縛りがなければもう少し動けただろうか? いや、その場合は生活が苦しくなっていたはずだ。

「……………ままならないものだな」

「え?何か言った?」

「いや、何でもない」

俺は玄関まで響きを送る。

「まあ、こいつ（響）は原作の知識がある。それがあろうちは誠心誠意をもって”利用してやるよ”）」

俺は心の中で薄く笑う。

「俺ははやてのためになら、悪魔にでもなつてやるよ」

「じゃあね♪」

「ああ、またな」

俺は響きを見送る。

「（それにしても、転生者同士の共振……あまりいい感覚ではなかったな）」

瞬間、他にも転生者がいないか聞き忘れたことを思い出した。

「（まあ、また会った時に聞けばいいだろう）」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

「総司か」

家に戻った少女、立花 響はほうつと熱を帯びた息を吐き出す。

「あれが、あの人の転生した姿かあ」

立花 響の前世は1人の女性だった。どちらかと言えばクラスに1人はいるのではないかというくらいタイプの女性だった。

そんな女性にとって八神 総司の存在は、”ヒーロー”だった。

「あなたを追ってここまで来て良かった……」

虐められていた学生の頃。八神 総司の前世に助けられた彼女は、八神 総司の前世に恋心を抱いた。

しかし、彼女には自分が彼に見合う自信がなく、ずっと恋心を秘めておく……その筈だった。

——彼の死を知った。

それは女性にとって悪夢であつた。

そして、女性は病に伏せるようになった。ガンだった。

「希望も夢も無かつた。けれど」

病に倒れた女性は転生した。彼が好きだと話していたキャラクター【立花 響】の外見で。

「これは運命」

第4章第3話

第4章

ーリリカルなのはー

第3話

ー我らは裁くー

ー J P, s は、超法規的組織である。

組織的リンクで言えば警察や消防に自衛隊などよりも上である。

そして同時に J P, s は、警察と同様に調査や取り調べ、身柄の確保逮捕などの権利を有している。まあ、さらに言えばーーー「殺しのライセンス」も所有している。

○とある廃墟ビル前○

「まあ、つまり、俺達も悪事は見逃せないってわけさ」

俺はハンドガンに弾倉を入れる。

「まあ、それだけが理由じゃないが。全殺しだ」

俺は周囲にいる職員達に語りかける。

「さあ、JP， s 局員諸君……………」

「——正義の時間だ」

「「「はっ!!?」」」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

廃墟となったビルの中。普段全く人の気配がないそこは、何人もの男達がいた。

そして、その奥に3人の少女が捉えられていた。

「なんなのよこいつら!!?」

【アリサ・バニングス】が簀巻きにされながらも、怒りの声を上げる。

「あ、アリサちゃんおちついて。あまり刺激しないで」

【月村 すすか】がアリサを宥める。

「なんで私だけギャグ漫画的縛り方やねん!?!?」

ギャグ漫画のように、異様なほどぐるぐる巻きにされた八神 はやてが、ツツコミを入れる。

そう、3人は図書館からの帰りに拉致されたのだ。犯人は目の前にいる男達。

「ちつ、うるせえな」

男の1人が舌打ちする。

「まあ、いい。旦那さつさと済ませてくれよ」

「人間風情が……まあいいさ」

男達の奥から、中年の男と付き添いのメイド3名が現れる。

「氷村………叔父様」

さすががその男の名前を呼ぶ。

「ふん、月村の小娘が」

氷村は見下すような視線をすずかに向ける。

「下等種族に媚び売って友達か？ やはり人間などという下等種族に媚びを売る月村な

どよりも、夜の一族のトップは我が氷村がふさわしい」

自分に陶醉するかのように氷村は言葉をこぼす。

「(夜の一族?)」

ふつと、はやての中に兄の言葉が蘇る。そう、グレーテルと話していた時に出た単語に夜の一族があつたはずだ。

「よ、夜の一族?」

「や、やめて!氷村叔父様!!?」

「そうさ!!? 僕とそこにいる月村 すぐかはなあ!!? 夜の一族!!? ”吸血鬼”なのさ!!?」

その瞬間、すぐかから涙と声にならない悲鳴が上がる。

「……なるほど、夜の一族とはそういう存在か」

する。

ーダダダダダダ!!?

「ぐあ!!?」「ひぎつ!!?」「かべ」

男達が次々と殺されてゆく。

「いいことを教えてやろう。この地球上で最も残酷で恐ろしく、そして”殺すこと”に特化した生物こそが人間だ」

青年は拳銃を取り出して発砲する。

「く、クソ!!? おい、奴を殺せ!!?」

メイド達が青年に攻撃するーしかし。

「邪魔だ【なき払い】」

メイド達は一気に壁に叩きつけられ、体から火花を散らせさせたまま壁に埋まる。

「ぼ、僕の自動人形が………」

「あ？人間じゃなかったか。まあ、証言を回収するにしても、こいつらはいらないな」

青年は氷村に拳銃を向ける。

「人間は古来から貴様らのような人外に対抗するために備えをしてきた。いかに人間を守るか、いかに人外を殺すか——そして、善良な、または有益な人外と共に生きていくかとな」

青年が携帯を操作すると青い光に包まれ、それが現れる。

「【幽鬼：クドラク】」

『あっひゃっひゃっひゃっひゃっ!!?』

青白い顔色の男が、大笑いをしている。しかしその場の全員に分かった。その男が人間ではないと。

「今日だけ吸血を許可する。吸い殺せ」

『ヒヤハハハはは!!?』

「や、やめ!!?」

クドラクの牙が、氷村の首に刺さる。

「ぐああああああああ!!? や、やめ、やめでぐ……………」

ドサリと氷村は地面に落ちる。すでにその体から命は失われていた。

「状況終了」

「他の場所も確認しろ。まだ残党が残ってる可能性もある」

「「はっ!!?」」

黄色い制服を着た人間達が、ビルの中を探索する。

「さて、次は君達か」

すずかの肩がブルリと揺れる。

「やめて!!?」

そんなすずかの前に、アリサがおどり出る。まだ簀巻きにされているアリサがである。

「その状態で、自分をこんな境地に招き入れたかもしれない奴をかばうか……娘っ子、
どういいうつもりだ?」

「すずかが吸血鬼だろうと夜の一族だろうと関係ない!!? 私はずずかの親友なのよ!!
?」

「アリサちゃん……」

「ごめんね、すずか。でもこれだけは覚えておいて。

——あなたが何者でもどんな秘密があっても受け入れる。なんとって”親友”なんだから」

「アリ、サちや……………うああああああん!!？」

すずかがアリサの胸元に頭を埋める。

「いやーいい話だなあ」

青年が拍手する。

「さて、まずは縄を解くとしようか」

クドラクが爪で糸を切っていく。

「これから君達を解放する。一応街中までは護衛するからそのあとは……………ん？」

青年が注意を別の場所へ向ける。

「隊長？」

「戦闘用意。外の奴らがやられたようだ」

「「っ!!？」」

中にいた黄色い制服の人間達が銃を構える。

「最優先防衛対象少女3名」

「「はっ!!？」」

その時、何人かの人間達が部屋に侵入してくる。

「すすか!!？　アリサちゃん!!？」

女性が大きな声で2人の名前を呼ぶ。

「身内か……………」

青年達が警戒を解く。

「3人とも無事だ」

「3人？」

女性が名前を呼んだ以外の少女——はやてを見る。

「あ、図書館ですずかちゃんとは仲良うなった八神 はやてです」

「あら、巻き込んでしまつてごめんなさい。でも、無事でよかつたわ」

女性は3人を両手で包む。

「それで、貴方達は……………」

「日本の裏組織とでも言おうか？ まあ、政府の裏の顔という奴だ」

青年は説明にならない説明を行う。

「今回は別件調査中に誘拐事件を目撃したために、介入させてもらった」
「それは、ありがとう」

青年はフウとため息を吐き出す。

「まあ、結局はその件とも関わりがあったわけだが……なあ、夜の一族さん」
「っ!?」

女性の背後に立っていた剣を持っていた青年が前に出る。

「なぜその名前を……」

「1つはその死体が生前に語ってくれたというのものもあるが、最近こちら辺で起きている事件を調べていて、昔の文献に夜の一族の記載があつて調べていたんだ」

青年は肩をすくめる。

「まあ、そつちの事件もある程度のこととはわかった。誘拐事件も解決したし、これで退散するよ」

「待ちなさい!!? 貴方達には少し話があるわ」

「こつちはないぜ? まあ、夜の一族の存在を知ったことによる守秘義務というところか? 安心しろ。我々はお前達のような人外達を相手にするために作られた組織だ。今更吸血鬼の一族が1つ2つ増えたところなんでことはない」

青年の前にクドラクが降り立つ。

「一族に関することは報告しない。今回は一般家庭の子供達が誘拐された事件として処理する……それで不満ならば、もう一度殺戮せねばならない。今度は助けた命もな」

青年から殺気が放たれる。

「……………分かったわ。相互不干渉といきましょう」

「ああ、それで構わない」

俺とグレーテルがクラツカーを鳴らす。

「にーに、クラツカー鳴らすのもう5回目やで」

「何回鳴らしても一向に構わん!!? 何せはやての誕生日なんだからな!!? わっはっはっは!!?」

俺は大きな声で笑う。

「そうよ、はやてちゃん。 祝い事はしっかりしないと」

そう言いながらグレーテルがケーキを皿に乗せる。

「今日は深夜までこのテンションで行くぜー!!? まあ、グレーテル!!?」

「いつえーい!!?」

「にーにアルコール飲んでないやろうな? テンション高すぎちゃう? 未成年飲酒は犯罪やで? グレちゃんもテンション高いし」

はやてが呆れている。

「何を言うんだはやて!!? 誕生日は祝って騒いでナンボだろ!!?」

「いえーい♪」

そう、これぞ八神家のルールだ!!?

「それに今後しばらく忙しくなるから、その前にな」

俺はコーヒーを飲む。

「忙しく?」

「ああ、まだ先の話だが……まあ、色々とな」

そう、リリカルなのはもそうだが、JP'sの方も忙しくなるらしいのだ。

「(俺はあとどれだけこの子のために一緒にいてやれるのだろう……)」

俺の両手はもう真っ赤に血で染まっている。いつかは裁きを受けるかもしれない。――だがしかし、裁きを受けるその時までには、この子のために選択肢を残してあげたい。

「にーに？」

「ん？ ああ、ケーキ食べたなら終わりにするか。明日もあるしな」

俺達は誕生日会を楽しんだ。

○翌朝○

「ふう……………」

俺は緑茶片手に、息を軽く吐き出す。ついでに近くに立っていたグレーテルが臨戦態勢なのをチラ見で確認する。

「つまり、はやてが主人となった魔導書から召喚されたのが貴方達ヴォルケンリッターと」

俺は目の前に並ぶヴォルケンリッターの戦士達を見る。

「はい、主はやての兄上。我々は主はやてを守るために騎士です」

ピンク髪のポニーテールな女性が、頭を下げる。

「えっと、にーに……………」

はやてが不安そうに俺を見る。

「……………まあ、はやてに仕えるというなら摩訶不思議な存在だろうが問題ない」

それにこれで原作が無事始まるし、何よりこの前の誘拐の一件もある。護衛人員はい

た方がいい。

ああ、ついではやてをみすみす誘拐された原因は、グレーテルがたまたま別任務で離れていたためである。

つまり、護衛にこいつらが加われば、かなり安全になる。

「資金は少し厳しいが、最近足長おじさんが支援してくれてるから大丈夫だろう」

俺は緑茶を一口飲む。

「ようこそ八神家へ、ヴォルケンリッター」

こうして、ヴォルケンリッターの4人が八神家の新たな一員となった。

「にーに、意外と慌てへんな？　こんなこと起きたら混乱すると思うんやけど」

「……………はやてには言つてなかつたが、俺の所属はJP，sという組織だな。霊的国防組織だ。こう言う異常事態は何度か遭遇している」

「霊的国防組織？　JP，s？」

はやてが訳が分からなそうな表情をしている。

「まあいいさ。 こういうのが慣れっこだっということが分かればな」

俺は軽い笑みを浮かべる。

「さて、そうとなれば今日は鍋にでもするかね」

「わーい♪ にーにの鍋大好きやで!!？」

「だが、その前に……………」

俺は目の前のピンク髪の騎士に視線を定める。

「お前達のチカラを見せてもらおう」

「はい」

俺とピンク髪の女が立ち上がり、一般家庭よりも広いであろう庭に出る。

「ハーメルン」

『バリアジャケット展開』

俺の服装が軍服へ変わり、右手にはラツパが握られている。

「バリアジャケット!?」

「ああ、そう言うんだったか？　こちらとしても未知の技術だな。まだ俺くらいしか持ち合わせていないよ」

庭に陣取った俺は、ラツパを構える。

「JP， s所属八神 総司……………参る」

「将【シグナム】……………参る」

ラツパに口をつける。

「《ノイズパレット》!!?」

音の弾丸が、シグナムに放たれる。

「っ!!?」

しかしたやすく回避される。

「……………不可視の弾丸、か」

「よく分かったな。俺の攻撃は”音”だ。ゆえに不可視」

同時に、俺の魔法色自体が無色透明らしく、俺の攻撃自体避けることが難しいのだ。

「なんと……………」

「いやしかし、初見で避けられるとは思わなかったな」

初見殺しとも言えるこの技を避けた人間は、今現在皆無だ。悪魔でも、基本的に屠れ

る。

それが避けられるとは。

「やはり、只者ではないか」

俺はラツパを改めて構える。

「……………ふう」

一呼吸入れたシグナムが構える。

「ハーメルン」

『YES、マスター。 モード【アサルト】』

ハーメルンが変形していく。そしてその形を長細いラツパに変える。

「《ガトリング・ノイズパレット》!!?」

1分で625発というところある機関砲と同等の発射速度で放たれる音の弾丸が、シグナムに襲いかかる。

「はあっ!!?」

しかし、シグナムの剣がすべての弾丸を撃ち落とす。

「直線的な攻撃など!!?」

「ぐう!!?」

そう、このアサルトモードはガトリングガンのように魔法弾を吐き出せるが、その欠点として誘導はできない。まっすぐ直線にしか発射できないのだ。

「しかし、それでもこの弾丸を見切るか!!? ガトリングガンと同等の発射速度の魔法弾をつ!!?」

「はああ!!?」

シグナムは弾丸を弾き続ける。

「ーっーちっ」

俺は弾丸を吐き出すのをやめて、モードを通常に戻す。無駄弾撃ちすぎて魔力を消費しすぎるわけにはいかない。

「……………守りについてはやるようだな」

「そちらこそ、嵐のような猛攻……………見事な腕です。それに魔力量もなかなかの様子」

「では」

「ええ」

俺はハーメルンの変形を開始する。

『ロードカートリッジ。モードマーチ』

葉莢がハーメルンから吐き出される。

「ロードカートリッジシステム!!?」

「ほう? 知ってるのか? まあいい………来い!!? 将シグナム!!?」

「参る!!?」

シグナムが斬り込んでくる。

《《ノイズシフォン》!!?》

音の砲撃が、至近距離のシグナムに放たれる。

「はあああああ!!?」

音の砲撃と剣がぶつかり合い、爆発を起こす。

「ぐっ」

第5章―戦姫絶唱シンフォギア― 第5章第1話

第5章

―戦姫絶唱シンフォギア―

第1話

―夢―

○自宅○

「ふあくあ……今日は疲れたな」

俺は布団の中に潜りながら、大きなあくびをする。

「明日も早いし、今日はもう寝ないと……………」

なお、はやてはシグナム達と寝かせている。というか、シグナム達が就寝時の護衛は任せると聞かなかったのだが……………」

「ケータイと拳銃を枕元に置いてっと」

俺は布団をかぶる。

「おやす……………ZZZZ」

○??○

「……………ん？どこだここ？」

俺は暗い空間で目覚める。

「……………ハーメルン」

『イエス、マスター』

ケータイと拳銃、そしてハーメルンを持っていることに一安心する。

「ここはどこか分かるか？」

『ノーですマスター』

「そうか」

すると、目の前が明るく光り出し、映像が映り出す。

「これは……………学校？か？」

そこは学校の教室らしき場所であったが、見覚えのない教室であった。

『「やーい!!? 人殺しー!!?」』

「あ?」

映像には、こちらに雑巾を投げつける中学生らしき青年の姿が映っていた。

「なんだこれは……………」

『マスター。どうやらこの映像の視点の主はいじめられているようです』

「の、ようだな」

しばらく見ていると現れるのは過酷なまでのいじめの現場と、「ツヴァイウィングの事件」やら「ノイズ」やらという単語。

「【戦姫絶唱シンフォギア】か?ということはこの視点は主人公の【立花 響】か」

何気に原作で一番好きなキャラクターであり、転生者で同盟の盟友である立花 響と

同じ姿の人間だ。

「(にしても胸くそが悪いな)」

「何これ、胸くそ悪」

「ん？」

「え？」

横を見ると転生者の方の響がいた。

「おう、お疲れさん」

「あ、うん」

俺達はしばらく映像を見る。

「……………総司君は状況分かる？」

「シンフォギアの映像を見せられてるくらいしか分からん。おまけにこの空間はなんだ？」

「ここは原作の立花 響の精神空間だと思う……………多分だけど」
「精神世界？」

俺は響の……………転生者の響である”響(転)”顔を見る。

「うん、多分原作響の多重人格として私達が響の精神世界に存在してるって言えばわかる？」

「面倒な……………俺はただ寝てただけだというのに」

「まあ夢ということで割り切ろうよ」

「無事に起きられるといいが……………」

しばらくすると映像が響の父親が出て行った場面になる。

「……………まあ、この際だ。夢なら試しに少し原作改変をやってみたいな。多重人格ということは身体の主導権を握れば現実世界に出られるだろう？」

「私も一度出られたし、大丈夫だと思うよ？」

「よし、なら少し練習しておくか」

そのあとめちやくちや現実世界に出る練習をした。

○数ヶ月後○

「ふむ、原作どころでなくなってしまうんだが……………」
「確かに」

数ヶ月も一緒にいて遠慮がなくなった響（転）がため息を吐き出す。

「まさか原作響が家出するとは……………」

そう、原作響はいじめに耐えきれずに家を飛び出していた。すでに路銀もなくなり途方にくれている状態である。

「どうするの?」

「こういう時の多重人格さ」

俺はニヤリと笑った。

「ついでに給料の前借りと行こう。なに、いつか所属することになるから問題ないだろうさ」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○第2課○

そこは対ノイズの最前線たる第2課の基地であった。

”奏”……………」

そんな基地の中で、防人である【風鳴 翼】は休憩室で体育座りになり、足を抱え込んでいた。

「私は……………」

その瞬間であつた。

ーードオオオオン!!?

ーーブウウウウ!!?

「な、何?」

翼は思わず立ち上がる。

『翼!!?』

「司令!!? これは一体!!?」

通信に出た翼は思わず問う。

『襲撃者だ!!? 相手は1人だが異端技術を使っているようで手も足も出ない!!? 迎撃を頼む!!?』

「り、了解!!?」

翼は急いで休憩室を後にした。

○とある廊下○

そこは前線であつた。第2課の兵士達が銃撃で侵入者を迎撃していた——しかし。

「~~~~~」

『……………』

星型の化け物を正面に立てて銃弾の盾としながら、マフラーを頭にぐるぐる巻きにし

た少女が鼻歌を歌いながら進む。

「《裁きの雷火》」

「「ぐああああ!?」「」」

少女から放たれた電撃が兵士達に落ち、次々と意識を失っていく。しかし、体力の半分を削るといふ攻撃のため、死者はいなかった。

少女は倒れた兵士の前に座り込み、ポケットなどを探る。

「~~~~♪~~~~♪」

「そこまでにしてもらおうか?」

その目の前に、第2課司令官【風鳴 弦十郎】が立ちはだかる。

「これ以上は行かせん!!?」

「ちつ、ある種最高戦力が出てきたか」

少女が鼻歌をやめ、立ち上がる。

「まあ、ここら辺が潮時かな？」

「何が目的だ？」

「ふふーん、言っても構わないけれども、それじゃ面白くないーチカラで従わせて
みるよ」

星型の化け物が飛び出してくる。

「フン!!?」

1撃で星型の化け物が壁に叩きつけられる。

「……………え?マジで?」

少女の声に焦りが生まれる。

「投降しろ。悪いようにはしない」

「投降？するわけないだろ？」

星型の化け物が、ふらつきながらも少女の前に戻る。

「叔父様!!？」

「翼か!!？」

「……………風鳴 翼か」

ギアをすでに展開している翼が弦十郎に合流する。

「……………ちっつ、形勢が不利だな」

「投降しろ」

「馬鹿の一つ覚えかよ」

少女が逃走を開始する。

”デカラビア”!!? 足止めをしろ!!?”

翼達の前に星型の化け物——デカラビアが立ちはだかる。

「殴った感じはノイズではないようだが……こいつは一体」

「叔父様!!?»

「ああ!!?»

OTONAと防人の攻撃に、デカラビアは3分という短いようで長い時間を稼いだ。

『……………!!?’』

ダメージを食らいすぎたデカラビアが消滅する。

「侵入者は?’」

弦十郎は指揮所に問いかける。

『すでに脱出しました』

「素早いな……被害は」

『幸いにも死者はいません。負傷者20名近くと施設の被害がそれなりにといつところ
でしょうか?』

それと、とオペレーターが言葉を続ける。

『金庫から金が盗まれてました。といつても被害額よりも圧倒的に少ないであろう50
万ほどですが……』

「目的は窃盗だったか……おまけに規模の割に被害額が少ないな」

『どうしますか?』

「調査が必要だな」

こうして、襲撃事件は幕を下ろした。

なお、倒された兵士達のポケットには、ごめんなさいと書かれたメモが入っていたと
さ。

第5章第2話

第5章

―戦姫絶唱シンフォギア―

第2話

―急転直下―

○響精神世界○

おいつす、給料の前借り（物理強行）を行った総司だ。

「いやー、見事に混乱しているな、原作響は」

映像からは何これと現金50万を手にして慌てている様子がありありと伝わってく

る。

なお、筋肉痛に苦しみながらである。うん、体は共用なのよな。

「それは、急に手元に50万円と好きに使ってって書き置きがあればねえ……………」
「ま、兎にも角にもこれで少しの間は持つだろうよ」

それに、今回の襲撃で基地内の月を破壊するための兵器「カディングル」にダメージを与えられたはずだ。

これでボスキャラの「フィーネ」の月破壊計画は後退したはずだ。

「(あとは原作響だが……………ちよいちよい助けていくしかないか?)」

問題は金である。生活費がなければあるのは良くてホームレス生活か悪くて死が待っている。

「(まあ、最初は大きく動くかね)」

俺はニヤリと笑みを浮かべた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○原作響side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

——私の中には私以外の人間がいる。

気付いたのは時々記憶が飛んでいたからだだった。

気付いたら大金が手の中にあつた。気付いたら日本を出国してロシアの港に着いたところだった。気付いたら私を誘拐しようとしたマフィアが目の前で倒れ伏していた。

そして気付いた。私の中には別の人格があることを。

だから、試しに交換日記をやってみた。結果は上々だった。

——私の中には2つの別人格が存在した。

1人目は“ソウ”と呼ばれる男性人格。大金を手に入れたりロシアへ行ったりマフィアを倒したのはこの人格だそうだ。本人曰く、荒事に慣れてるらしい。

2人目は「リツ」と名乗る女性人格だ。頭が良くって、交換日記2号（ほぼ勉強ノート）で私に勉強を教えてください。

この2人のおかげで、私は数ヶ月の間無事にロシアで生活できている………いるのだけれども。

○マンションの一室○

「どうしてこうなったんだろう………」

「どうかされましたか？ボス」

机に向かって勉強する私の席から少し離れた場所で、チェスをしているロープ姿の男達の1人が私に問う。

「な、なんでもないよ」

「そうでしたか、失礼しました」

ロープ姿の男は、明らかに一般人ではないマフィアナロシア人にロシア語で語りかけている。

「(もう、訳わかんないよ!!?)」

リツの話によるとロープ姿の男達は錬金術師と呼ばれる異端技術を使う者で、ソウによるとマフィアナロシア人達は元ロシアンマフィアの構成員達らしい。

んでもってその2人によると、彼らは「ジプス」という裏組織の構成員であり……その、なんとというか……私の部下とのことらしい。

うん、正直訳がわからないけれども、簡単に言えばリツとソウの所為だった。

まず私を誘拐しようとしたロシアンマフィアを組織ごとソウが破壊。残党が暴れられたりしても困るので、かき集めて自由に動かせる組織“ジプス”を作り上げた。そして、そのジプスの販売網で、リツが作った異端技術アイテムを売っていたら、フリーの錬金術師達が何人かジプスに加入した。

うん、ちよつとよくわからないデスネー。

「(オマケに少しづつではあるけど、勢力を拡大させ続けているのがまた怖いよ)」

ロシアンマファイアだけではなく、最近ではチャイニーズマファイアやコリアンマファイアにヤクザまでジプスに加入し始めているらしい。さらには、錬金術師の組織がジプスと協力関係を構築しようとしていると報告も受けた。

「(世界はファンタジーで溢れてたんだなあー)」

「あ、そうだボス」

「な、何かな？」

錬金術師の構成員が私に書類を渡す。

「ソウさんに頼まれていた日本行きの手ケットが用意できましたので渡しておきますね」

「えー、私知らされてないんですけど……」

「そうでしたか。5日後に日本に向かうとのことでした。護衛に錬金術師1名とマファイアが2名付きますのでご安心を」

「う、うん」

私はチケットを受け取る。

会話で分かったかもしれないけど、彼らは私が多重人格であることを理解しており、おまけに派閥が存在しているらしい。

まずマフィアを中心とした【ソウ派】。最も数が多く、野心家や危険思考の人間もいる。ソウによると単純な荒事担当らしい。ソウに忠誠を誓っているが、弱いところを見せれば多少噛み付いてくるかもしれないとのことらしい。

次に【リツ派】は、錬金術師やインテリ系マフィアの派閥で、この組織で一番稼ぎのある派閥だ。リツをトップと考えて行動しているようだ。

そして、考えたくもないけど………【立花 響派】。私に忠誠を誓う派閥だ。彼らが言うには、リツもソウも私が手綱を握っているとのことらしい。

「(いやいや無理だからね!!?)」

手綱どころか、2人がいなければのたれ死んでいるところである。

「(それにしても日本、か。取引か何かかな?)」

日本と聞くと思い出す。

お母さんは元気だろうか？おばあちゃんは無事だろうか？お父さんは家に帰ってきたかな？引越した親友は新しい友達はできただろうか？

「……………」

正直日本に帰るのは怖い。でも、海外にずっといるのもストレスが溜まる。

「（そういえば、最近日本のニュースとかも見えないな……………どうなったんだろう？）」

学校については元の学校はもう強制退学だと思ったから、ソウが裏から手を回して、ロシアの日本人学校を卒業したことにした。らしいから現在は中卒……………ということになる。

「（はあ、憂鬱だなあ）」

引っ越してしまった親友は元気かな？ご飯をしっかりと食べてるかな？

「ま、知ってるところに行くとは限らないよね？」

私は今日の分の勉強を終わらせた。

○その頃精神世界○

「お前、どうしてシンフォギアの異端技術が頭に入ってることを言わなかった？おかげでいい商売になっているが………」

総司ことソウが頭を抱える。

「言い忘れちゃった。テヘペロ♪」

転生者の立花 響ことリツがテヘペロとかた目をつむりペロりと舌を出す。

「まあ、これで原作までに戦力も整えられた」

「【パヴァリアア光明結社】まで接触してくるとは思わなかったけどね」

パヴァリアア光明結社は錬金術師の秘密結社である。

「動向を掴むには丁度いいさ」

総司はニヤリと笑みを浮かべる。

「……さて、そろそろ始めよう。原作をな」

○5日後○

○日本○

懐かしい祖国の地。もう2度と来れないかもしれないと思っていた日本に私は入国

した。

「……【八神 響】という偽名で。

「（いやいや、入国審査雑ウ!!?）」

違うのは苗字だけである。日本の入国管理システムは大丈夫なのだろうか……。

「（……ま、私には関係ないか）」

黒いスーツにコートを着た私は、背後にジプス構成員の護衛を引き連れながら街を進む。

「（今日は自由にしていいってソウ達も言ってたし、どこか日本料理でも食べに行こうかな♪）」

ロシアで日本食を食べることもあるけど、やはり日本食とは味付けが少し違うのだ。

「うーん、どのお店がいいかな〜♪」

幸いにもお金には困っていない。というよりもリツの異端技術アイテムがかなりの収益を上げていて……正直言つて昔のお父さんよりも懐は暖かいと思う。

「(ん? 「フラワー」? お好み焼き屋さんか……うん! ここにしよう!!?)」

私はのれんをくぐった。

「……ひ、びき……」

「ん?」

見ると、お好み焼きのたれを口元に付けた親友がいた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○原作響sideEND○

☆☆☆☆☆☆☆☆

第5章第3話

第5章

―戦姫絶唱シンフォギア―

第3話

―シンフォギアアアア!!?―

☆☆☆☆☆☆☆☆

○原作 響side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

親友に引きずられるまま、フラワーから離れて公園に来た。ジプスの部下達は店に置いてきた。

「(私のお好み焼き……)」

「響なんだよね!!?」

親友【小日向 未来】が私の両肩を掴む。

「う、うん、そうだよ。久しぶり」

私はあははと苦笑を浮かべながら答える。

「元氣そうでよかった……家出したって聞いてからすごい心配したんだからね!!?」
「め、面目無い」

未来が詰め寄ってきて、私は一步後退する。相変わらず未来には勝てないや。

「……………今はどうしてるの?」

「ロシアのウラジオストクで暮らしてる。向こうで中学も卒業したし、高校にも通ってるよ」

嘘だ。学校なんて行ってない。金で書類上そう処理されているだけだ。まあ、勉強だけはリツに教わっているけど……。

「そう、なんだ」

未来がチカラが抜けたようにベンチに座り込む。

「未来は元気だった？今は何してるの？」

「うん、元気だよ。今はリディアンって学校に通ってて、さっきはみんなでご飯に——」

瞬間、サイレンが鳴り響く。それはよく知っているノイズ襲来のサイレン。

「え？」「っ？！？こんな時に！！？」

あちらこちらから悲鳴が上がり、さらには何かが這いずりながら現れる。そう、それは私の見覚えのある——【ノイズ】。

「ひっ!!??」

あのライブ会場が蘇る。次々と灰にされていく人々、逃げ惑う人々。そして、生き残った私達へのバツシング。

私は何か悪いことした? 私は、私は……………!!??

「あ、ああ……………」

「響!!?? しっかりして!!??」

「み、未来」

腰が抜けて座り込む私を、未来が立ち上がらせようとする。でも腰が抜けて動けない!!?? こうなったら!!??

「み、未来だけでも逃げて……………わ、私は大丈夫だから、早く!!??」

「ーっ!!??」

未来は私の前に立つ。まるで私の盾になるかのように。

「み、未来？」

「今度こそ、私が響を守るから」

ノイズが迫ってくる。

「ll”Rei shen shou .jing rei zizzl”

「え?！」

未来が詠うと共に、未来が光に包まれる。

「今度こそ!!? 私!!?」

それは、アニメとかのバトルスーツのような装備をした未来であった。

「(え、ええええええ!!?)」

あれは見覚えがある。確かリツが異端技術知識も覚えなさいって書いた資料の中にあった。

「(シン、フォギア)」

私の胸の中に眠るものと同じもの。そしてノイズを殺すことのできる兵器。

「(なんで未来がそんなものをつ!??)」

ありえない!?? なんで未来がそんなものを持つてるんだ!??

未来はシンフォギアを纏って次々とノイズを消滅させていく。そう、あの日の奏さんや翼さんのように……………。

しかし、数が多いのか押され始める。

「小日向!!?!」

その瞬間、蒼い一閃が走る。

「翼さん!!?」

「え?」

それはトップアークテイストの風鳴 翼……………あの日私を救ってくれた1人だった。

「どう、いう、こと? ねえ、未来!!?」

「詳しいことは後で説明するから、今は逃げてっ!!?」

分からない分からない分からない!!? 何がどうなってるのっ!!?

「うっつ!!?」

急に胸が痛む。こんな時に……………っつ!!?

『ガングニールの共鳴反応確認』

女の人の声がする。

『お、昼寝から目覚めて一番に修羅場ってやつか？ やるね〜♪』

男の人の声がする。

『ガングニール、肉体への適合開始』

『さて、立花 響。ここが立ち上がりどころだ。踏ん張れよ？』

「くあつーーー!?」

全身に熱が走った。

『ーーガングニール、展開を開始』

『さあ、我らが英雄譚を始めよう』

☆☆☆☆☆☆☆☆

○原作 響side END○

☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆

○小日向 未来side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

「くあつーーー!?」

響が突然苦悶の声を上げる。

「響っ!?」

ノイズを倒しながら、響に声をかける。けど、明らかに様子がおかしく、声にも答え
ない。

「ー」 Baiwissvall Nescell guanir tron (喪失ま

でのカウントダウン)”

響の体が光に包まれていく。

「がああああああ!?」

響の体から機械のような何かが突き出し、響が苦悶の声を上げる。

「響いいい!!?」

「待て小日向!!? あれはまさか、シンフォギア!?」

そこにいたのはシンフォギアをその身に纏った響だった。その表情は、好戦的なまでの笑みだった。

「あはっ♪」

立ち上がった響が駆け出す。

響が口から黒い炎を吹き出しノイズを焼き尽くしていく。よく見ると響の体のあちらこちらから黒い炎が吹き出しており、首に巻いたマフラーの先も黒い炎で燃えている。

「響!!?」

声をかけてもこちらに答えてくれる様子はない。まさか、暴走!!?

『「先ずノイズを殲滅するんだ!!?」』

「は、はい」「……………了解」

私達はノイズを消し去っていく。

「ん?」

ドシンドシンという音と共に、巨大なノイズが現れる。どうやらこれが最後の相手の

ようだ。

「はあああああ!!?」

響が両手から炎を吹き出して空へ飛び上がる。そして巨大ノイズよりも上空を取る。

「《貫通》《物理鋭化》セット。《渾身の一撃》」

響が何かを呟くと、そのまま重力に従い、ノイズへと落ちていく。

「《我流・撃槍黒炎衝打》」

響の拳がノイズの体を貫いた上に、響の黒い炎がノイズの体を炎で包んで行く。それはノイズを焼く火柱であった。

「……………え?私、一体何を……………え?何この格好!!? み、未来ううう!!? 説明してええええ!!?」

第5章第4話

第5章

―戦姫絶唱シンフォギア―

第4話

―大食い響ちゃん―

☆☆☆☆☆☆☆☆

○原作 響side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

未来との久々の再会に浸る暇もなく、ノイズの襲撃を乗り切った私は、とある施設に連れてこられていた。

○第2課○

対ノイズ組織である第2課。未来も所属している組織らしいけれども……。

「食べないでください」

第2課の地下基地の中で、私はガクガクと震えながら、未来の陰に隠れる。

「いや、そんなことしないぞ?」

筋肉むきむきのおじさんが焦った表情を浮かべてる。シルクハットにマジック用の杖があまりにもアンバランスだ。

というか、こんな歓迎パーティーのような場所に連れてこられて自分はどうなるんだろう? ソウに一度注意されたことがある。

——相手を厚遇する場合2つが考えられる。

——1つは自分の味方にしたい時。

——もう1つは、油断させたい時。

——厚遇には注意しろ。警戒しろ。
うん、これのことだよね!!?

「ごほん……………一先ず、歓迎するぞ!!? 立花 響君!!?」
「ピッ!!?」

私は未来の後ろに完全に隠れる。

「ひ、響? 司令なら大丈夫だから」
「み、未来」

み、未来の所属場所とはいえ、私にとっては未知の場所だ。正直さつさとロシアに帰りたいたい。

「(けど、未来に恥をかかせる訳には……………)……………立花、響、です」
「あ、ああ、(この)司令官をしている風鳴 弦十郎だ」

私と司令さんは握手を交わした。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○原作 響side END○

☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆

○風鳴 弦十郎side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

目の前の少女……立花 響は俺達第2課所属の未来君の親友にして探し人であり、また我々の被害者である。

あのノイズが襲撃したライブ事件で、生存者達は死んだ人間を犠牲にして生き残ったとバッシングを受けた。そのせいで多数の人間が自殺や失踪し、中には殺される人間もいた。響君は失踪した人間だ。

俺達も介入したが……全ては遅かった。バッシングが収まる頃には響君は家出し、失踪していた。

我々も失踪者を探した。多くの人間は見つかったが、見つからない人間もいた。響君

もその1人だ。

「(ロシア、か)」

当時中学生だった響君には遠すぎる場所だ。色々あつたのだろう。

「(手の皮が厚い。かなりの鉄火場を潜り抜けた人間の手だ)」

おまけに、ここに来る際の身体検査で、拳銃を隠し持っていた。銃刀法違反だが、彼女としたらこの地は敵地だったのだろう。銃ぐらゐは携帯したいと思つたのかも知れない。

いや、今回のために用意したならそれはそれでいいのだが、問題は”日常的に携帯しているのか”どうかだ。

「(日常的に必要ななら、多分それは裏社会に身を置いているということだ。できるなら保護したい)」

それに先ほどのガングニールの一件もある。

「(多少強引にでも保護しよう。しかし、先ずは話してみよう)」

俺は響君を椅子に案内して座らせる。

「ノイズのせいで食事が取れてないのは聞いている。是非食べてくれ」

「ご飯!!?.....あつ!!?」

響君が何かを思い出す。

「どうかしたか?」

「あ、仲間をフラワーってお店に待たせて.....」

「ならこちらの者を向かわせよう」

「なら、ホテルに戻るように言っただけで伝えてもらっていいですか?」

「連れてこなくていいのか?」

「ええ、巻き込めないですし」

響君が苦笑する。

「分かった。こちらで手配するから先に食べててくれ」

俺は電話で手の空いている人員に連絡する。

「さて、それでは飯に……………」

「ーガツガツガツガツガツガツ!!?」

机を見ると、ものすごい勢いで響君が飯を食べている。すでに机の上には空き皿が何皿も乗っている。

「ひ、響っ!!?」

未来君が驚きの声を上げている。

「……………美味しい。久しぶりの日本の味だ」

響君は涙を流しながら、勢いよく米をかきこむ。

「そうか、響はずっとロシアにいたんだもんね」

「いや、その前にこの食べっぷりは……………」

「? 響はいつもこんな感じですよ? 響は本気になると十数人分は食べますし」

「「「「っ!?」」」」

俺達は思わず戦慄した。このままでは食いきられる、と。

「追加で出前を頼めー!!?」

「追加急げー!!?」

○数十分後○

「けふっ」

「もう、響ってば」

響君が満足そうな表情を浮かべている。しかし、まさか本当に十数人分どころか二十数人分の食事を平らげるとは……………。

「……………ありがとうございます。久しぶりに日本のご飯を食べれました」

響君が頭を下げる。

「いや、構わないさ」

経費で落とすからなっ!!？

「ごほん……………そろそろ本題に入っても構わないか？」

「シンフォギアの件ですか？」

「っ!!？ 何故それを!!？」

シンフォギアは情報規制で秘密にされている技術だ。一般人が知れる情報ではない。

「リツに聞きました。私の胸にはガングニールというシンフォギアのかけらがあって、私の身体と徐々に融合してるって」

「融合、だと?」

「はい、奏さんのシンフォギアの破片が私に刺さり、そのかけらが私の体内に残っていたんです。その破片を活性化させれば私はシンフォギアをまともなるとも聞いています」

「か、奏のガングニールが」

翼が部屋を出て行く。

「(シヨックが大きかったか……)そこまで詳しい人間がいたのか。そのリツとはどんな人なんだ?」

「異端技術学者と言っていました。私の身体の検査や治療は彼女を中心に行われていま
す」

「ふむ」

リツ、か。了子君がいれば何か分かったかもしれないが……あいにく今は出張している。帰ってくるのは明日の夕方だ。

「その人はロシアに？」

「いえ、リツはちよつと事情がありまして人前に出れないというか……」

「ふむ、事情があるようだな」

できればリツという研究者にも我々に協力して欲しいところだ。

「一先ず今日は帰っても構いませんか？また明日来ますので」

「そうだな、今日はもうだいぶ遅い。車の手配をしよう」

「あ、いえ多分もう迎えが来ているかと……」

「迎え？」

その時、突如として響君の背後にローブを着た男が現れる。

「響様。お迎えにあがりました」

「あ、もうそんな時間？」

響君は腕時計を見る。どうやら知り合いのようだ。

「つと、初めまして皆様。わたくしジプス構成員の「チエーコフ・チエコフスキー」と申します。しがない錬金術師でございます」

男が礼をとる。

「君、どうやってここに……………」

「そこは企業秘密ということだ」

響君が立ち上がる。

「それじゃあまた。未来もまたね♪」

「え、あ」

第5章第5話

第5章

―戦姫絶唱シンフォギア―

第5話

―響チャンの伝説―

☆☆☆☆☆☆☆☆

○??side○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○日本○

○ホテルの一室○

目の前で俺よりもいくつも年齢が下の少女が、椅子に腰をかけてテレビを見ている。

「……………お前達には護衛を命じておいたはずだが？」

「「ツッ?」」

その冷たい声に俺達は震え上がる。これはソウさんの声だ。この冷たい感じは間違いない。

ソウさんは俺の所属するジプスという組織の大幹部だ。そして最も残忍で冷酷で酷いまでに強いのがこの人だ。

一人でいくつものマフィアを潰して傘下に加えたその手腕は「鬼子」という異名を与えられるほどだ。

「相手がたとえノイズだろうと」戦えるだけのチカラ」は与えたはずだが？」
「も、申し訳ございません!!?」

護衛班のリーダーが頭を下げる。

「……………まあ、今日は気分もいいし、記念日だ。恩赦としておこう……………恩赦とは少し違うか？」

んん？とソウさんが頭を捻らせている。

「つと、そんなことはいいんだ。これからジプスはとある組織と連携を取る。戦闘部隊を、対ノイズ部隊を日本へ送るよう本部に伝えろ」

「は、はい!!？」

リーダーが電話を手取る。

「これから面白くなるぞ♪お前達にもしつかりと働いてもらおうぞ♪」

今までにない高いテンションのソウさんが日本のドラマにチャンネルを変える。

「(あ、これ絶対やばいやつ)」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○下つ端マフィア side END ○

☆☆☆☆☆☆☆☆

おいつす、やっと物語が動き出したソウである。いや、総司である。

○響精神世界○

「さて、この後だが……………」

「原作開始だね」

精神世界でリツがコーヒー片手につぶやく。

「で？ 今後はどう動く？」

「全体的には響が原作通り戦うって流れかな？ ただしジプスの支援と私達による強化が入るけどね♪」

「確かにあれは驚いたな……………」

「どうやら、原作響は俺の戦闘能力を使えるようになったらしい。 GANG ニール展開中のみという但し書きは付くが。」

「《メギド》の黒い炎をまとうとは、恐れ入った」

「調整も万全だよ♪」

「本当に GANG ニールは大丈夫なんだろうな？」

「勿論だよ♪ 予想外のこと起きない限りは、侵食が進むことはないよ」

「そうか……………」

原作響の胸の中にある GANG ニールは、原作では響の体を蝕みその身体を聖遺物に変えんとした。それはつまり響の死を意味する。

現在、その侵食はリツの手で止められていた。

「感覚的に俺達の”タイムリミット”も近い……………やれることはやっておきたい」

「先ずは第2課との関係構築か……………まあ、うまくやろう♪」

「んじゃ、俺はいつちよ」お迎え」に行ってくるかな？」

俺は再び体の主導権を握った。

○空港○

○エントランス○

空港の広いエントランスで待っていると、十数人の人間達が俺の前に現れる。

「はあい、元気かしらリツ？それとも立花 響？」

ピンク髪の女が俺に挨拶する………が、見当違いである。

「よく来た。それと俺はソウだ」

「ッ!?? ……貴方がソウ？初めましてね」

女は驚いた様子で、しかしなんでもないかのように挨拶し直す。

「ソウさんデスカ?」「大幹部の……………」

ピンク髪の女の後ろに立っている少女2人が俺をじーつと見る。

「……………飴ちゃん食うか?」

「いただくデース♪」「ちよっ!?」

2人に飴（ミルクチョコレート味）を渡す。

「ありがとう……………とところで、いつも飴を持ち歩いてるの?」

「癖だ。それより改めて……………遠路はるばるよく来てくれた。【マリア・カデンツァヴァ（舌噛み）……………マリア・カデンツァヴァ・イヴァ（言い間違い）……………マリア・サデンツァヴァ・イグ（舌噛み）……………」

「マリアでいいわ」

マリアが頭を抑えている。頭痛でもするのだろうか？

「【月読 調】……………」

「【暁 切歌】デース♪」

「ああ、よろしく」

俺達は握手を交わす。

「早速だが、諸君ら3人にはこの国で対ノイズ機関第2課に参加してもらおう。我々ジプスからの出向扱いでな」

「ノイズ……………第2課……………」

俺は3人の背後に並ぶマフィア達と錬金術師達にも声をかける。

「例の物は？」

「ありったけですぜ」

「よろしい」

俺はニヤリと笑みを浮かべる。

「さあ、行くかうか」

☆☆☆☆☆☆☆☆

○風鳴 弦十郎 side ○

☆☆☆☆☆☆☆☆

響君が帰って翌日の夜。彼女は約束通り第2課に戻ってきた………多数の人間を引き連れて。

○第2課○

「それで、話を聞かせてもらっても構わないか？後ろの人間含めてな」

未来君と翼が見守る中、俺は響君に問いかける。

「ええ、全て答えますよ」

「……………」

響君に違和感を感じる。話し方も違うし、気配もまるで別人だ。

「彼女達は俺の作った組織の戦闘部隊です。主に対ノイズ戦闘を行う、ですが」

「対ノイズ戦闘部隊だと?」

対ノイズ兵装……………シンフォギアをいくつも保有しているということか?しかしあれはそう簡単に作れるものでは……………。

「シンフォギアも5つ保有しています」

「なっ!?? 5つだと!??」

我々と段違いの数に思わず声を上げる。

「通常兵装も対ノイズ兵器です。おい、見せて差し上げろ」
「はっ!!?」

響君が後ろの人間から何かを受け取り、それをそのまま机の上に置く。

「【対ノイズ用特殊弾：G弾】です。小型くらいなら1発で仕留められる優れたものです」

「ノイズに効果のある弾丸だと?」

「ええ、問題なく使えますよ。実戦経験もありますし」

響君が腕を組む。

「我々からの支援として30ダース分の弾丸はお渡しします。好きにお使ってください
……と、言っても生産量が圧倒的に少ないから、それつきりになる可能性もあります
が」

「いや、助かる。避難の際に隊員に持たせれば生存確率がかなり上がる」

俺は机の上に弾丸を手に取る。見たところ弾頭がオレンジ色なこと以外は普通の弾丸だ。

「それでシンフォギアについてだが……………」

「内2つは【試作量産型ガングニール】ですね」

「が、ガングニールだと!?？」

「見せて差し上げろ」

「はっ!!?！」

2人の女性がシンフォギアを展開する。その姿は随分と機械的なシンフォギアであった。アームドギアである槍は奏君のものよりも細く、脆そうだ。

「これは胸のガングニールを元に、特殊な技術で作り出した量産型ガングニール。その先行量産型です。性能ははるかにオリジナルに劣りますが、戦うだけなら問題ない。それにオリジナルと違って拒否反応も少ないから適合者が見つかりやすい利点もあります」

「なん、だと」

それはある種の革命であった。シンフォギアを量産できるならば、人類はノイズを根絶させられるかもしれない。

「ふざけるなツ!!?」

そんな中、翼が吠える。

「それは、その GANG ニールは奏の物だ!!? それを使うだけでなく弄くり回すというのかツ!!? それは奏への侮辱だ!!?」

「——それで勝てるのですか?」
「なっ!!?」

響君が強い視線を翼に向ける。

「勘違いされては困ります。これは人類とノイズとの戦争なのです。貴方の感情と故人への未練を引きずったまま戦って勝てるかと本気で思えるのですか? これまで死んだ

人間に、これから死んでゆく人々に死んだ人間のために戦力強化をしなかったから貴方は死にましたと言えるのですか？

——それはその死んだ人に誇れることですか？

「ツッ!? そ、それは……………」

翼が怯む。

「まあいいでしょう……………話を戻しますが、彼らを俺の組織からの出向という形で第2課に所属させていただきたい」

「それは助かるが……………」

これほどのシンフォギア奏者を抱え、そしてオリジナルに劣るとはいえシンフォギアを生み出す技術……………彼女の組織は一体……………。

「ジプス……………と聞いたか？響君の組織は」

「ん？ああ、成る程成る程。ええ、ジプスという組織です。”我々立花 響”が作り出した組織ですよ」

「我々立花 響？複数人で作ったのか？」

しかしそれにしては言い回しがおかしい。我々立花 響……まるで響君が何人もいるような言い方だ。

「突然ですが、人間は様々な要因……特にストレスで人格が分裂することがあるというのをご存知ですか？」

「二重人格とか、そう言うもののことか？」

「ええ、そうです。そして弾圧された立花 響が正常な精神の状態でいられると思いますか？」

「……………ま、まさか」

ありえるのか、まさかそんな事が。

「改めてご挨拶させていただく。

——立花 響が人格の1つにしてジプスの大幹部【武力のソウ】と申します」

目の前の人間は響君であって響君でなかった。

ロードサツ。

「こ、小日向!?」

倒れた未来君を、翼が介抱する。

「おやおや、衝撃が強かったかな?」

ソウと名乗る人格はニヤニヤと、いたずらが成功した少年のような笑みを浮かべている。

「……………他にも人格はいるのか?」

「ええ、私に【知識のリツ】……………それと”もう一人”がね」

「リツ……………異端技術学者の」

第5章第6話

第5章

―戦姫絶唱シンフォギア―

第5話

―精神闘争―

実のところを言えば、立花 響の精神世界には4つの人格が存在している。俺とリツと響が表に出てくる主な人格である。しかし、最後の1つは俺とリツによって精神世界深くに封印されていた。

○響精神世界○

そこはまるで牢獄であった。鉄格子の部屋がいくつも並んでいる。

「……………意外と元気そうだな」

俺は1つの部屋の前で、その中の人間に話しかける。

「どうだ？ 久々に」知っている人間」を目にした気分は？」

部屋の奥には拘束具でがちり拘束された人間がいた。シルエットから女だということまでは分かるが、それ以外はミイラのように拘束されており、顔も分からない。

「表に出たそうだな？ だがダメだ。お前が出てくると計画が無駄になる」

ガシャンガシャンと拘束具を無理に解こうとする音がする。

「お前が俺達の計画を知って協力してくれれば楽だったんだが……………まあ、我々は所詮多重人格。人格と人格ははつきり独立している。全員意見が一致するなどありえないことだったか」

そう、この拘束された人格は俺達の計画に反対して、相当暴れまわったのだ。おかげで、この牢獄に閉じ込める羽目になったという訳だ。

「お前の与えたチカラで、我らが立花 響は英雄へとなる!!? 誇るがいい!!? お前も立花 響の英雄譚の1つとなるのだからな」

ガシャンガシャンと抵抗の音が激しくなる。

「無駄無駄。それはその程度では壊れな——パキン………ん?」

そこにあつたのは破壊された拘束具であつた。

「……………んんん?」

俺は眉をひそめる。そして拘束されていた人間が歩き始める。

「…………お前達の企みはここまでだ」

聞き覚えのある声が響く。

「あー、もしかして GANG ニールが活性化したからか？うそーん」

「響は平和な世界にいるべき人間だ!!？ お前達のような存在が関わっていい人間じゃないんだツ!!？—— GANG ニール!!？」

拘束具が弾け飛び、牢屋も破壊される。

「クソツタレ!!？」

「消えろおおお!!？」

GANG ニールのシンフォギアをまとった女が突っ込んでくる。その女は死んだはずの女——【天羽 奏】であった。

「GANG ニールに残された残滓ごときが!!？ このソウに抗うか!!？」

「それだとしても!!? 私は!!?」

俺と天羽はぶつかり合う。俺の腕と天羽の槍がつかば斬り合う。

「ーグッ??? 貴様!!? こんな事をしてただで済むと思ってるのか!!? 我々

の計画に従えば全てハッピーエンドで終わるんだぞ!!? お前の相棒も……!!?」

「だけど!!? それだとしても!!? これ以上響を苦しめるなあああ!!?」

「くっ、化け物めッ!!?」

俺は天羽から距離を取る。

「クソツタレ……ッ!!?」

今更だが、この天羽 奏は本物の天羽 奏ではない。この天羽 奏は、響の胸の中にあるガングニールに宿っていた本物の天羽 奏の魂の残滓である。本人ではないがその考え方や記憶はそのままだ。ほぼ本人であるとも言える。

「はあああああ!!?」

そんな天羽が槍を構えて突っ込んでくる。

「(殺したくはない、が)」

俺は本気で、しかし素手という手加減した状態で迎え撃つ。

「(くそツ!!? シンフォギアの防御力が高い!!? 下手にやり過ぎると精神を消してしまおう……!!?)」

俺は槍を弾きながら、戦闘を継続する。とはいえ、天羽のやっていることは無駄だ。俺には物理攻撃が効かない。つまり、槍の一撃は効果がない。

「もう計画は進行している!!? 今更我々をどうにかしたところでもう響は日常には戻れないツ!!?」

「だとしても!!?」

だんだんと槍捌きが鋭くなっていく。

「成長している!?? この状況で!??」

「今!!? ここです!!?」

瞬間、天羽の槍が輝く。

《《ゲイ・ボルグ》》

「はっ?」

胸に冷たいものと鋭いそして鈍い痛みが走る。

「ぐっ、かっはっ……………何故、俺の《《物理無効》》を……………」

「……………私の槍は、いや私の使う槍は心臓を貫くという結果だけを残す」

「き、さ……………ま、転生、者……………だな?」

「あんたが何言ってるか分からないけど、死んだ後に神様とやらにこのチカラを貰った

「よ」

「予想、外……………」

俺は意識を失っていく。

「……………り、っ」

○自室○

「はっ!?」

布団を弾き飛ばして、俺は起き上がる。慌てて胸を確認するが、傷跡はない。

「……………夢から覚めたか」

しかし惜しいところで終わってしまった。あのままラスボスの【フィーネ】を包囲し

て、計画を始動したところで真っ向からぶっ潰す計画だったのだが……響に戦わせることを天羽に拒否されてしまった。そう、殺されるレベルで。

「ま、支援組織もしっかり作っただし、今後の対応も日記に記しておいた。なんとかはなるさね」

俺は布団から出る。

「にーに、起きたー?」

どこからか、はやての声が聞こえる。どうやら起きたら数年が過ぎてたとかはないらしい。

「リツ……いや、響は戻ってきたかな?」

俺は着替えて居間へ向かった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

○語りside○

☆☆☆☆☆☆☆☆

○響精神世界○

「はあ……………はあ……………」

奏は足元で倒れるリツを見下ろしながら、肩で息をする。

「ふう……………」

奏はリツの使っていたイスに腰掛ける。

「……………少し、疲れたな」

顔についた返り血を気にせず、奏は両目を閉じる。

「響、悪いけど、しばらく休ませてもらうぜ？　大丈夫さ。また、会え、る……………さ」

奏の意識が遠のいていく。そう、奏は特典であるチカラを使い過ぎたために、しばしの眠りにつこうとしていた。

「ごめんな……………響」

同時に、奏は1人の少女の姿を思い浮かべる。

「翼……………悪いけどさ、響を導いてくれよ……………お前にしか、頼めないから、さ」
奏の意識が短くも長い眠りについた。

この後、しばらくした後……響は2人が消えた事実^に絶望した。

しかし、その頃には仲間が……ジプスが、第2課が、大人達が、家族が、親友が、シンフォギア奏者達が彼女を支えていた。

さらにジプスに残された日記により、第2課はフィーネという敵の存在に気付き、早期の対応を行う事が出来た。

さらにはリツから引き継がれた知識と異端技術品、ソウから受け継がれた身体能力と組織が大きな戦力となる。

そして、事件は解決へと向かい、月が欠けることはなく、世界に一時の平和が訪れることとなる。

——しかし、世界に危機は訪れる。

——彼女達シンフォギア奏者達はその度に戦い続けるだろう。

——その時、彼女こと天羽 奏がオモテに出ているかどうかは、神様ですら知らないことであろう。

第6章ーリリカルなのはー

第6章第1話

第6章

ーリリカルなのは編ー

第1話

ー試作新兵器ー

あの現実にはか思えない夢から1ヶ月ほどが過ぎた。というより、響も覚えていたことを考えると意識だけ異世界トリップしていたと考えた方が自然であろう。

さて、実のことを言えばそんなことはどうでもいいのだ。問題は今現在のことである。

○J P, s 海鳴支部○

現在JP'sは本部支部は戦力を拡大させていた。といってもそれはJP'sの総戦力が増えたというわけではなく、本部から増援部隊が到着したためである。

目的は忘れかけている人もいると思うが魔法石の件である。上層部としては無視できない案件だったのだろう。増援として2個分隊が派遣された。

…そして何故かこの案件の前線司令官として俺が指名された。

「何故俺なんだか…」

俺は書類の入ったバインダー片手にため息を吐き出す。

「仕方ないのでは？」

「三木か」

俺は背後から声をかけてきた部下に視線を向ける。

「JP'sの中で最も戦闘能力が高いのは隊長です。それこそ制限が必要なほどに」

「そうなんだよなあ」

再びため息を吐き出す。ここ最近ため息ばかりである。

俺には今現在JP'sから能力の制限を受けていた。巨大な悪魔や異様に強力な悪魔の召喚が禁止されている。今使えるのはクドラクレベルの悪魔くらいしかないのだ。

「とはいえ、今回は上に制限の解除申請をしないとイケないようだ」

俺はファイルから最近海鳴で起きた事件の書類を取り出す。

「不審な爆発に、謎の巨大樹木の化け物、橋の爆発…この街に何かいるのは確実だな」

止まらないため息を吐き出す。

「早めに申請が通るといいんだけど…」

「ですね」

その瞬間電話が鳴る。私用電話のようだ。

「すまない、また後で」

「はい」

少し離れて電話に出る。相手は響だ。

「もしもし」

『あ、もしもし？今大丈夫？』

「問題ないが」

『例のものができたから連絡だよ』

「なに？」

実は響に対してとある依頼をしていた。どうやらこの電話はその完成報告だったよ
うだ。

『試作デバイスを一先ず4機。グローブ型ソード型スナイパー型そして劣化ハーメルン型……でも総司のハーメルンを参考にしたとはいえ、本来の知識がないから突貫開発せざるおえなくて。ぶっちゃけ本来のデバイスよりも劣化してるよ』

「空を飛んだりできるだけでも十二分だ」

J P, s 局員の多くが悪魔使いだが、通常の悪魔使いは召喚者が弱点である。俺のよ
うに戦う手段を持たないからだ。せいぜいが陰陽術に毛が生えた程度だ。

だが、デバイスを劣化していたとはいえ装備できればJ P, s 局員の危険が減るの
だ。悪い話ではない。

「丁度この街でいろいろ怪事件が起きている。悪魔かなんかだと思うが、試運転したい
からこれから取りに行くが構わないか？」

『怪事件?どんな事件?』

俺は軽く概要だけ説明する。

『それ原作イベントだよ!!?』

「な、何だつて!!?」

そうか!これが話に聞いていた原作ファーストシーズンか!!?

「確かファーストはジュエルシードって石を集める話だったか?」

『うん』

その瞬間、頭の中に魔法石のことが走る。

「そうかあれがジュエルシードか!!? JP, sで1個回収している」

『つてことはそっちにも行くかもね』

「了解した。こちらも戦力を増強したところだ。試作デバイスもすぐに取りに行く」
『まってるよー♪』

俺は電話を切る。

「さて、本格的に仕事を始めないといけないようだ」

俺の原作介入が始まろうとしていた。

○数時間後○

○JP's 海鳴支部○

○作戦室○

作戦室には俺直属の分隊10名がいた。その中には三木もいる。

「魔法石について新情報が手に入った。しかしこれはある種俺も信じきれていない情報である」

俺は手に持ったファイルから書類を取り出す。

「まずあの魔法石はジュエルシードという名前で、異世界の魔法文明の遺産だそうだ。あれはその魔法文明が崩壊した際にできた遺産だそうだ」

全員が呆けた表情をする。まあ、そうなるわな。

「その文明の証が俺のこのハーメルンであり…」

俺はハーメルンの待機状態である腕輪を見せる。

「んでもって、これらがハーメルンを元に開発した我々の新たな武器である試作型デバイスだ」

俺は4つのイヤリングを机の上に置く。

「これは俺のハーメルンを元にしたデバイスと呼ばれる”兵器”だ。試作品ができたから持ってきた」

「あの一、試作品とは？」

三木が手を挙げて質問する。

「試作品は試作品だ。ハーメルンほどではないがハーメルンを再現しようとした。性能的には劣化してしまったがな」

俺は両肩をすくめる。

「【三木 晶】【白城 虚】【谷山 累】【谷山 慶次】にあたえる。理由は運用に必要なリ
ンガーコアと呼ばれるものがある上に高い素質がある事だ。使いこなせ」
「「はっ!!?」」

4人がデバイスを受け取っていく。

「敵はこのデバイスをハーメルンと同等かそれ以上の性能だと考えられる」

「敵、とは?」

「…さまざまな世界である次元世界を“管理する”という名目の組織【管理局】と呼ばれる組織だ。この組織がこの街に落ちた魔法石を狙っているらしい。他にも魔法石を狙っている組織がいるという情報も入っている」

響から得た情報からすると、魔法石をめくり現地の少女とのちに味方となる敵側の少女と管理局の争いになるらしい。

「正直デバイスと魔法石がなければ信じないような情報だし、俺自身も半信半疑だが：本当であればそんな組織に、日本どころか庭であるこの街に介入されるわけにはいかない!!?!」

理想は全ての魔法石の回収である。

「さらに魔法石自体も危険な物だ。よって我々は臨戦体制に移行する。魔法石は全て我々が回収する」

「「「はっ!!?」」」」

全員が敬礼する。

「ただし情報自体がぶっ飛んだ話だ。しばらくはこの分隊のみ臨戦体制とする。頼んだ

第6章第2話

第6章

ーリリカルなのは編ー

第2話

ー先制攻撃ー

俺直属部隊に臨戦態勢を命じてから4日が過ぎた。魔法石：いや、ジュエルシードの回収は細々とはあるが進んでいた。

我々JP'sの保有するジュエルシードは実に2つ。とはいえそれは十分な数であつた。

：そう、”餌”としては。

○八神家○

「は？友達の家に遊びに行く？」

昼食を終えて食後のお茶を楽しんでいた俺は、はやてに聞き直す。

「うん、すずかちゃんの家なんやけど」

「確か図書館でよく遊んでいた友達だったか？」

「この前誘われたんや」

俺は少し考える。すずかといえは少し前に起きた誘拐事件の被害者であり、夜の一族の一員であったはずだ。

「ふむ…分かった。あとでお金を渡すから菓子折りでも買って行きなさい。それと付き添いにグレーテルとシグナムを連れて行きなさい」

「うん！ありがとうにーに！！？」

ハヤテはそう言うのと、その場を立ち去る。

「…すすすか、か」

妹がはやてが原作と関わる。出来れば避けたいことだが、響からの情報では原作グループのチカラがなければハヤテは助からないどころか世界が危ない。

「(既に原作は始まった。あとは被害を最小限にするように動きながら、原作のストーリーの流れに逆らわなければいい)」

だが、ここでJ P, sの面子が問題となる。

「(管理局も政府に一報入れてから動いてくれれば問題にならないのに、格下に見て雑に動くからめんどくさくなる)」

簡単に言えば、国内で他国の組織が武力を行使するのは望ましくない上に、事件を単独で解決されるのは日本政府ひいてはJ P, sの面子に泥を塗る結果となる。

「（峰津院には最低でも共闘であればと許可をもらっている。問題は相手の反応か）」

だが今回は管理局の方が文句を言われて然るべきケースだ。問題はない…と思った
い。

「さて、出かけるか」

机の上に菓子折り代を置いて家を出る。近くのスーパーで肉の特売があるため行かないわけにはいかないのだ。

「ん?」

そう考えながら玄関を出ると、玄関の前にハヤテより少し年上くらいの少年がいた。かなり見た目に違和感のある少年だ。髪は銀髪に目もオッドアイ。厨二病を詰め込んだような痛い見た目だ。

「うちに何かようかな?」

「…」

問いかけても反応はないが…。

「随分と殺気を垂れ流しているな…ハーメルン」

『イエス、マスター。結界展開』

周囲に人払いの結界が展開される。

「さて、君……”転生者”だろ？」

「ああ、転生者の【雨傘 ロイ】だ」

独特の違和感とその答えが、この少年を転生者であると断定する。

「で、改めて聞こうか？何用かな？」

「てめえ、俺のはやてから離れろよ」

「…ああ？」

俺の耳が悪くなったのだろうか？コイツ今なんて言った？

「ハヤテは俺のものだ!!？」俺はオリ主なんだからモブ転生者は消えやがれ!!？」

「…ああ、なるほどなるほど。そうゆう手合いか。あー、なるほどなるほど。へー」

ーブチっ。

「ぶっ殺す」

俺はハーメルンを掲げる。

「ハーメルン!!？ セットアップ!!？」

『イエス、マスター。セットアップ』

バリアジャケットを展開した俺は、武器であるラツパを構える。

「【ドライアド】、セットアップ」

『イエス、オールライト♪』

向こうは侍のようなバリアジャケットを展開してその身に纏う。

「カートリッジロード」

『イエス、マスター。カートリッジロード』

ガシヤンガシヤンガシヤンと連続でハーメルンから薬莖が飛び出す。体にエネルギーが魔力が循環する。

「モードフルオーケストラ」

背中からラップが現れ、ハーメルン最大火力モードに移行する。

「響き渡れ、破滅の歌を君に」

『《フルオーケストラ・ディエス イレ》』

無色透明な音の魔力弾が、建物ごと雨傘とかいうガキを吹き飛ばす。爆発によって発生した煙が周りを包む。

「……無駄だ!!？」

煙の中をクソガキが飛び出してくる。

馬鹿が。

「デカラビア、《メギド》」

少し離れた場所。クソガキから死角になる場所からメギドの炎が放たれる。

「くっ!!？」

炎が今度こそクソガキに直撃して爆発する。

「フルオーケストラ響き渡れ、破滅の歌を君に」

『フルオーケストラ・デイエス イレ』

さらに俺の追撃が入る。

「が、あ、が…」

左腕が焦げたクソガキが地面に膝をついている。

「大口叩いた割に弱いな。この程度のフェイントにハマるとは」

俺は見下した笑みを浮かべる。

「この、クソ野郎…!!?」

「クソはテメエだクソ野郎。《バインド》」

クソガキに魔力による拘束を行う。

「お前をJ P, s 局員権限で逮捕する。しばらく寝てろ」
「待つ」

俺の蹴りがクソガキの意識を奪う。

「さて…」

俺はクソガキの服の中を漁る。身分証明書くらいは確保したいところだが…。

「つと、これか？」

身分証明書らしきものを発見するが、言葉が読めない。

「ハーメルン」

『管理局所属の魔導士のように、マスター』

「ほうほう、それはいい情報だ」

俺はケータイを手に取った。

○JP, s 海鳴支部○

特定階級以上のJP, s 局員は、自身の権限で事件の容疑者などの逮捕が可能である。そしてそれは同時に、JP, s に容疑者を収容する施設があるという事だ。

「つてわけでどうだ？JP, s の鉄格子の中の居心地は？」

「むーむー!!？」

猿轡で拘束されたクソガキが呻く。

「あーそうそう、《念話》とかいう通信魔法なら使えないぞ？ここにはそういう対策で魔術的結界を張ってあるからな」

「…」

クソガキが青い顔になる。

「安心しろ。殺しはしないさ…殺しはな」

俺はニヤリと笑みを浮かべた。

エンド

第6章第3話

第6章

ーリリカルなのは編ー

第3話

ーホクホクー

結果から言えば、クソガキはいい情報源となった。俺としては大きな前進である。

クソガキから得られた情報はいくつかあるが、本当に重要なのは絞られる。

そして、転生者についてのことが削られた情報が上層部：峰津院 大和に伝えられる。

○JP, s海鳴支部○

自分のデスクで峰津院からの指示書を確認する。

「まあ、こうなるか」

「隊長、どうかしたんですか？」

「ん？ああ、八木か」

部下が背後から問いかける。

「魔法石の一件だが、結局臨戦体制のまま静観する方針になった」

「静観ですか？」

「ああ」

クソガキからの情報では、今回の一件の最終決戦は【時の箱庭】と呼ばれる場所であり、管理局との協力関係がなければ派兵は不可能である。だが、管理局という得体の知れない組織との接触は避けたい。

さらにクソガキからの情報によれば、既に解決まであと少しのことだった。

「つまり、峰津院はこの一件で時空管理局のお手並みを見る気だ」

「しかし、得体の知れない組織に任せるのはいささか……」

「だからこそこれだ」

俺は指示書を部下に手渡す。

「八神 総司の能力制限を全て解除する。また緊急時には、時空管理局及び今回の一件の原因の撃滅を許可する」

「つまり、やばくなれば皆殺しにしろってことだ。小学生に無茶言いやがる」

忘れそうだが、俺小学生なんだがなあ。

「それと、そこには書いてないが……〔菅野 史〕を派遣するそうだ」

「JP's 最高峰の頭脳じゃないですか!?!?」

「保険はかけておきたいんだろうよ」

俺は席を立ちバックを手にして、ロッカーへと向かう。

「ど、どちらへ？」

「今日からしばらくはここに詰めることになりそうだからな。飯の確保と家族に電話だ」

ロッカールームに入ると、俺はケータイを取り出して、電話をかける。

『はいもしもし』

「グレーテル」

電話の相手はグレーテルである。

「今日から1週間ほどJ P, sに詰める。それと街が戦場になる可能性がある。もしも
の時は…」

『ふふっ、久しぶりにお仕事かしら？』

「かもしれん。相手はもしかしたらお前よりも年下かもしれんが…」

『私の事は分かってるでしょう？ 問題ないわ』

「流石だな。安心だ。それと今回の件ははやて達には伝えなくていい」
『分かったわ』

電話を切ると、そのケータイを地面に投げつける。

「クソが!!?こんな時に!!?」

正直言つて、俺に支部に詰めている余裕などなかった。クソガキの情報により、想定していたよりもはやてに問題があるからだ。いや、この場合は闇の書が…とすべきだろう。

「こんなん上に話せないぞ…!!?」

魔法を使用する為に必要な内蔵器官【リンカーコア】。それを吸収して覚醒する闇の書…そして吸収し続け、完成した先は。

「暴走の果てに、周囲を破壊し尽くすだど!!?どうすれば…」

クソガキが言うには、原作通りであれば問題ないとのことだったが…。

「転生者のせいで原作が崩れてる上に、JP，sがいる。そして俺はJP，s所属…」

問題しかない。原作通り進むか疑問だし、何よりJP，sが何も手を出さないとは思えない。

「魔法を使うための内蔵器官【リンカーコア】。そんなものを無差別に奪えば…」

その解決のためにJP，sが出張ってくる。しかもここは時空管理局と今回の一件があるから、上も怪しむだろう。特に峰津院。

「リンカーコア…ん？待てよ？」

ふっと思いつく。

「悪魔も魔法スキル使うよな？ つてことは持つてるんじゃないか？ リンカーコア!!？」
よくよく考えれば、下手な人間を襲うよりも確実では？

「上からいくつか悪魔の討伐依頼が来てるし…奴らを連れて行くか」

俺の方針は決まった。あとは今回の一件が無事に終わるのを祈るのみだ。

結果だけ言えば、今回の一件は無事に解決した…ようだ。

怪事件は無くなったし、原作キャラ達の動きも確認させた。これで一安心だろう。
…まあ、問題がないわけでもないが。

○翠屋○

「……で間違い無いか？」

ガスマスクを被った俺は横に立つ部下に確認を取る。

「はっ、間違いありません」

「はあくまさが誘拐事件の関係者の家族だったとは……まあいい」

俺と部下さらに数人のスーツ姿の男たちと共に、店の中に入る。

「(なかなか洒落た店だ)」

こんなガスマスクの小学生には合わないがな。

「にやっ？な、何ですかっ？」

「…」

リリカルなのはの主人公である高町 なのはが俺の奇抜な姿に驚き、誘拐事件の時の関係者である「高町 恭弥」が警戒する。

「初めまして、私は日本気象庁・指定地磁気調査部…通称JP'sの者です。高町 なのはさんと親御さんはご在宅でしょうか？」

「は、はい、私なのはです。ママとパパは裏にいますけど…」

「……なのは？」

店の奥からなのはの父親らしき男と母…いや、姉らしき女が出てくる。

「あー、娘が何か？というか貴方達は？」

「失礼。初めまして、私は日本気象庁・指定地磁気調査部…通称JP'sの者です。本日は娘さんと親御さんにお伝えすることと、お渡しするものがあり参りました」

俺は部下から一枚の書類を受け取り、彼ら彼女らの前で読み上げる。

「高町 なのは殿」

「は、はい!!?」

「貴殿は『ジュエルシード事件』において、類稀なる魔法能力を活かし、魔法石ことジュエルシードの回収に尽力。さらには、願望を歪んだ形とはいえ叶えるジュエルシードを悪用しようとした『プレシア・テストアロツサ』一行を撃退。日本国どころか世界的大災害を防いだ。よってここに最大限の感謝の意を示すものである。」

「――内閣総理大臣より」

「…え?」

高町　なのはの両親は呆けた顔を。本人は顔を青くしていた。

「ほぼ同文ではありませんが、防衛大臣やその他諸々からも感謝状があります。どうぞ」

呆けたままの高町夫婦に感謝状を手渡す。

「やらに…」

俺とはあるケースを部下から受け取り、それを開く。

「本来ならば国の施設で行うべきなのですが、事が事なので、ここで授与します。」

「――高町　なのは殿、貴殿に大勲位菊花大綬章を授与致します」

「なにこれ？」

受け取った高町　なのはは疑問符を浮かべているが、実はこれ日本の勲章の中でも上から2番目の勲章である。授与されるのは最近であれば国家元首レベルである。それだけ今回の一件を評価しているという証である。

「それとこれは我々の局長からです。まあ簡単に言いますと、魔法の教官として臨時教師をしてもらえないかという提案ですね。学業もあるでしょうから断つても構いませんとのことですよ」

俺とその部下達が姿勢を直して敬礼する。

「高町　なのは殿。貴殿の献身感謝します」

俺達はさっさとその場を立ち去る。あまり表立って話せないからさっさと帰るのだ。
…世界的危機を、魔法覚えたての小学生に救われた。JP, sは何もできなかつたな
んていえないからな。

「(さて、これで一先ず無印とかいうのは終わりだな)」

車の中に乗り込むと同時に、店の中が騒がしくなる。

「…ま、感謝はしてるよ。高町 なのは」

—————

エンド

第6章第4話

第6章

―リリカルなのは編―

第4話

―同族の後始末―

忘れかけているかも知れないが、俺は忘れてたが…事件で1つ残っていることがある。

そう、クソガキである。

時空管理局の奴ら、薄情にもクソガキ放置して帰ったのだ。いや、どうやら搜索はしてたようだが、ハーメルンが優秀過ぎたようだ。

○J P, s 海鳴支部○

「とういわけなんだが…どうしたいかね？クソガキ君よ」

「クソガキじゃなくて【アハト・マリオネット】だ」

「お前なんてクソガキで十分だ」

俺は牢屋の前でコーヒーを飲む。

「で、お前の処遇だが…ぶつちやけ、殺人未遂は言い過ぎにしても、傷害未遂くらいしか罪がないから、刑期軽いんだよな」

「へ？ずつと幽閉とかじゃ無いのか？」

「おいおい、俺らは一応は公務員だぜ？無法やつてるように見えても法律は守ってるさ。」

「…まあ、その法律が捻じ曲がる可能性はあるわけだが」

「…三権分立のない管理局も同じようなもんだしな」

珍しくクソガキがため息を吐く。悪態以外に吐き出すものがあるとは珍しいな。

「だが、お前は国籍も何もない。何ならこの世界中どこにもだ。出所しても行き先ないだろ」

「…？管理局に帰るに決まってるだろ？」

「見捨てた相手のところに戻るのか？前科者として？」

「うっ…」

前科者に偏見があるわけではないが（グレーテルの件もあるし）、ただでさえ前科というのは足枷になるのに、クソガキから得た情報通りの職場だとするならば…。

「間違いなくお前は使い潰される。それも早急にだ」

「…どうしろっていうんだ？俺に」

俺は内心でニヤリと笑う。

「リリカルなのはAs…分かるな？」

「ああ、リリカルなのはの続編だ」

「その続編ではリンカーコアの回収が必要だ。だが、俺には仕事がある。家の大黒柱で

ある以上は、大ぴらに動けない」

「…俺に手駒になれってことか？」

「その通りだ」

俺はクソガキを指差す。

「その場合は、お前は無罪釈放。前科ももちろんない。さらに俺らに操られていたことにすれば…」

「何事もなかったかのように、戻れる、か」

「ああそうだ。全てはノープログラムだ」

俺は手駒が欲しい。クソガキは前科が無い状態で帰りたい。悪く無い取引のはずだ。

「ぶっちゃけ、これを断られた場合は…今後の管理局との関係のために、悪化要因となるお前を秘密裏に始末する必要がある」

「ツッ？…はつきり言うな」

「転生者同士のよしみだ。武士の情けってやつだよ」

俺は懐から拳銃を取り出し、クソガキにその銃口を向ける。

「さあ、答えは簡潔に、そして迅速にだ。できればYESかはいで答えてくれると…そのなんだ。掃除の時間がなくなる」

「お前…人の命を何だと思つて…」

「殺人未遂をしたお前が言うなよ」

「俺は半殺しで済ませようとした!!? 殺そうとまでは…ツ!!?」

「んなことはどうでもいいんだよ」

俺は銃の安全装置を解除する。もはやクソガキに時間は残されていない。

「今更殺しなんて気にしねえんだよ。何人殺したと思つてる? 俺にとつちや今更なんだよ。」

「…さあ、皆幸せハッピーエンドを目指すか、未来もクソも無いデットエンドを迎えるか…10秒で決めろ」

「くっ…ツ!!?」

「10…9…8…7…6…」

ゆっくりと引き金を絞る。

「分かった。提案を受け入れる。だが、必ず全員でのハッピーエンドを目指すのが条件だ。誰一人として見捨てないと約束しろ」

「…くくく、あははは!!？」

俺は思わず笑う。クソガキの汚名は返上だな。

「いいだろう。その条件を受け入れよう。それと今後は（脳内）お花畑と呼んでやろう。
「それは余計なお世話だ」

安全装置をかけた銃を懐にしまい込む。

「いい隠れ家がある。しばらくはそこで様子を見ろ…3日後に我が家を見張っている猫を始末する」

「なツ!??あの使い魔姉妹を殺すのか!??約束を破る気か!??舌の根も乾かないうちに!??」

「と言いたいところだが、あの姉妹は管理局と深い関わりがあるんだろう?最低でも捕らえて行動を封じる。余計なチチャを入れられるのはよろしく無い」

「リーゼアリア」と「リーゼロッテ」。「ギル・グレアム」に長く仕える使い魔姉妹である……らしい。

この姉妹は今現在、闇の書を持つはやての監視をおこなっている。それはもちろん俺も含めている。

「お前は逃走を阻止しろ。お前の特典はこういう時に便利だ」

「…一応、俺もアリアとロッテには恩があるんだが」

「なら必死にやることだ。上手くいけば殺す必要はない」

「そういう問題でもないんだが…」

俺はお花畑の牢屋の鍵を開ける。

「それと先に言っておくが、お前がミスをしたり予定が狂ったりして、ハッピーエンドに至れない場合…俺は家族を優先するからな」

「分かった」

○翌日○

○月村邸○

「…うわあ」

「うざいぞお花畑」

ガスマスクをつけた俺とお花畑は、豪邸の中で紅茶を飲んでいた。

「いや、だってお前…猫達が近付かないどころか、お前を威嚇してるぞ」

「俺は大型犬派だから問題ない。妹が元気になったら大型犬…そうだな…グレートデンなんていいんじゃないか？」

「…もう何も言うまい」

「おい、可哀想な子を見るような目を向けるな。ぶち殺すぞ」

そんなこんなしていると、部屋に何人かの人間が現れる。

「ご機嫌麗しゆう、夜の一族の【月村 忍】殿。そして、世界的危機を救った英雄の兄君である高町 恭弥殿」

「全くご機嫌良くないけどね…」

忍がため息を吐き出す。

「なのはちゃんのことか貴方達J P, sの事とか…色々話を聞かせて貰うわよ」

「…まあそれ也需要でしょう」

俺はうんうんと頷く。

「我々J P, sは政府公認の霊的国防組織であり、日本国内の霊的事件やオカルト案件の解決。国外からの霊的オカルト的脅威の排除を主任務としております。

「……それと、憲法において、我々は靈的オカルト的事件に関して大きな権限を有しております」

「驚いたわよ……まさか普通にホームページあるんだもの……まあ、内容は全く違ったものだけ」

「氣象庁ですから」

絶対峰津院とか、一応は氣象庁所属つて覚えてないだろうなあ……。

「それで、高町　なのは殿についてですが……我々が把握していることは多くありません。魔法石という怪事件を起こす石を、時空管理局と呼ばれる組織と共に回収していたこと。またその魔法石を使用して、失敗すれば世界が終わる可能性もあった行為を行おうとした者達を、魔法の力で撃退した……というところでしょうかね？」

「怪事件……もしかして最近の爆発とかは……」

「ええ、その通りです。我々が隠蔽工作进行了ましたが、まだこの支部はできたばかりでして、その程度の隠蔽しかできませんでした」

実際動いてはいたのだが……人の口に戸は立てられない。

「その時空管理局ってのは？」

恭弥が俺に問う。

「我々の把握しているところによると、異世界からやってきた魔法を使う警察組織のようですが……」

「い、異世界？……というか、ですがって？」

「掴んだ情報によると、三権分立がないようでした……まあ、かなり強権的な組織のようです。働いている人間も、日本の法律で言えば未成年もいいところ……それこそ高町 なのは殿程度年齢の子供も普通にいるようです」

まあ、俺が言えることでもないが。

「まあ、その組織と敵対組織の技術力の関係上、異世界や異空間での戦闘が多かったようでした……情報は掴んでも、我々では手が出せなかったというのが今回の結論ですね」

「なのはちゃんから魔法技術を吸収して、今後の備えにする気かしらう？」

忍が鋭い視線を向ける。

「それに関しては、既に我が組織でも魔法技術の習得は完了しており、既に技術者により日本技術（悪魔召喚等）を組み込んだ日本式魔法を開発中です」

「んじや、何でなのには…」

「実戦経験者からの情報は貴重ですから」

さてと言って俺は立ち上がる。

「ご家族への説明は終わりました。我々も仕事がありますので、これでお暇させていただきます。おい、お花畑」

「あ、ああ」

猫と戯れていたお花畑を立たせる。

「ああ、それと…高町　なのは殿に釘だけ刺しておいて頂きたい」

「釘？」

「今回は我々が解決不可能であったために、解決した高町　なのは殿を評価したが…次は庇えない、とね」

「…」

「ああ、それとこの件を口外することは、J P ; sを敵に回すと判断して頂きたい。それでは」

俺達はその場を立ち去った。

—————

エンド